

都城市所在

ひらた
平田 遺跡 F地点・G地点

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5

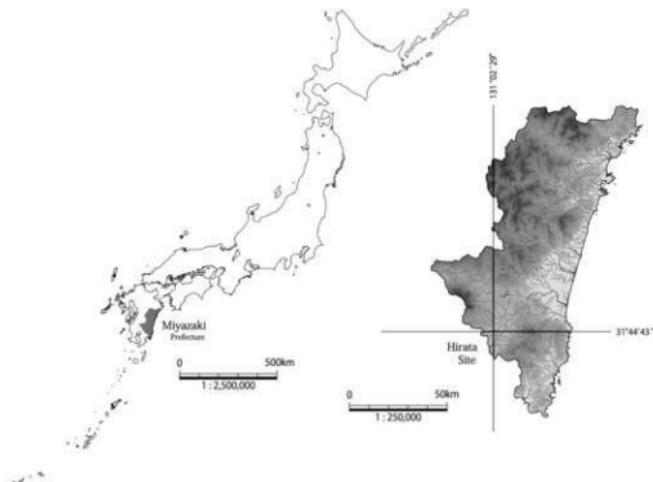
2019

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

ひらた
平田遺跡 F地点・G地点

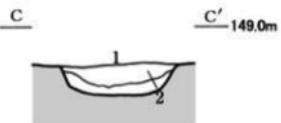
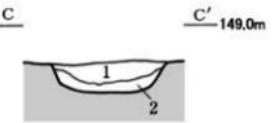
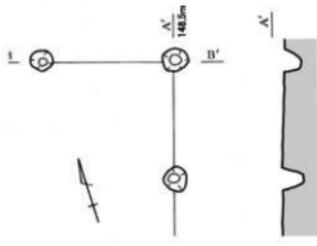
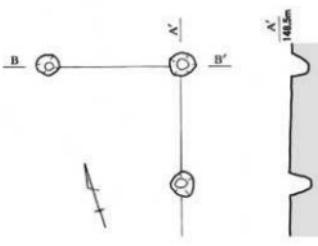
一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5



2019

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第247集 平田遺跡F地点・G地点 正誤表

誤	正
<p>20頁 第14図 右下 数字の位置</p> 	
<p>64頁 第50図 左上 標高の位置</p> 	



平田遺跡F地点・G地点遠景1(南西より)



平田遺跡F地点・G地点遠景2(南東より)



平田遺跡F地点・G地点調査区(モザイク合成)

序

宮崎県教育委員会では、平成27年度から平成28年度にかけて一般国道10号都城道路建設工事に伴い、都城市南横市町に所在する平田遺跡F地点・G地点の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する平田遺跡F地点・G地点は、隣接するD地点・E地点の発掘調査から12年の時を隔てて調査が行われました。調査の結果、弥生時代の堅穴建物跡や周溝状遺構などの遺構や弥生土器、石庖丁などの石器が確認されたほか、古代から中世にかけての土師器が出土し、文明年間（1471年）に降下したとされる桜島文明軽石により埋没した畠の畝跡や道路状・溝状の遺構なども確認されました。道路状遺構や溝状遺構は過年度の調査成果と繋がるものであることがわかりました。

今回の調査で確認された弥生時代の遺構や遺物は、南横市地区の地域的様相や都城盆地における弥生時代集落の展開を知る上で貴重な情報を提供するものとなりました。

この成果が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 長峯 勝志

例　言

1. 本書は、一般国道10号都城道路建設に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した平田遺跡F地点・G地点の発掘調査報告書である。
2. 「平田遺跡」は平成15・16年度に隣接地を都城市教育委員会と宮崎県埋蔵文化財センターが調査を行っており、今後名称等で混乱も予想されることから、同市教育委員会と協議し、都城市調査箇所を「平田遺跡A～C地点」、センター調査箇所を「平田遺跡D・E地点」に変更した経緯がある。
本遺跡はE地点の南側に接する箇所を平田遺跡F地点、平田遺跡隣接地としていた箇所を弥生時代の遺構・遺物の広がり等から平田遺跡G地点として報告を行う。
なお、本報告にあたり、調査時にF区・H区・I区と呼称し、記録していた箇所をF地点、G1区・G2区・K区とした箇所をG地点と変更する。
3. 発掘調査は、国土交通省九州整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 平田遺跡F地点・G地点の発掘調査の期間は、次のとおりである。

第一次調査（F区・G1区・G2・H区）	平成27年5月20日から平成28年3月18日
第二次調査（F拡張区・H区・I区・K区）	平成28年6月6日から平成29年2月21日
5. 現地調査における実測および写真撮影等の記録は、二方和也・徳原宏樹・長津宗重・橋本英俊（第一次調査）、恵利武馬・松浦朋彦・橋本英俊（第二次調査）が担当した。
6. 委託業務に関して、現地調査における基準点測量業務を株式会社旭総合コンサルタント、空中写真撮影業務を有限会社スカイサーべイ九州に、整理作業に伴う自然科学分析については株式会社古環境研究センターにそれぞれ委託した。
7. 本書に使用した遺物写真は橋本が撮影した。写真撮影にあたっては竹田享志の協力を得た。
8. 遺物および図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。そのうち図面の作成、実測、トレースは、主として橋本が整理作業員の補助を得て行った。
9. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『都城』・『庄内』を、周辺地形図は都城市作成の2千5百分の1図『国土基本図』を基に作成した。
10. 遺物観察表の土器等の色調および土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色帖』に拠った。
11. 本書で使用した方位は、磁北（M. N）と表記するもの以外は、国土座標第II系（世界測地系）座標北である。標高については海拔絶対高を示す。
12. 本書使用した遺構略記号は以下のとおりである。

S A………堅穴建物跡	S B………掘立柱建物跡	S C………土坑（土壤）
S E………溝状遺構	S F………井戸跡	S G………道路状遺構
S L………周溝状遺構		
13. 本書の執筆・編集は橋本が担当した。
14. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の概要	7
第1節 調査区の設定と経過	7
第2節 基本層序	10
第Ⅲ章 発掘調査の記録	12
第1節 F地点（F・H・I区）の調査	12
1 遺構・遺物の概要	12
2 縄文時代の遺物	13
3 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 壊穴建物跡（壠穴状遺構）	13
(2) 土坑	16
(3) 周溝状遺構	19
(4) 土器溜り	21
(5) 包含層出土の遺物	28
4 古代～近世の遺構と遺物	32
(1) 道路状遺構	32
(2) 小溝状遺構	36
(3) 中世の遺物	37
5 近世以降の遺構と遺物	37
(1) 挖立柱建物跡	37
(2) 土坑（土壤）	37
(3) 溝状遺構	42
(4) 井戸跡	44
(5) 近世の遺物	46
第2節 G地点（G1・G2・K区）の調査	57
1 弥生時代の遺構と遺物	57
(1) 壊穴建物跡（壠穴状遺構）	57
(2) 周溝状遺構	58
(3) 土器溜り	61
(4) 包含層出土の弥生土器	62
2 近世以降の遺構と遺物	63
(1) 挖立柱建物	63

(2) 溝状遺構	65
(3) 包含層出土の遺物	65
第IV章 自然科学分析	71
第1節 自然科学分析の概要	71
第2節 種実同定	71
第3節 放射性炭素年代測定	76
第V章 総括	79
1 繩文時代	79
2 弥生時代	79
3 中世～近世	80

挿図目次

第1図 平田遺跡および周辺遺跡分布図	4	第23図 F地点包含層出土遺物実測図(3)	31
第2図 平田遺跡周辺地形図	6	第24図 F地点古代～近世遺構分布図	32
第3図 平田遺跡F・G地点調査区割	7	第25図 B・E・F地点溝状遺構・道路状遺構分布図	33
第4図 F地点西側土層断面図	11	第26図 F地点1号道路状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図	34
第5図 F地点遺構分布図	12	第27図 F地点2号道路状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図	35
第6図 F地点縄文土器実測図	13	第28図 F地点小溝状遺構平面図・断面図	36
第7図 F地点1号竪穴建物跡平面図・土層断面図	14	第29図 F地点包含層出土遺物実測図(4)	37
第8図 F地点1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	14	第30図 F地点1号掘立柱建物跡平面図・断面図	38
第9図 F地点1号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)	15	第31図 F地点1～4号土坑平面図・断面図・出土遺物実測図	39
第10図 F地点2号竪穴建物跡平面図・土層断面図	16	第32図 F地点5・6号土坑平面図・断面図	40
第11図 F地点1号土坑平面図・土層断面図・出土遺物実測図(1)	17	第33図 F地点7～11号土坑平面図・断面図・出土遺物実測図	41
第12図 F地点1号土坑出土遺物実測図(2)	18	第34図 F地点12号土坑平面図・断面図	42
第13図 F地点1号土坑出土遺物実測図(3)	19	第35図 F地点1～5号溝状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図	43
第14図 F地点1号周溝状遺構平面図・土層断面図	20	第36図 F地点1～4号井戸跡平面図・土層断面図	44
第15図 F地点1号周溝状遺構出土遺物実測図	21	第37図 F地点4号井戸跡出土遺物実測図	45
第16図 F地点1号土器溜り平面図・断面図・出土遺物実測図(1)	23	第38図 F地点包含層出土遺物実測図(5)	47
第17図 F地点1号土器溜り出土遺物実測図(2)	24	第39図 F地点包含層出土遺物実測図(6)	48
第18図 F地点2号土器溜り平面図・断面図・出土遺物実測図(1)	25	第40図 G地点弥生時代遺構分布図	57
第19図 F地点2号土器溜り出土遺物実測図(2)	26	第41図 G地点1号竪穴建物跡平面図・土層断面図	58
第20図 F地点3号土器溜り平面図・断面図・出土遺物実測図	27	第42図 G地点1号周溝状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図(1)	59
第21図 F地点包含層出土遺物実測図(1)	29		
第22図 F地点包含層出土遺物実測図(2)	30		

第 43 図 G 地点 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 (2)	60	第 50 図 G 地点 1 号・2 号掘立柱建物跡平面図・断面図	64
第 44 図 G 地点 2 号周溝状遺構平面図・土層断面図	60	第 51 図 G 地点 1 号溝状遺構平面図・断面図・出土遺物 実測図	66
第 45 図 G 地点 2 号周溝状遺構出土遺物実測図	61	第 52 図 G 地点 2 号溝状遺構平面図・断面図・出土遺物 実測図	67
第 46 図 G 地点 1 号土器溜り平面図・断面図	61	第 53 図 G 地点 包含層出土遺物実測図 (2)	68
第 47 図 G 地点 1 号土器溜り出土遺物実測図	62	第 54 図 历年較正結果	78
第 48 図 G 地点 包含層出土遺物実測図 (1)	62		
第 49 図 G 地点近世以降の遺構分布図	63		

写真目次

写真 1 平田遺跡の炭化種実	75
----------------------	----

挿表目次

第 1 表 F 地点出土遺物観察表 (土器)	49	第 6 表 G 地点出土遺物観察表 (陶磁器)	70
第 2 表 F 地点出土遺物観察表 (陶磁器)	54	第 7 表 G 地点出土石器計測表	70
第 3 表 F 地点出土石器計測表	55	第 8 表 平田遺跡における種実同定結果	74
第 4 表 F 地点出土錢貨観察表	56	第 9 表 放射性炭素年代測定試料一覧	76
第 5 表 G 地点出土遺物観察表 (土器)	69	第 10 表 放射性炭素年代測定結果	76

写真図版目次

巻頭図版 1 平田遺跡 F 地点・G 地点遠景 1、2	1 号・2 号道路状遺構検出状況
巻頭図版 2 平田遺跡 F 地点・G 地点調査区 (モザイク合成)	1 号道路状遺構埋土断面
	1 号道路状遺構硬化面
図版 1 F 地点の調査 (1)	1 号・2 号道路状遺構完掘状況
平田遺跡 F 地点南側 (H 区・I 区)	図版 4 F 地点の調査 (4)
1 号堅穴建物跡検出状況	小溝状遺構 (晶歛跡) 検出状況
1 号堅穴建物跡遺物出土状況	小溝状遺構完掘状況
1 号・2 号堅穴建物跡完掘状況	1 号土壤墓半裁状況
図版 2 F 地点の調査 (2)	1 号土壤墓遺物出土状況
1 号周溝状遺構遺物出土状況	3 号土壤墓と 1 号土壤墓 (奥)
1 号周溝状遺構完掘状況	4 号土壤墓遺物出土状況
1 号土坑遺物出土状況	3 号・4 号溝状遺構土層断面
1 号土器溜り検出状況	6 号溝状遺構土層断面
2 号土器溜り検出状況	図版 5 F 地点の調査 (5)・G 地点の調査 (1)
甕出土状況	1 号～4 号溝状遺構完掘状況
石庖丁出土状況 1、2	3 号・4 号井戸跡半裁状況
図版 3 F 地点の調査 (3)	G 地点土層断面

- 図版 6 G 地点の調査 (2)
G 地点全景
1 号・2 号周溝状遺構遺物出土状況
2 号周溝状遺構器台出土状況
1 号土器溜り
1 号堅穴建物跡完掘状況
平田遺跡現地説明会の様子
- 図版 7 F 地点 包含層出土遺物 (1)・弥生時代 1 号堅穴建物跡出土遺物 (1)
- 図版 8 F 地点 弥生時代 1 号堅穴建物跡出土遺物 (2)・
1 号土坑出土遺物 (1)
- 図版 9 F 地点 弥生時代 1 号土坑出土遺物 (2)
- 図版 10 F 地点 弥生時代 1 号土坑出土遺物 (3)
- 図版 11 F 地点 弥生時代 1 号周溝状遺構出土遺物
- 図版 12 F 地点 弥生時代 1 号土器溜り出土遺物 (1)
- 図版 13 F 地点 弥生時代 1 号土器溜り出土遺物 (2)
- 図版 14 F 地点 弥生時代 2 号土器溜り出土遺物
- 図版 15 F 地点 弥生時代 3 号土器溜り出土遺物・包含層
出土遺物 (2)
- 図版 16 F 地点 包含層出土遺物 (3)
- 図版 17 F 地点 包含層出土遺物 (4)・溝状遺構・土壌墓
出土遺物
- 図版 18 F 地点 土壌墓・溝状遺構・井戸跡出土遺物
- 図版 19 F 地点 包含層出土遺物 (5)
- 図版 20 G 地点 弥生時代 1 号周溝状遺構出土遺物
- 図版 21 G 地点 弥生時代 2 号周溝状遺構出土遺物
- 図版 22 G 地点 弥生時代 1 号土器溜り出土遺物
- 図版 23 G 地点 包含層出土遺物 (1)・1 号溝状遺構出土
遺物
- 図版 24 G 地点 2 号溝状遺構出土遺物・包含層出土遺
物 (2)

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平田遺跡の発掘調査の原因となった都城志布志道路は、宮崎県都城市から鹿児島県曾於市を経由し、鹿児島県志布志市に至る全体延長約42kmにわたる地域高規格道路である。九州縦貫自動車道宮崎線と中核国際港湾志布志港及び東九州自動車道とを連結することで、都城・大隅生活圏をはじめ、広域の地域振興を支える、きわめて重要な道路として、平成6年12月、計画路線に指定された。この道路が整備されることで、防災対策としての機能、経済対策としての機能、医療対策としての機能の効果が期待されている。

都城志布志道路は、宮崎県側と鹿児島県側がそれぞれ約21kmで計画されており、宮崎県側の約21kmのうち、九州縦貫自動車道宮崎線の都城インターチェンジ（以下IC）～五十町ICまでの約13km区間を国土交通省が、五十町ICから県境までの約8km区間を宮崎県が施工することとしている。平成6年12月に路線の計画が始まり、平成9年5月7日付で宮崎県都市計画課から「都城道路の都市計画決定に関わる関係課との調整について」の依頼があり平成9年6月13日付で宮崎県文化財課が回答を行い、路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地13か所が確認されている旨回答を行っている。

埋蔵文化財の分布の照会が行われた後、五十町ICから北側を担当する国土交通省宮崎河川国道事務所と南側を担当する宮崎県とそれぞれの工区に応じて協議を行ってきた。協議に基づいた宮崎県文化財課の確認調査などを経て、現状保存が困難な箇所についてこれまで平田遺跡（平成15～16年度）をはじめ、順次記録保存のための発掘調査が行われてきた。

今回発掘調査が行われた平田遺跡F地点・G地点は、都城志布志道路南横市ICから都城ICを結ぶ約8.7km区間の国土交通省第2工区に位置している。平成25年度に文化財課による確認調査が行われ、畠跡や溝状遺構、掘立柱建物跡の一部とみられる柱穴などの遺構や弥生時代の遺物が多数確認された。これらの遺構・遺物が確認された9,600m²について発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要が生じた。これに基づき、国土交通省宮崎河川国道事務所からの発掘調査依頼により、宮崎県教育委員会が主体となって、平成27(2015)年5月20日～平成28(2016)年3月18日・平成28年6月6日～平成29(2017)年2月21日までの間、宮崎県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施された。

第2節 調査の組織

平田遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

【調査主体】宮崎県教育委員会

【調査機関】宮崎県埋蔵文化財センター

平成27年度 発掘調査・整理作業

所長	岩切 隆志
副所長兼調査課長	菅付 和樹
総務課長	上谷 和隆
総務課総務担当リーダー	安藤 忠洋
調査課調査第二担当リーダー	吉本 正典
調査課調査第二担当	橋本 英俊（調査・整理作業担当）

調査課調査第二担当 専門主事 長津 宗重（調査担当）

平成28年度 発掘調査・整理作業

所長	谷口 武範
副所長兼調査課長	菅付 和樹
総務課長	荒木 千恵美
総務課総務担当リーダー	副主幹 寺原 真由美
調査課調査第二担当リーダー	主幹 吉本 正典
調査課調査第二担当	主査 橋本 英俊（発掘調査・整理作業担当）
調査課調査第二担当	主査 恵利 武馬（発掘調査担当）

平成29年度 整理作業

所長	菅付 和樹
副所長兼総務課長	甲斐 久志
総務課総務担当リーダー	副主幹 寺原 真由美
調査課長	吉本 正典
調査課調査第二担当リーダー	副主幹 島木 良浩
調査課調査第二担当	主査 橋本 英俊（整理作業担当）

平成30年度 整理作業・報告書作成

所長	長峯 勝志
副所長兼総務課長	田中 礼子
総務課総務担当リーダー	副主幹 寺原 真由美
調査課長	吉本 正典
調査課調査第二担当リーダー	主幹 島木 良浩
調査課調査第二担当	主査 橋本 英俊（整理作業・報告書担当）

事業調整

平成27～30年度

宮崎県教育庁文化財課 主査 松本 茂

第3節 遺跡の立地と歴史的環境

1 地理的環境

平田遺跡は宮崎県都城市南横市町字平田に所在する。都城市は、宮崎県の南西部、東の鶴塚山系や北西の霧島山系の山々に囲まれた南北に細い都城盆地の中央部にあたる。東側の山地は急峻で起伏に富み流下する河川により麓は開析され、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜し、盆地の中央部を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県曾於市（旧財部町）を経て蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流下し、大淀川に合流している。大淀川の支流の一つにあたる横市川流域には河岸段丘と氾濫原が形成されており、現況は水田が広がっている。本遺跡は南横市町字和田に所在し都城市街地から北西に約3km、白鹿岳の裾野より発する横市川右岸に発達した低位段丘面にあたる横市段丘上に立地している。F・G地点

の標高は約148m～150mである。当該地は大きく3段に分かれ、上段部（低位段丘面1）から中段部（低位段丘面2）、下段部（沖積段丘面）にかけては水田として利用されている。なお、上段部の東側と西側および下段部東側では都城市教育委員会が県営経営体育成基整備事業に伴う発掘調査が実施されており、弥生時代中期末から後期の集落跡をはじめ古代・中世遺構が数多く確認されている。

2 歴史的環境

本遺跡が所在する横市川の周辺には、縄文時代早期から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。（第1図）

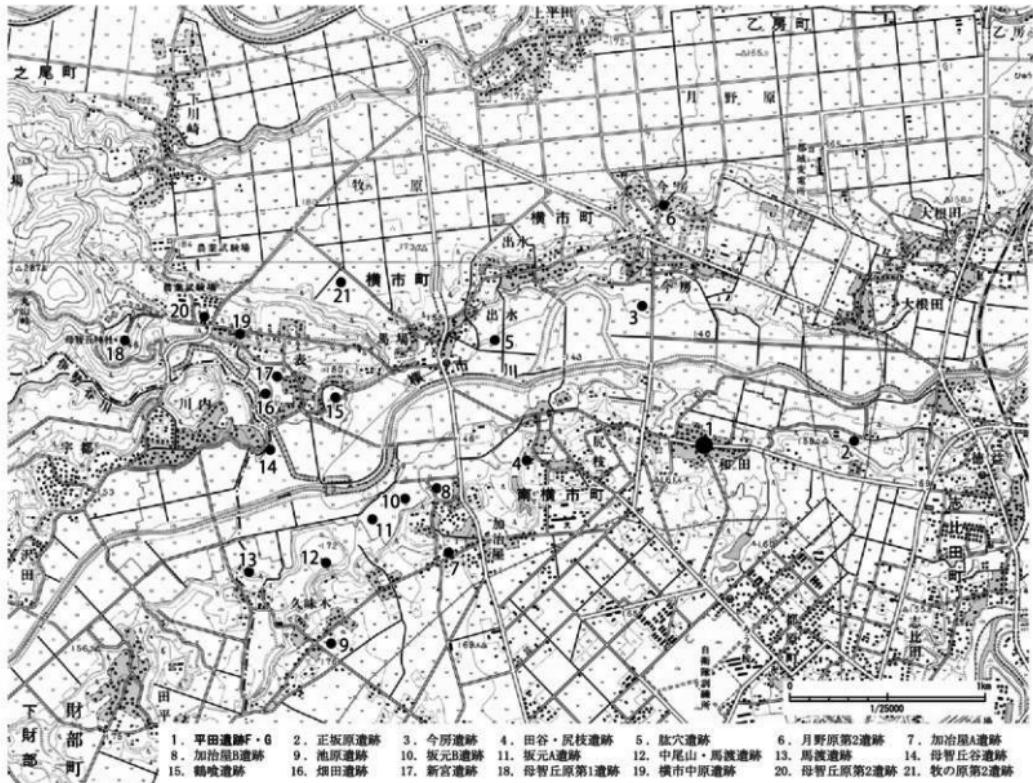
縄文時代の遺跡については、遺跡の南西部にあたる蓑原台地北端の緩傾斜地に所在する田谷・尻枝遺跡で、散石状の礫群とともに早期の円筒形土器や磨石が出土し、さらにその下部からは陥し穴が確認され、中期頃の御池降下軽石が堆積した陥し穴も検出されている。平田遺跡B地点や加治屋B遺跡では、集石遺構が確認されている。前期から中期の遺跡は少なく、星原遺跡で当該期の集石遺構が確認された程度である。一方で霧島御池軽石降下後の後期から晩期にかけての横市川流域では遺跡数が増加する。後期では横市川右岸の中位河岸段丘上に立地する正坂原遺跡で磨消繩文系土器、指宿式土器、貝殻文系の市来式土器が出土している。月野原台地南部の牧ノ原第2遺跡では該期の堅穴住居跡も確認されている。晩期に入ると、牧の原第2遺跡に隣接する横市中原遺跡で組織痕土器・孔列文土器や黒色磨研土器が出土し、蓑原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡では縄文時代晩期の土坑群が確認されており、それに伴う孔列文土器が出土している。横市川右岸の低位段丘に所在する坂元A・B遺跡では小区画の水田跡も検出され、田下駄状の木製品等も出土している。

弥生時代の遺跡に関しては月野原台地の南端に所在する月野原第2遺跡で瀬戸内系の回線文土器が出土したほか、母智丘山頂部の母智丘原第1遺跡や牧ノ原第2遺跡・平田遺跡B地点で中期後半頃の土器が確認されている。後期以降では、平田遺跡D地点・E地点で堅穴住居跡や周溝状遺構のほか特徴的な遺物である鉄矛の出土が確認されている。加治屋B遺跡で後期末の堅穴住居跡や周溝状遺構、後期後半から終末期にかけての堅穴住居跡も確認され、同台地上の池原遺跡も当該期の遺物が出土している。横市川左岸低位段丘に所在する今房遺跡でも当該期の堅穴住居跡や周溝状遺構などの遺構や遺物が確認されている。横市川流域では後期後半から終末期にかけて集落跡が多数みられる。

古墳時代では、横市川左岸の低位段丘に所在する鶴喰遺跡がある。68基の堅穴住居跡とともに都城市域では初めてのカマドを伴う堅穴住居跡が確認された後期集落遺跡である。完形の馬蹄など豊富な遺物が出土している。同時期とみられる堅穴住居跡は月野原台地南部の母智丘原第2遺跡でも確認されている。当該地域一帯では後期以前の遺跡は確認されていない。

横市川流域は古代において日向国諸郡郷部郷に属すると考えられ、11世紀前半に成立した「島津荘」の一円莊に含まれる。また、古代末から中世初頭の遺跡が点在し、旧日向国から旧大隅国、旧薩摩国へつながる古代ルートの存在が想定されている。古代では、蓑原台地北端の舌状部に立地する中尾山・馬渡遺跡で掘立柱建物跡と墨書き土器、越州窯青磁、綠釉陶器などの多量の遺物が出土している。また、鶴喰遺跡や牧ノ原第2遺跡、母智丘第1遺跡などでも当該期の遺物が出土している。

中世については、集落跡やその生産基盤となる水田跡・畑跡の生産遺跡のほか山城などが多く確認されている。横市川下流域の正坂原遺跡では、12世紀から15世紀後半頃にかけて永続的に営まれた集落跡が確認され、桜島文明軽石降下により埋没した小溝状遺構（畠跡）も検出されている。横市川左岸の低

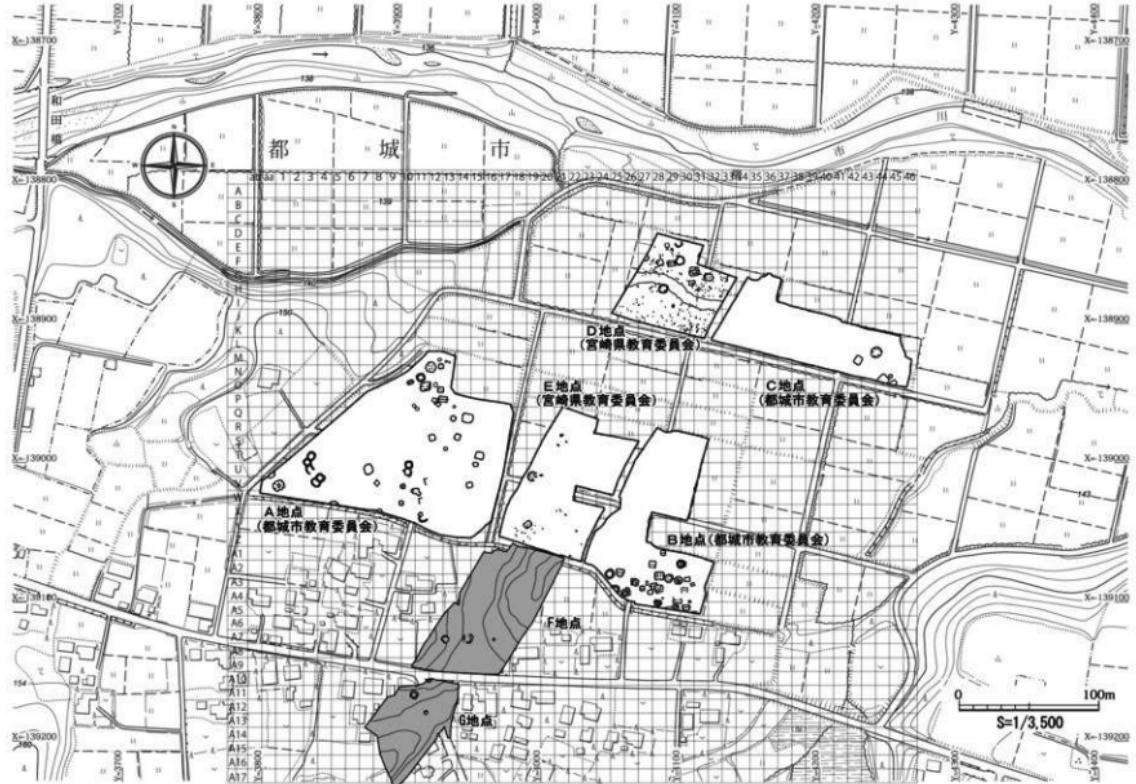


第1図 平田遺跡および周辺遺跡分布図

位段丘から低地にかけては、畠田遺跡・母智丘谷遺跡・鶴喰遺跡・肘穴遺跡・今房遺跡などで水田跡が確認されている。の中でも鶴喰遺跡では大量の土師器・舶載磁器類の出土のほか柱穴に礎石を伴う大型掘立柱建物跡や回廊状構造なども検出されている。また、宮崎県内では初例となる火山災害（桜島文明降下軽石）を被った水田跡が確認されている。鶴喰遺跡の北西部には、中世城郭である新宮城跡があり、空堀や土塁が確認されている。

【参考・引用文献】

- 遠藤尚1980 「地形区分」『土地分類基本調査 都城』宮崎県
都城市史編さん委員会1997 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市
都城市史編さん委員会2005 『都城市史 通史編 中世・近世』都城市
都城市教育委員会1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内中央部)』都城市文化財調査報告書第5集
都城市教育委員会1993 『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第25集
都城市教育委員会1983 『鶴喰遺跡』都城市文化財調査報告書第445集
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『牧ノ原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集
都城市教育委員会 2000『横市地区遺跡群 肘穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第50集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・義原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集
都城市教育委員会 2001『横市地区遺跡群 馬渡遺跡(第2次調査)・坂元A遺跡』都城市文化財調査報告書第55集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡・畠田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002『鷲尾遺跡・坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集
都城市教育委員会 2002『横市地区遺跡群 江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡(第1次調査)』都城市文化財調査報告書第58集
都城市教育委員会 2003『横市地区遺跡群 加治屋B遺跡(第2次調査)・星原遺跡』都城市文化財調査報告書第60集
都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『宇都第3遺跡・横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集
都城市教育委員会 2005『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第68集
都城市教育委員会 2006『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集
宮崎県埋蔵文化財センター 2007『平田遺跡D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
都城市教育委員会 2008『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点(第1分冊 A地点・B地点)』都城市文化財調査報告書第87集
都城市教育委員会 2008『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点(第2分冊 C地点・自然科学分析)』都城市文化財調査報告書第87集



第2図 平田遺跡周辺地形図

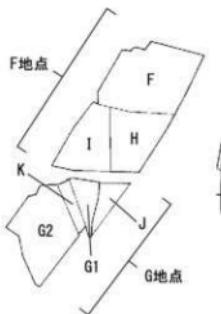
第Ⅱ章 発掘調査の概要

第1節 調査区の設定と経過（第3図）

平田遺跡では、平成15・16年度に都城市教育委員会が横市地区県営経営体育成基盤整備事業に伴いA・B・C地点の発掘調査が実施された。また、宮崎県埋蔵文化財センターが一般国道10号都城道路の建設に伴ってD・E地点の発掘調査を行い、既に発掘調査報告書が刊行されている。その中で、両調査区域を網羅するように、10m×10mグリッドが設定されていることから、今回の調査においてもその方法を踏襲した。起点は世界測地系による国土座標（X=-138800、Y=3810）である。東西方向に整数、南北方向にアルファベットを付したもの組み合わせた（一部アルファベットおよび整数の組み合わせとなっている）。調査区の設定にあたって平田遺跡E地点の南隣をF地点、南側の市道志比田和田線を挟んでG地点（周知遺跡である平田遺跡の隣接地）として調査を行うこととした。平田遺跡（2次）発掘調査は平成26・27年度にかけて実施した。平成26年度は、E地点の南隣をF区、都城市道志比田和田線を挟んで南側で、市道都原和田線東側をG1区、西側をG2区と設定した。しかし、諸般の事情によりF区南を拡張することとなり、本来F区として調査すべきところをH区と呼称することとなった。平成27年度は再びH区・I区、市道都原和田線を挟んで南側G1区とG2区の間の市道部分をK区とすることとなった。またH区は弥生土器集中箇所や石庖丁2点をはじめ多数の遺物が出土していたにも関わらず不完全な状態のまま、当該年度の調査を中断せざるをえない状況となった。その結果、今回の報告にあたりF地点（F区・H区・I区・H拡張区を統合）・G地点（G1区・G2区・K区を統合）としたが、記録類の整理に時間を要することとなった。なお、F地点北側（旧F区）の調査を行い、中央部に埋没谷の地形が確認されたが、F地点南側にあたるH・I区は畜舎の基礎等による削平のため、調査区間の等高線をつなぐにあたって谷の痕跡が不明瞭となった。調査は重機による表土の除去後、遺物包含層である黒色土（Ⅲ層）からの掘り下げを人力で行った。また、調査区外周壁側に排水を兼ねてサブトレーンチを設定して掘削し、旧地形の傾斜と土層の堆積状況の確認を行った。遺構検出は御池軽石層の漸移層である黒褐色土（Vb）層上面で行ったが、黒色土が厚く残存していた東側部分では黒色土中で遺構検出が可能であった。遺物は通し番号を付け、随時トータルステーションを用いて取り上げを行った。遺構については、検出後に通し番号（S1、2、3・・・）を付し写真撮影を行った後、断ち割りを行い平面的に掘り下げる。断面観察によって、風倒木や地形的な浅い崖みと考えられるもの等については、欠番とした。調査区の統合に伴い調査段階とは遺構番号が変更になったものもある。

1 1次調査

1次調査は平成27年5月20日から現地での設営等を開始し、平成15・16年度調査終了したE地点にプレハブ・器材庫等を設置し、調査はF区・G区（G1区・G2区）・H区を対象として実施した。重機による表土剥ぎはF区・G区を同時並行で行った。F区では表土下50~70cmに黒色土層の堆積が認められ、部分的に文明降下軽石層の堆積がみられた。G区は広範囲にわたり御池降下軽石まで削平されており、包含層となる黒色土の残存が認められなかったため、G2区については北東側を中心に調査を進め



第3図 平田遺跡F・G地点調査区割

ることとした。発掘作業員休憩棟や駐車場があるF区とG区の間の都城市道志比田和田線は交通量が多く危険を伴うことから、F区の調査を先んじて行い、調査員が記録作成を行う間にG区の調査を再開することとした。F区では中世から近世の溝状遺構2条が検出され、それに伴って青磁・土師器が出土した。底面に波板状の硬化面があることから道路状遺構と認定した。また、桜島文明降下軽石を埋土にした小溝状遺構（島跡）が検出された。標高の高い北東部では寛永通宝を副葬した近世墓が確認された。G区の調査では、弥生時代後期後半の周溝状遺構が2基検出され、溝から壺・甕・器台などの弥生土器が出土した。6月1日(月)から作業員による発掘作業を開始したものの、降雨による調査区の冠水にともなう排水作業等に追われ、調査できたのは6日間であった。以下に1次調査の日誌抄を記す。

7月10日(金)：調査区のジョレン掛け作業。F区は東から西にかけてと、南から北にかけて谷状の地形が確認された。小溝状遺構を検出。

7月15日(水)：G区の竹林が伐採されたため隣接地への土砂流失防止策を講じた。

8月4日(火)：F区でE地点のS E 3、S G 4・5に続く可能性がある文明降下軽石に覆われた溝状遺構2条(S 1・S 2)を検出。

9月7日(月)：G 1区、G 2区調査再開。

10月8日(木)：G 2区土器集中箇所の直下で周溝状遺構1基検出。

10月19日(月)：空中写真撮影（古代から近世面）。

10月24日(土)：F区西側Va層面で弥生後期後半の土器が集中する箇所が検出された。周辺から磨製石鎌や打製石斧が出土。10月24日(土)横市地区ふれあいウォーキング来跡（南横市地区まちづくり協議会主催）・都城市立西小学校教諭・児童が来跡。

11月4日(水)：隣接する田の稲刈りが終了し、重機でF区東側部分を拡張、同時にE地点の遺構との繋がりを確認するため北側を拡張。S 1(S G 1)、S 2(S G 2)の延長を確認。

11月26日(木)：拡張したF区東側でII層下に黒色土の残存を確認。寛永通宝やガラス玉等を副葬した土壙墓を検出。

12月22日(火)：空中写真撮影（弥生時代面）。

1月7日(木)：G 1区調査区北西端で周溝状遺構の一部検出。

1月20日(水)：F区中央（埋没谷の上部にあたる）でVI層（御池降下軽石）下の掘削。VII層（鬼界アカホヤ火山灰層）下のX層（褐色粘質土）で梢円押型文土器小片が出土。

2月8日(月)：F区埋戻し開始。

2月10日(水)：H区コンクリート基礎・ブロック撤去開始。基礎下に畜舎尿層。

2月17日(水)：H区の産業廃棄物を調査区外へ移動し、表土除去開始。

2月24日(水)：G区埋戻し開始。

2月26日(金)：H区のVa層で弥生土器集中箇所2か所を確認。

3月2日(水)：H区V層の遺物取り上げ開始。

3月8日(火)：遺物の取り上げと土器溜り実測開始。

3月11日(金)：埋戻し終了。

2 2次調査

2次調査は、平成28年6月6日（月）から開始した。調査はH・I・K区について行った。なお、J区（680m²）については、文化財課による確認調査の結果、包含層の広がりが確認されなかったことから本調査範囲から除外した。前年度に中途となっていたH区の調査区壁面が崩落、汲み取りが行われていないままの豚舎の尿槽が未解決の状態がみられた。重機により1区の東側から表土剥ぎを行った。畑の耕作や樹木の植栽等によりIVa層（黒色土）の一部まで削平を受け、中世から近世までの包含層の残存状況は良好ではなかった。そのため、表土下約50cmで弥生時代の包含層であるVa層に達する。以下に2次調査の日誌抄を記す。

6月8日（水）：H区のコンクリート等産業廃棄物の仕分け作業と駐車場予定地の整地。

6月17日（金）：1次調査のF区にプレハブ・器材庫等を設置。

6月20日（月）：作業員で調査区周辺の安全対策を施す。24日（金）より掘削を開始。排水を兼ねたサブトレンチを調査区周間に設定し昨年度の土層堆積状況との対比。I区南壁で弥生土器が集中する箇所（S C 1）を確認。

7月1日（金）：文化財課によりJ区の確認調査。

7月7日（木）：H区、I区で土器集中箇所を確認。H区のものは昨年度土器集中箇所の一部の可能性。

10月20日（木）：空中写真撮影（遺跡全景・H・I区弥生時代から近世面）。

10月25日（火）：I区において周溝状遺構1基、竪穴建物跡1基検出。

11月2日（水）：空中写真撮影（H・I区弥生時代面合用）。

11月10日（木）：K区の調査を行うにあたり、都城市水道局よりK区（都城市道都原和田線）下には管径300mmの水道管が埋設されており迂回路による付け替えは「不断水施工」となるため2～2.5か月の期間を要するとのことであり、今年度中の調査終了は困難となることが打診された。次善の策として都城市水道局と協議の上、水道管の耐震耐圧を考慮し掘削範囲を管から離して設定することとなつた。また、国土交通省の工事の関係で、F地点からG地点へ事務所・器材倉庫等の移設の必要性が生じた。移転先は窪地のため、整地を行う期間、作業を中断することとなり、調査員で竪穴建物跡等の掘削と記録作成を行った。また中断期間中に道路施工業者が市道都原和田線のアスファルト撤去と一部の表土剥ぎ取りを行うこととなり、12月下旬に事務所等の移設を行った。

11月12日（土）：横市地区を対象に平田遺跡現地説明会を行った。「第18回横市ふれあいウォーキング」の一環としても計画され、参加者は80名。

平成29年1月10日（火）：K区の調査を開始。包含層は道路の基盤等により削平され、Va層からの調査。

1月11日（水）：1次調査G1区で確認されていた周溝状遺構の続きを確認。この箇所で遺物の出土はほぼ認められず。

1月13日（金）：1次調査G2区で確認されていた竪穴建物跡の約1/2を検出。隅丸方形の遺構として完掘。遺物の出土はなし。

H・I区の調査では弥生時代後期後半の花弁状住居跡1基、周溝状遺構1基、竪穴状遺構1基、土坑1基が検出され、甕・壺・高杯・器台等の弥生土器が出土した。また、近世から近代にかけての溝状遺構3条、井戸跡4基が検出された。K区の調査では弥生時代後期後半の周溝状遺構1基、竪穴状遺構1基が検出された。また、近世から近代の溝状遺構2条が検出された。H・I・K区において調査

区の10%程度についてVI層以下X層までの掘削を行ったが遺構・遺物は確認されなかった。

1月23日(月)：空中写真撮影（K区）。

1月31日(火)：人力による下層確認調査。

2月17日(金)：重機による埋戻し終了。

第2節 基本層序

F地点の土層堆積状況は古土および近代・現代の耕作土、豚畜舎のため良好な堆積とはいえない。また、地下水位が比較的高いことなどから現在でも井戸を利用している家屋が多数みられる。

調査区北西側の一部でIII層の文明降下軽石層（15世紀後半頃に鹿児島県桜島噴出）のわずかな堆積が認められ、ほぼ等間隔で半月状に残存していることから埋没した畠の畝間と判断した。

調査区北東部分（B地点側）でバミスをほとんど含まないやや粘性のある黒色土の堆積が認められ、近世土坑墓の埋土の一部となっている。調査区全体に共通して認められたのはIV層黒色土およびV層の黒褐色土である。V層はVI層の御池軽石（4,200年前頃、霧島御池より噴出）を含むが、ほとんど粘性をもたない。弥生時代の遺物包含層である。御池軽石の含有率でVa、Vbに細分している。弥生時代の遺構検出面の大部分はVaとVbの境界付近であり、一部IV b層とVa層の境で検出できたものもある。

I層：表土。層厚は30～80cmを測る。2枚の水田基盤層が認められ、鉄分の沈着状況により3層（a、b、c）に細分した。灰黄褐色砂質土。

II層：旧耕作土。（a、bに細分可能）調査区西壁（第4図）で層厚約20cmを測る。1cm以下の白色軽石（文明軽石）がまんべんなく含まれ、弱い粘性を帯びる黒褐色土。

III層：文明降下軽石層。0.5cm程度の軽石を主体とする。調査区内での堆積はF地点の北側に部分的な堆積が認められ、G地点では家屋の造成等の影響で残存が認められない。層厚は約5～10cmを測る。

IV層：黒色土。やや粘性があり2層（a、b）に細分される。a層は白色軽石を僅かに含み、b層は御池軽石が微量含まれる。a層では中世の遺物とそれ以降の遺物が出土し、b層では主に古代の遺物が出土している。部分的には混在する箇所もみられ、弥生の遺物も少量含まれていた。層厚は、a層約10cm、b層約15～30cmを測る。弱い粘性がある。

V層：黒褐色土。シルト質である。上部から下部にかけてVI層の御池軽石（黄色軽石）を含む割合が高くなり下部は褐色を呈する。御池軽石を含む割合によりVa層（小量）、Vb層（多量）に細分。

層厚は50～80cmを測る。Va層は弥生時代の遺物包含層である。土層堆積が良好な箇所ではVa層は更に細分化できる可能性がある。Vb層はVI層（御池降下軽石）との漸移層にあたり硬質である。

VI層：御池軽石層。黄色を呈す。トレント掘削の結果、層厚1.3～2mの堆積が確認された。G地点では、御池軽石除去作業中から湧水がみられた。

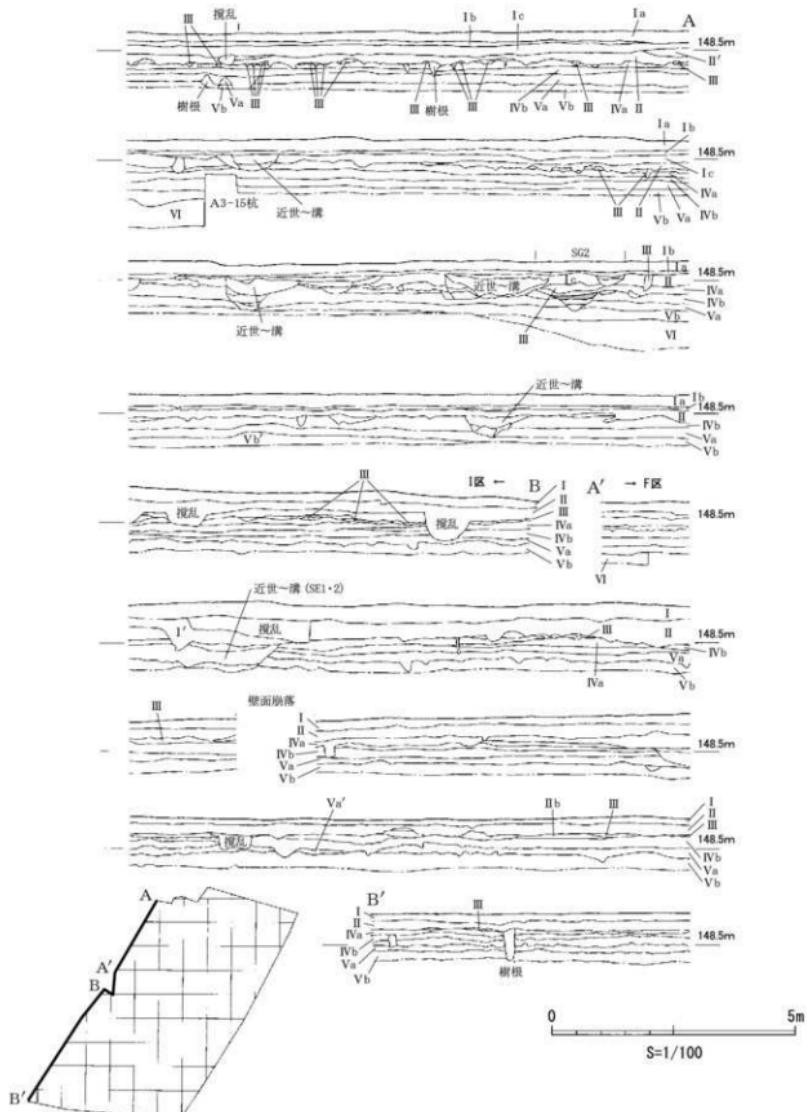
VII層：黒色粘質シルト土。若干水分を含み粘性が強い。

VIII層：鬼界アカホヤ火山灰層（約6,700年前に鬼界カルデラより噴出）

IX層：黒褐色シルト土。

X層：褐色粘質土（桜島P11火山灰を含む）。

XI層：暗褐色粘質シルト土。



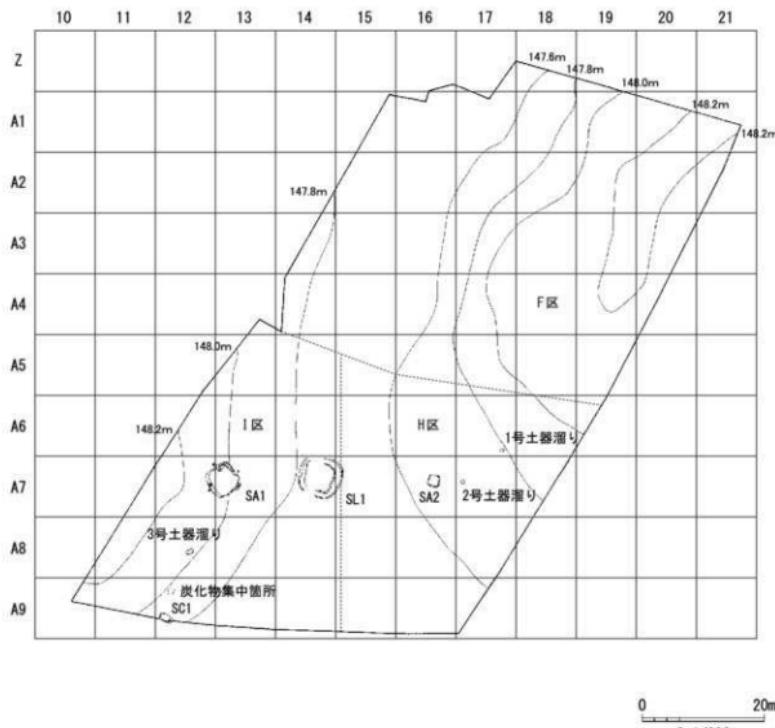
第4図 F地点西側土層断面図

第Ⅲ章 発掘調査の記録

第1節 F地点（F・H・I区）の調査

1 遺構・遺物の概要（第5図）

F地点の調査面積は約6,000m²で、横市段丘上の標高約141～148mの低位段丘面に位置する。調査区中央付近に南西方向から北東方向にかけてE地点に続く埋没した谷状の地形が認められる。調査区北西側（谷の北西側）A1～16グリッド付近に文明軽石が埋土となる近世の小溝状遺構群が検出された。また古代から中世と推定される道路状遺構2条、近世から近現代にかけての掘立柱建物跡1棟、溝状遺構6条、井戸跡4基が確認された。一方、谷の東側（調査区北東）ではII層下位に白色軽石層をほとんど含まない弱い粘性のある黒色土の堆積がみられ、この層に由来すると考えられる埋土の土壤基5基が確認された。谷の頂部にあたる調査区南西側で御池軽石層（VI層）と黒色土層の漸移層である暗褐色土層（Vb層）上面から弥生時代後期後半頃の堅穴状遺構1基、周溝状遺構1基、土坑1基、土器集中箇所3か所が検出された。結果として、平田遺跡A・B・C・E地点を含め当時の集落の広がりをうかがい知ることができた。

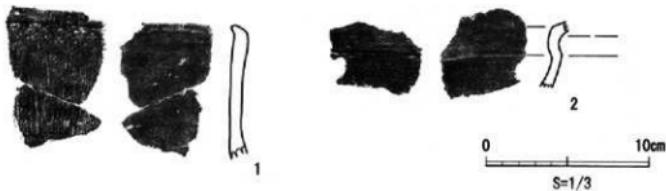


第5図 F地点遺構分布図

2 繩文時代の遺物（第6図）

調査区南東側（旧H区）のV層中から縄文後期後葉～晚期前葉に属すると考えられる土器1、2が出土している。

1は深鉢、2は浅鉢で内外面ともに丁寧なナデないしはミガキ調整が施され平滑に仕上げられている。内外面ともに黒色化している。調査区の北東にあたる平田遺跡B地点で当該期の住居跡や土坑が検出されている。家屋や畜舎の基礎により大幅に搅乱を受けた箇所で確認されており、遺構等は認められなかった。また、摩耗した小片のため図化しなかったが、調査区中央付近で下層確認のため設定したトレーンから梢円押型文土器の小片が確認された。埋没谷中のX～XI層での出土。IX層中位あたりで湧水がみられたことから立地として、遺構の広がる可能性は少ないと考えられる。



第6図 F地点縄文土器実測図

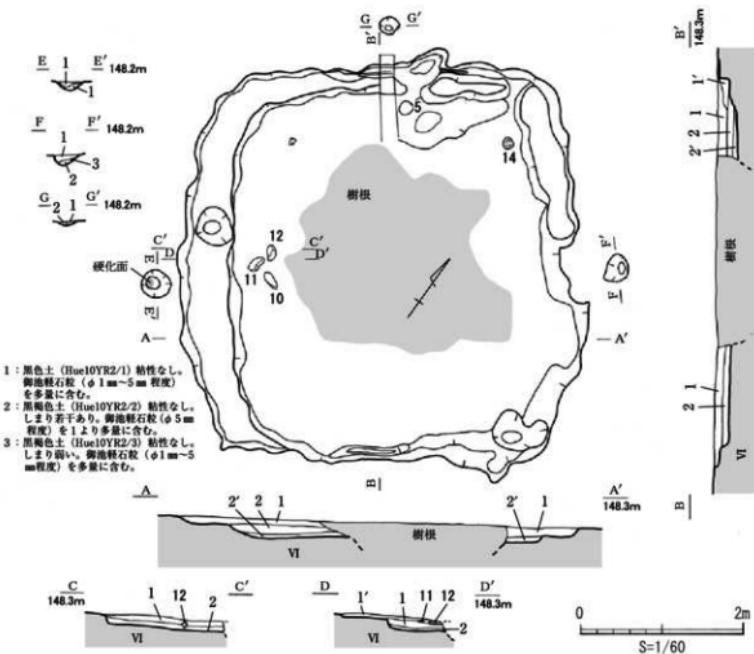
3 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、堅穴建物跡1基、周溝状遺構1基、土坑1基、土器溜り3基、堅穴状遺構1基が確認された。堅穴状遺構を除き調査区南西側、中央部にある谷部の西側に集中している。遺構は後期後半に属するものと考えられる。堅穴状遺構については、立地が谷の北東側にあり、遺物も土器小片1点が出土したのみで詳細な時期は不明である。4号土器溜り周辺から2～5mm程度の炭化物が集中する箇所がみられた。1号堅穴建物跡（S A 1）は大樹により遺構中央の大部分に搅乱を受け、1号周溝状遺構（S T 1）は南北方向に延びる近世～近現代にかけての溝状遺構に切られ残存状態は良好とはいえない。S A 1からは頸部付近に線刻のある壺が出土している。

（1）堅穴建物跡（堅穴状遺構）

1号堅穴建物跡（S A 1 第5・7図）

調査区南西側（旧I区）A 7-13グリッド杭付近において検出された。当初、御池軽石が不整な梢円形状に広がっていることから風倒木の可能性を考えたが、周囲を精査していく中で、不明瞭ながら平面プランが確認された。残存状況は良好とはい難く、検出面からの深さは20cm程度である。長軸5.0m、短軸4.84mの不整な方形基調で、東側・西側が掘り残される形で2か所に間仕切り状の突出壁をもつ。中央部は樹木根の影響で3m×2.5m、深さ50cm以上（御池軽石層の崩落の危険があったため掘削を断念）の範囲を消失している。検出状況や土層断面から判断するとVIIb層上部から掘り込まれており、埋土の上部にはVIIa層の堆積が認められる。埋土は2層に分層でき、1層が基本土層のVIIa層に相当すると考えられる。2層下部にわずかに貼床の痕跡が認められた。中央部付近を消失しているため柱穴等の存在は不明である。

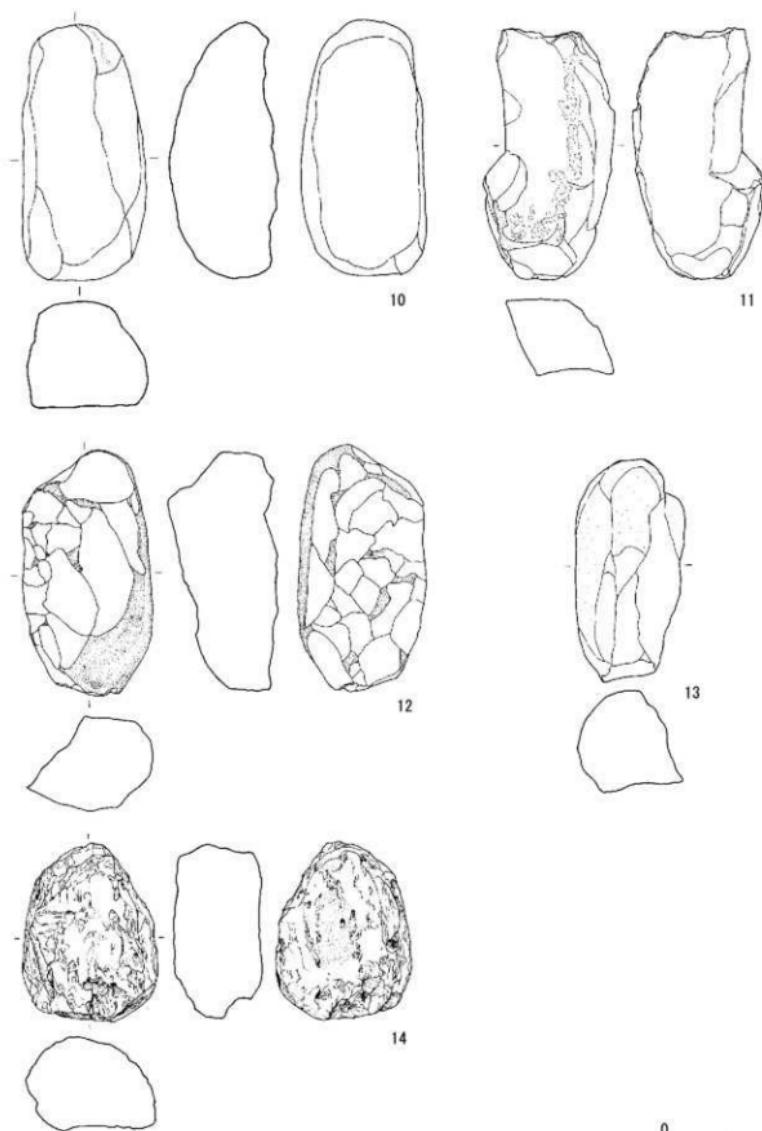


- 1: 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘性なし。
御池軽石粒 ($\phi 1\text{mm} - 5\text{mm}$ 程度)
を多量に含む。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 粘性なし。
1: 黒褐色土 (Hue10YR2/1) 御池軽石粒 ($\phi 5\text{mm}$ 程度) をより多量に含む。
- 3: 黑褐色土 (Hue10YR2/3) 粘性なし。
しまり弱い。御池軽石粒 ($\phi 1\text{mm} - 5\text{mm}$ 程度) を多量に含む。

第7図 F地点 1号竖穴建物跡平面図・土層断面図



第8図 F地点 1号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



0 10cm
S=1/4

第9図 F地点1号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

建物跡の外側に3か所のピットが認められ、南側には検出されなかった。深さは7~15cmで、西側のピット底面には硬化面が認められた。

遺物は、壺(3~5)、高杯(6・7)、小型の鉢形土器(8・9)が出土している。5は底部が一部欠損しているがほぼ完形の壺である。肩部付近に2本の弧状の線刻があり、周囲に明瞭な黒斑が認められる。外面は工具ナデの後、丁寧なナデ調整が施される。胴部中央やや上部に最大径をもつ。6は高杯の杯部である。胴部からゆるやかに屈曲しながら口縁にいたる。内外面ともにミガキ調整が施されている。8は胎土が粗く口縁部はややいびつである。内外面ともに工具ナデ調整、底部外面に黒斑がみられる。9の口縁部はややとがり気味で内湾しながら小さめの底部にいたる。西側壁際には長さ15cm程の礫が3個(10~12)並べて置かれていた。すべて砂岩製である。11のみ表面に敲打痕を残し、10・12は礫面を残す。礫には煤等の付着は認められない。自然面が残る礫13も出土している。14は軽石製品である。底面は平坦に加工されている。

2号竪穴状遺構 (S A 2 第5・10図)

A 7~16グリッドに位置する。当初は不整形の土坑と考えたが、南北2.0m、東西1.9mの平面プランが方形を呈す竪穴状遺構と捉えられた。検出面からの深さは0.15mを測る。遺構北東と南東側の壁際に径10~15cmの小ピットが認められた。ピットは中央側から壁際に向かって掘削されていた。遺構の埋土は単一の黒色土で黄褐色軽石を多く含む。張り床等の痕跡は確認できなかった。北側の小ピット付近で弥生土器と考えられる遺物が出土したが、小片のため、遺構の詳細な時期は不明である。

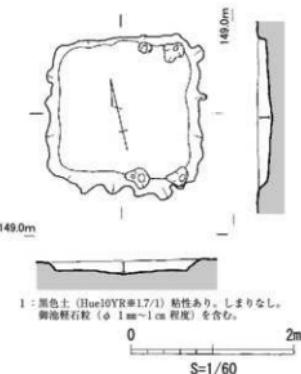
(2) 土坑

1号土坑 (S C 1 第5・11図)

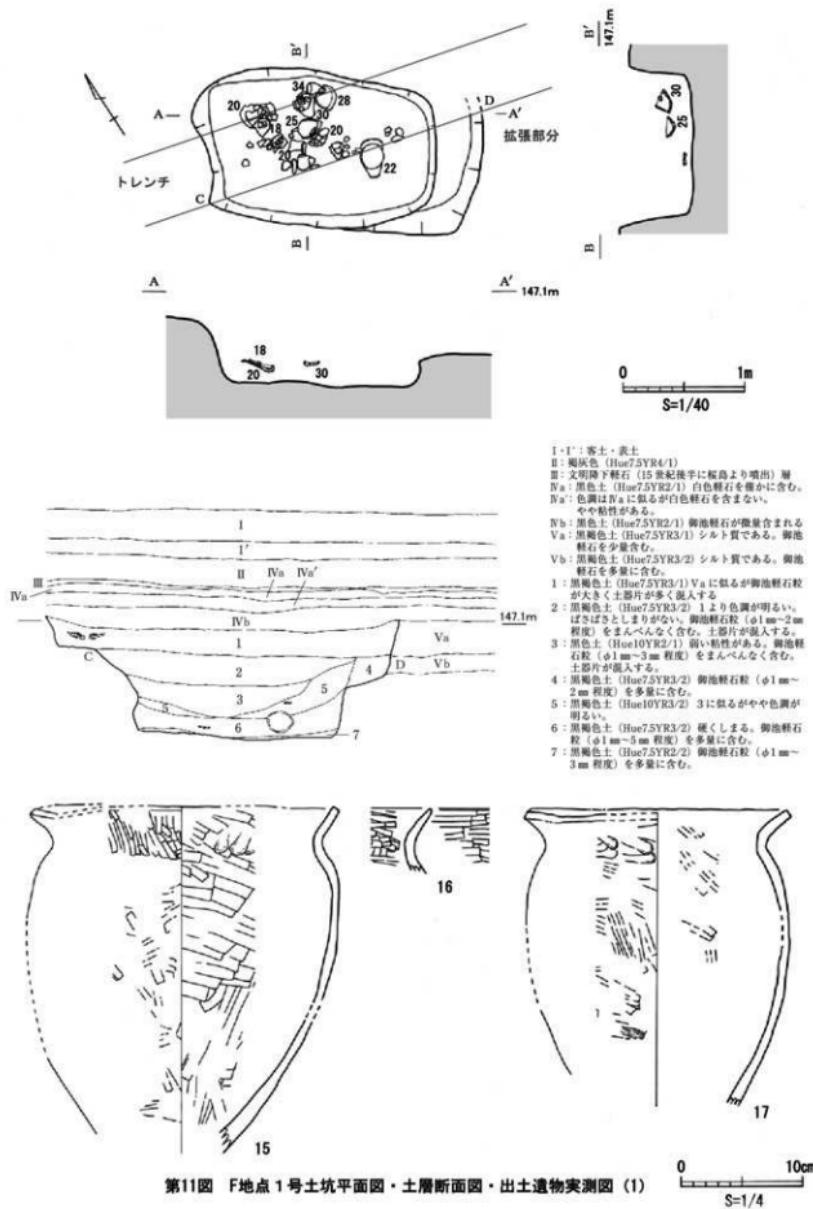
1号土坑は調査区南側(旧I区)A 9~12グリッド付近で確認された。調査区の土層観察用に設定したトレンチ掘削中に検出された。遺構の南側の一部が都城市道志比田和田線との境界近くに延びることが確認されたため、調査終了後の埋戻し直前に追加の掘削と記録作成を行った。当初、調査区の土層断面での観察や掘り込みに段差をもつことなどから竪穴建物跡の可能性を考慮したが、土坑であることが確認された。

壁面土層のVa層上部から掘り込まれている。平面プランは、長軸2.3m、短軸1.4mの楕円形、断面は深さ0.6mの台形を呈する。

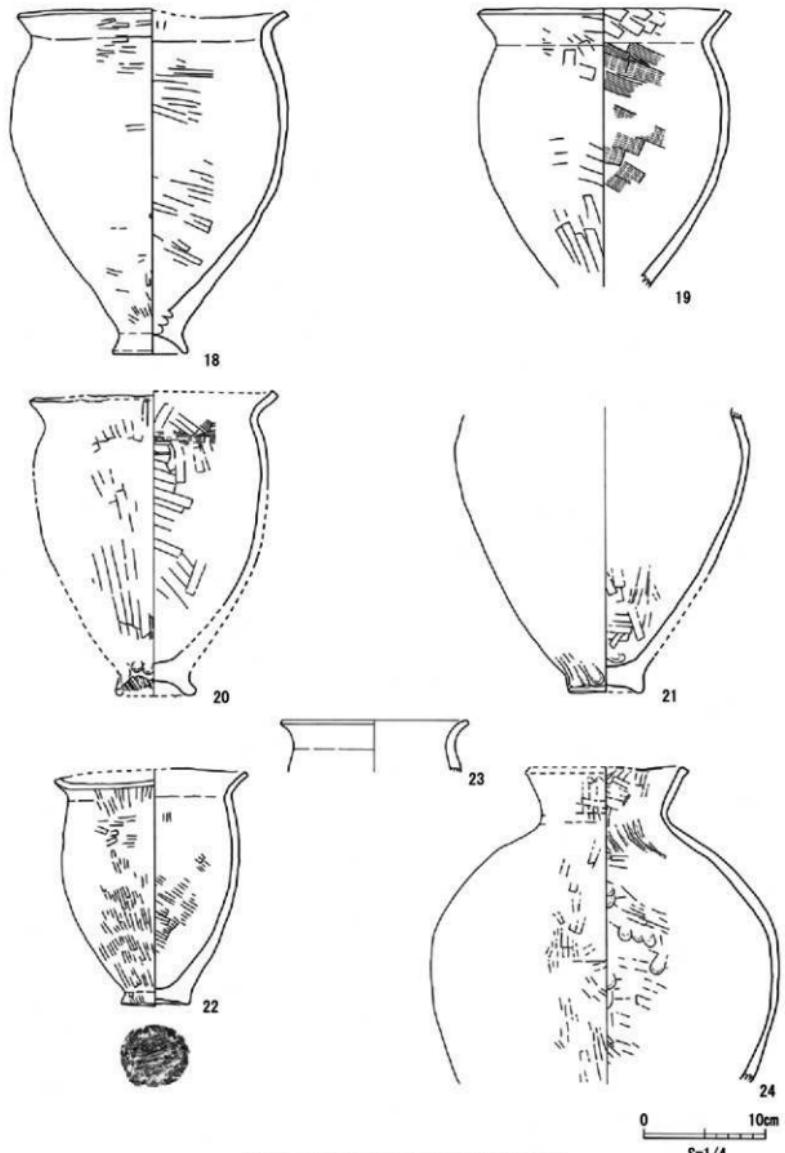
土坑内から甕8個体、壺2個体以上、高杯、小型の鉢形土器4個体が出土している。15~23は甕である。口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。18・19・20は外面に顕著なスス付着が認められる。20は上げ底で裾部が大きく開き、底部外面に強いハケ状の工具痕跡が観察される。21の底部と内面に黒斑がみられ、外面には指頭痕が残る。22は小型の甕で、口縁がいびつである。外面胴部中位から底部付近にかけてススが付着する。底部はやや上げ底で、粗い工具痕跡が認められる。23の内外面はナデ調整である。24~27は壺である。24は胴部上半が大きく張り、内湾しながら頸部にいたる。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は平坦に仕上げられる。頸部内面には絞りの痕跡と指押さえがみられる。25は丸い平底から内湾しながら立ち上がり、やや長胴気味である。底部付近から胴部最大径



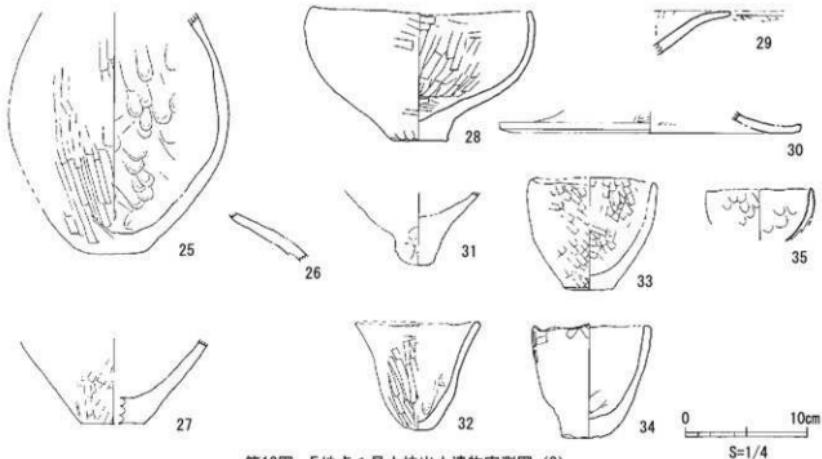
第10図 F地点2号竪穴建物跡平面図・土層断面図



第11図 F地点 1号土坑平面図・土層断面図・出土遺物実測図(1)



第12图 F地点1号土坑出土遗物实测图 (2)



第13図 F地点1号土坑出土遺物実測図(3)

のある付近にかけて密な斜方向の工具痕が認められる。26は頸部から胴部付近である内面に絞りがみられる。27は平底の底部から外反気味に立ち上がる。外面に光沢のあるミガキ状の密な工具痕跡が認められる。28は鉢である。小さな平底の底部からやや外反気味に立ち上がり、内湾しながら口縁にいたる。口唇部は内側に傾斜する平坦面をもつ。内面の広範囲に黒斑が認められる。29・30は高杯である。29は杯部上位からゆるやかに口縁にいたる。口縁端部は平坦である。30は高杯の裾部で、端部がややはねあがる。内外面ともにナデ調整が施される。31・35は小型の鉢である。31・32は丸底の底部から外反しながら立ち上がる。31は外面に指頭痕が観察される。32の外面底部付近には黒斑が認められる。外面は工具での調整後に丁寧なナデが施される。内面は底部に指頭痕が認められる。33・34は平底の底部から内湾しながら口縁にいたる。ともに口縁はいびつである。33の口唇部付近にススが付着している。34はゆがんだ底部をもち器壁は厚く、32・33と比較し重量感がある。内面底部には明瞭な指押さえの単位がみられる。35は椀状の器形となる。口唇部は尖り気味である。内外面の調整は指ナデである。

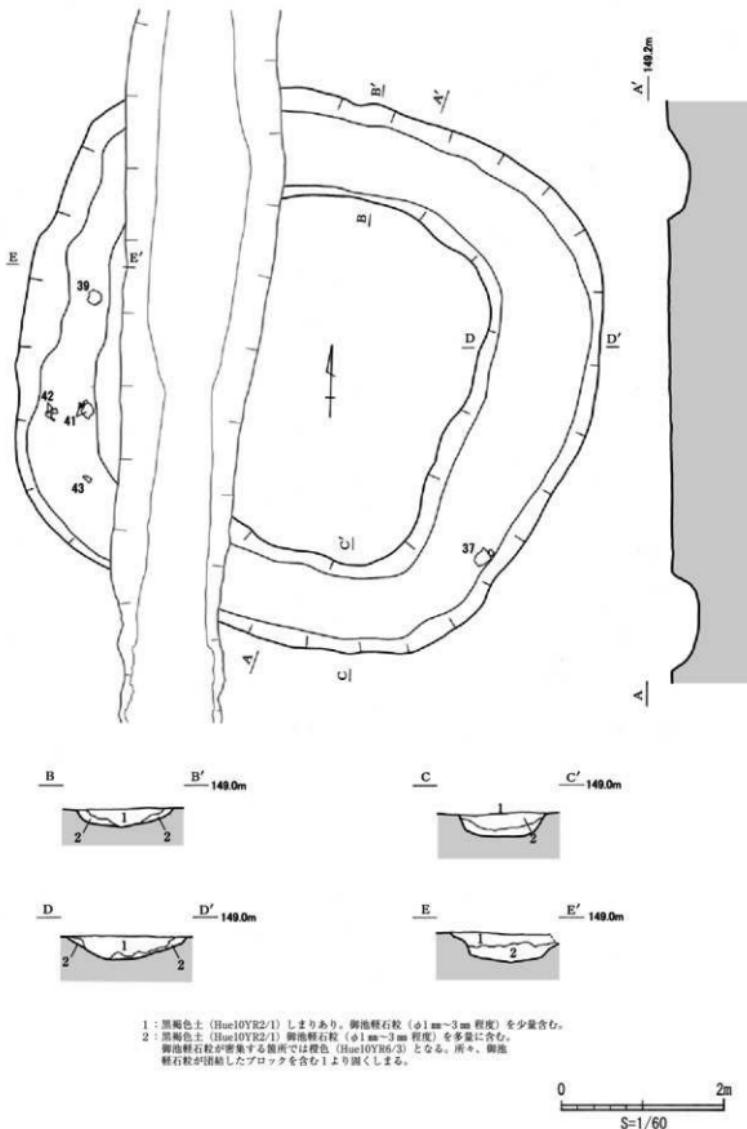
(3) 周溝状遺構

1号周溝状遺構 (S L 1 第5・14図)

1号周溝状遺構は、調査区南西A 7-14 グリッドに位置する。西側を近世から近現代の溝状遺構 (S E 3) の影響で削平されている。平面プランは東西約7.1m、南北約6.8mの隅丸方形を呈する。

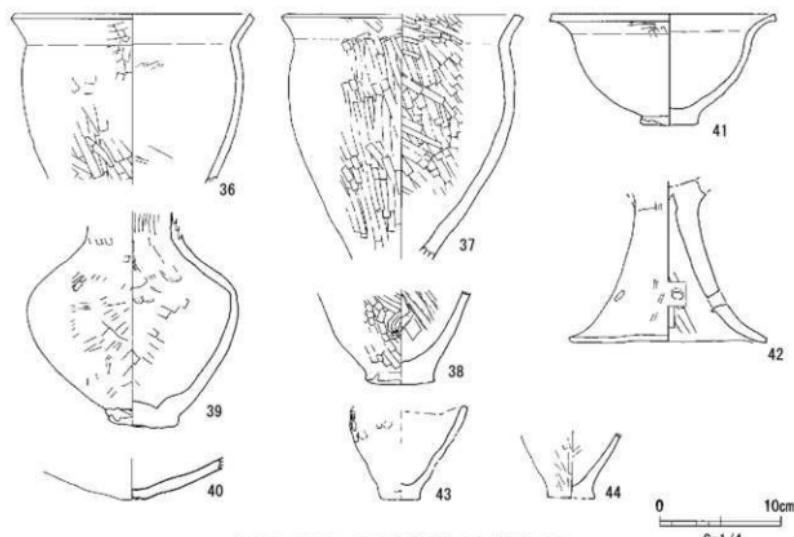
周溝は幅約1.2~1.5mで、検出面からの深さは約0.2m~0.4mである。溝を掘削する際、検出面からVI層（御池降下軽石層）上位まで約0.4m掘り下げた後、約0.15m御池降下軽石を入れたと考えられ、貼床状に硬化している。埋土は2層に分層される。2層とも基本的には基本土層V a層を基調とする黒褐色土である。溝底面にあたる埋土2は黄色軽石粒（御池軽石）を多く含み固くしまる。遺物は先述した溝状遺構による削平のため西側と東隅のみ残存していた。1層下位から2層上面にかけての出土である。

出土遺物は第15図に示している。36~38は甕である。36・37は口縁部が緩やかに「く」の字状に外



第14図 F地点 1号周溝状遺構平面図・土層断面図

反し外面の口縁部から胴部上半にかけて顕著なススの付着がみられる。調整は内外面ともハケ目が施されている。38は平底の底部でいびつである。内面には斜方向に強く深いハケ状の工具痕跡がみられる。39・40は壺である。上部を欠損するが長頸になると考えられる。胴部上位が張り、黒斑がみられる。全体に風化が著しい。胴部下位から底部にかけていびつなプロポーションである。40は底部が小さく凹む。41は鉢である。口縁部は大きく開き、端部は平坦である。胴部はゆるやかに湾曲し小さめの底部にいたる。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。42は高壺で脚部に4か所の円形の透かしをもつ。風化が著しいため判然としないが外面に赤色顔料の痕跡がわずかに認められる。43・44は小型の鉢形土器である。43は外面の多くに指頭痕がみられ口縁部もいびつである。底面は平底を呈する。44は内外面ともに粗いナデ調整である。



第15図 F地点 1号周溝状遺構出土遺物実測図

(4) 土器溜り

F地点で弥生時代後期の土器溜り3か所が検出された。調査区中央で確認された南側から北側に傾斜する谷地形の上部東側のA 6-17からA 7-17グリッドの範囲と西側にあたるA 8-12グリッドに位置している。Va層を掘削中に検出されたものであるが、すべて下部はVb層に達していないため、検出できなかった周溝状遺構等の遺物集中箇所であった可能性も残る。

1号土器溜り（第5・16図）

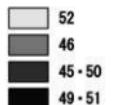
1号土器溜りは調査区南東側（旧H区）A 6-17グリッド南側に位置する。平成27年度末に急きょ拡張した箇所で確認され、期間の関係で途中から点の位置測定での取り上げを余儀なくされた。翌平成28年度の調査では土器溜りの下部の記録を追加した。周囲にサブトレーンチを設定したが掘り込み等は確認されなかった。東西方向に長軸1.3m、南北方向に短軸0.7mの範囲に集中する。中央部東側に顕著な土

器の重なりが認められ45・46の甕が完形に復元された。また、西側のまとまりでは線刻のある壺48・49が確認された。中央部では51の壺の上に45・46の甕が重なった状態で検出された。

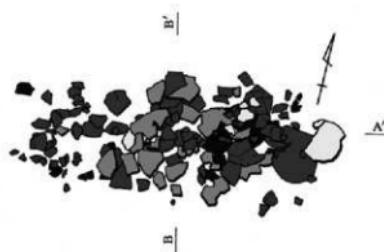
45～47は甕である。45・46の口縁はゆるやかに外反し、端部は平坦である。法量がちかく、胴部最大径は頸部付近にある。器壁の内外面にはハケ調整が施される。外面にススの付着がみられる。ややあげ底気味で脚端部が開く。47は小型の甕である。小さな平底から直線的に立ち上がる。内外面に黒斑がみられ、密なハケ調整が施されている。特に内面の斜方向のハケ目は打ち込み方向が明瞭である。48～52は壺である。48・49は胴部が張る壺である。ともに、平底の底部から胴部中位にかけて2条の弧の線刻が施される。48は線刻の周囲のみ黒斑が広がっている。プロポーションとしては算盤玉状を呈する。胴部上半から頸部付近にミガキの痕跡がみられる。49は安定した平底を呈し胴部上位が張り短い口縁部にいたる。口唇部は丸い。50の口縁は外反し、口唇部は平坦に仕上げられる。胴部上半にミガキが認められる。内面頸部には絞りと指おさえ痕跡が残る。51は球形の胴部である。外面胴部に幅5cm、長さ10cm程の黒斑がみられる。底部付近から直線的に3条の線刻が施されている。工具による丁寧なナデが施される。52の内面には底部から上方向に幅約1cmの強めのナデ調整が顕著にみられる。土器溜りの東側で確認されている。53は鍋状を呈する鉢である。安定した平底の底部からゆるやかに内湾する。口縁部は外側に大きく開き、端部は平坦に仕上げられる。底部付近に小さな黒斑がみられる。内面底部は周囲をナデ調整した結果、中央部がややもりあがる。54は台石である。石材は砂岩で、重量は3.5kgを測る。中央部に顕著な磨り面の範囲が観察され、磨り面の縁辺側に叩き痕跡がみられる。裏面に使用痕は確認されなかったことから、表面のみ使用したと考えられる。

2号土器溜り（第5・18図）

調査区南東側（旧H区）A 7-17グリッド西側で、1号土器溜りから南西約6.5mに位置する。Va層を掘削中に検出された。遺物はほぼ同レベルにあり、径約1mの範囲に広がっている。掘り込み等は確認されなかった。遺物は、まとまって出土しており一括性が高い資料と考えられる。器種は甕と壺で構成される。土器溜りの外周で55の甕1個体分が接合した。55～62は甕で、55は口縁直下に貼り付け突帯を有し、貼り付け突帯の刻みを施す際の工具痕が口縁部に残る。胴部外面には斜方向の密な工具ナデがみられる。このタイプの甕は今回の調査での出土数は破片を含めても3個体に満たない。胴部外面に帶状にススが付着する。底部は上げ底で端部は直線的に開く。56・58の口縁端部は平坦に仕上げられる。内外面ともにナデ調整である。57は口縁外端部がつまみ出され、一定間隔で指押さえの痕跡が残る。胴部外面には下から上へのハケ調整が明瞭に確認でき、胴部上半には工具端部の痕跡が残る。胴部下半に黒斑がみられる。59は頸部外面に強めの横ナデ調整が施されたことにより、「く」の字状に外反する。口縁外面に黒斑がみられる。内外面ともに工具によるナデ調整が施される。60は59と同一個体の胴部と考えられる。外面は風化が著しいが、粗いナデ調整が認められる。61・62は、ほぼ法量を同じくする小型の甕である。ともに口縁部をつまみ出した後、丁寧なナデ調整されている。61の外面は一部にミガキの痕跡が観察される。62は内外面ともに丁寧なナデ調整である、外面胴部の下半に黒斑がみられる。61の底部は平底であり、62は指で回ませ、さながら輪高台状を呈する。端部は指ナデにより平坦である。63～68は壺である。63・65は内面に下方から上方へナデ調整がみられる。63の胴部上位には4条の浅い線刻が認められ、64・66は底部に2本の弧状の線刻が施されている。64は63の底部と考えられる。丸底を呈し内面は強い指ナデの痕跡がみられる。65は胴部上半が張る。浅く凹む平底を呈する。



A



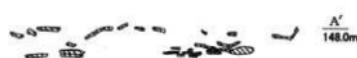
B'

148.0m

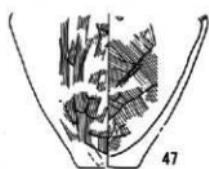
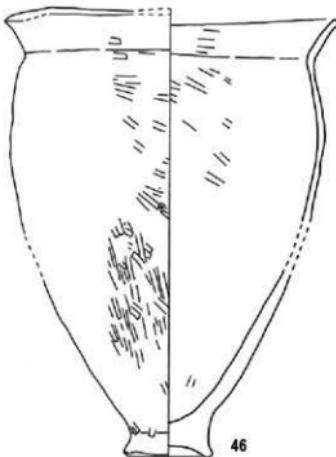
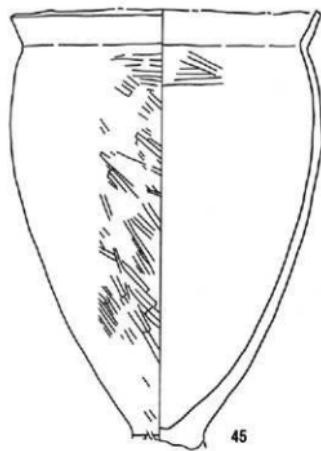
B'

B

A

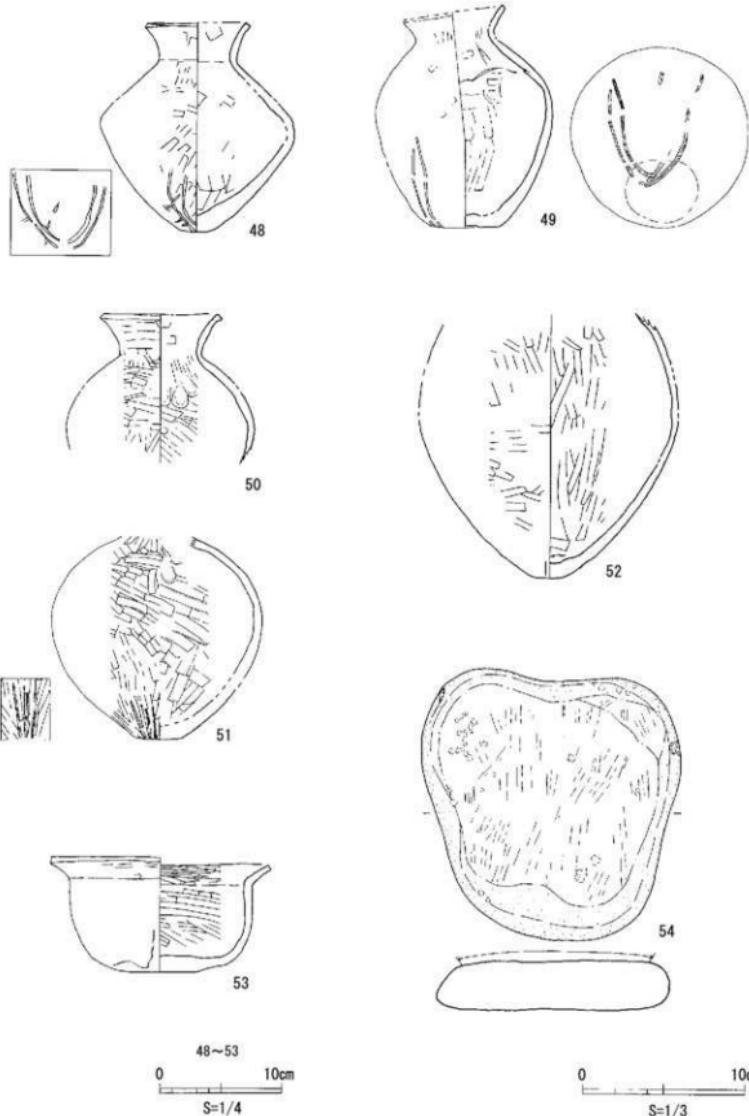


0 1m
S=1/20

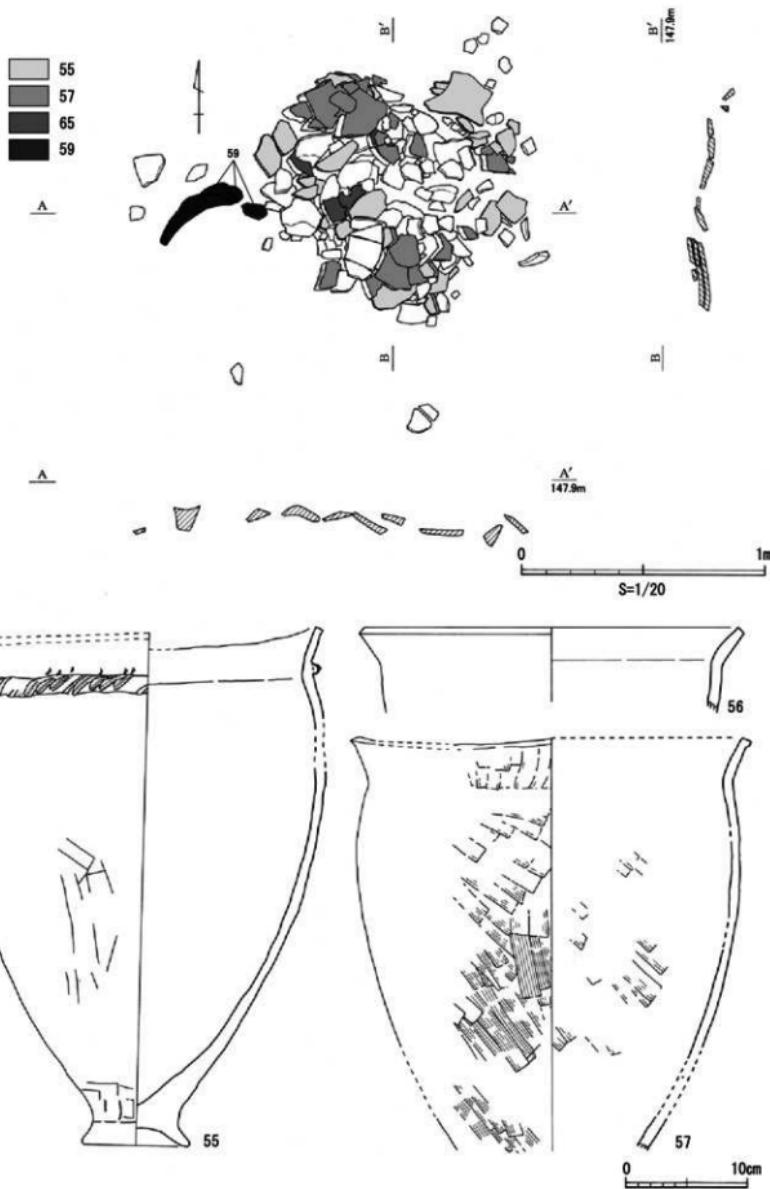


0 10cm
S=1/4

第16図 F地点 1号土器窯平面図・断面図・出土遺物実測図(1)

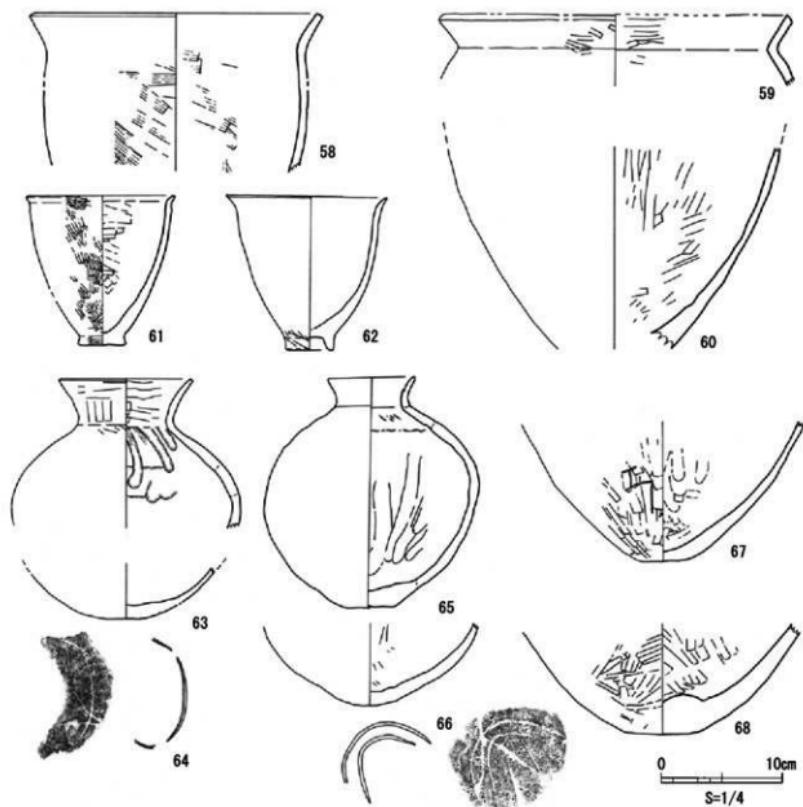


第17図 F地点 1号土器より出土遺物実測図 (2)



第18図 F地点2号土器窯平面図・断面図・出土遺物実測図(1)

S=1/4



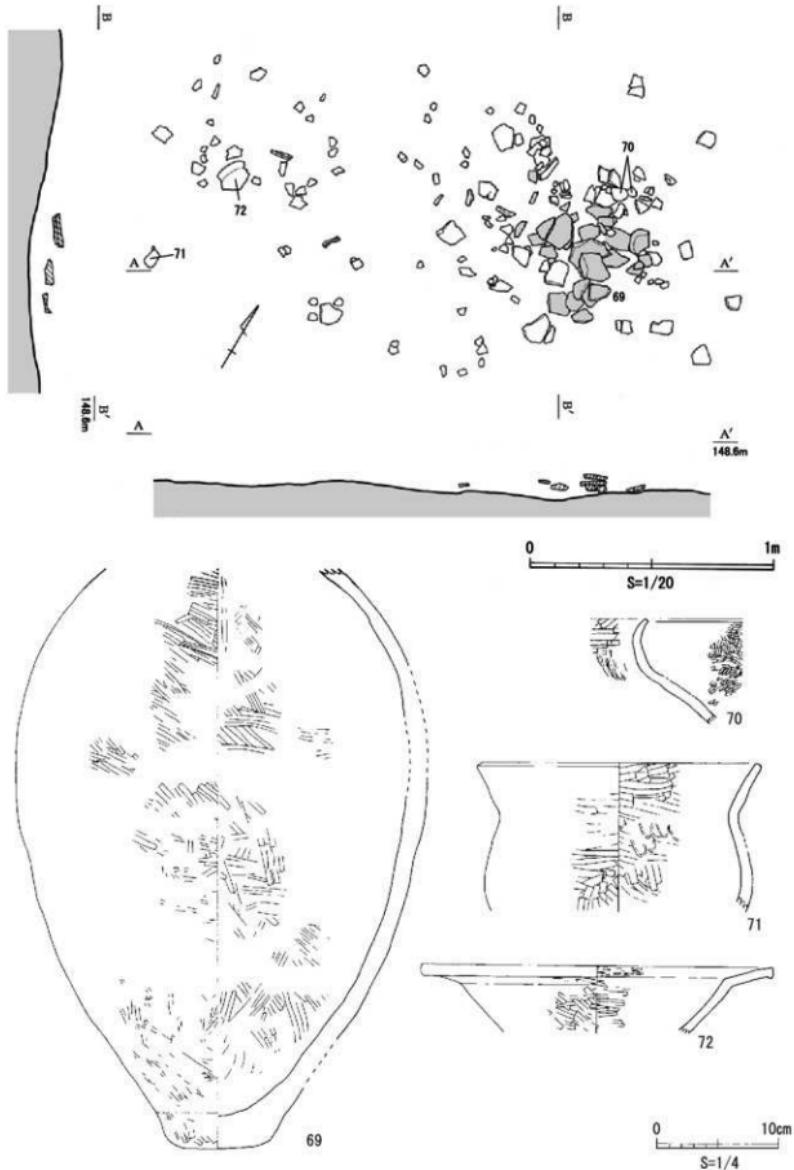
第19図 F地点 2号土器窯出土遺物実測図 (2)

66の底部はやや回む。67・68は壺の底部である。丸みを帯びた底部から内溝気味にたちあがる。67の胴部下半に直線的な線刻が観察される。68は底部内面に粘土の雜目がみられ、周囲をナデ調整した結果、中央部がもり上がり、厚くなったと考えられる。底部外面の広範囲に光沢のある黒斑が認められる。

3号土器窯 (第5・20図)

3号土器窯は調査区南西(旧I区)A 8-12グリッドに位置する。1号竪穴建物跡の南西約12m、1号土坑の北東約12mに位置する。遺構の立地は1号竪穴建物跡と標高をほぼ同じくする。南側約4 m、西側約2 mに炭化物粒の集中する範囲が認められた。遺物のまとまる範囲は、長軸1.8m、短軸0.9mである。

69は壺である。口縁部を欠いており、器高は50cmをこえる。外面は工具による丁寧なナデ調整が施される。最大径のある胴部上半付近に黒斑が認められる。やや丸みを帯びた平底の底部を有する。70は壺の口縁部付近である。外面はミガキ調整が施されている。内面にはしづり痕跡が認められる。71は壺である。口縁はゆるやかに開く。口縁内外面に黒斑がみられる、器壁前面にハケ調整。72は高壺である。壺部は浅く内外面は丁寧な工具によるナデ調整が施されている。



第20図 F地点3号土器埋り平面図・断面図・出土遺物実測図

(5) 包含層出土の遺物

壺 (第21図 73~113)

口縁部は貼付け突帯を有するI類 (73・74・76・79~83) ともたないII類 (75・77・78・84~101) に大別できる。73は口縁部の上端平坦面がやや凹み、断面は小さな台形を呈する。内面はやや尖る。1号土坑からの出土であるが、遺構の時期よりやや古相を示すためここに掲載した。74・76・81・83は口縁が「L」字状を呈し、突帯の断面は台形状でやや長い。76は口縁部下位に1条の突帯を有する。突帯の上面は横ナデにより凹む。外器面にはススが付着する。75・77の口縁は「L」字状に小さく折れる形狀であり、端部は丸く仕上げられる。内外面に工具によるナデ調整が認められる。78は胴部に押圧による1条の貼り付け突帯を有する。口縁端部は横ナデにより凹む。外面にスス付着がみられる。84~101は口縁が「く」の字状を呈し、口縁端部が丸い (85・89~93) と平坦 (84・86~88・94~101) に分けられる。85の外面に粗い工具の痕跡が認められ、内面には黒斑がみられる。86は外面にススが付着している。86・87の口縁部には指押さえの痕跡が観察される。96・97は端部がやや凹む78と同タイプと考えられる。98は強く外反する。100の内外面は粗いナデ調整である。103~109は突帯のある壺である。104・106・107は押圧刻み目突帯を有し、108・109は無刻み目突帯を有する。突帯の断面形状は108が台形、109は三角形を呈する。102・105は「L」字状口縁をもつ大甕の一部と考えられる。

110~113は壺の底部である。110は充実した脚台状を呈する。111・112は高台状である。111・113は小型の壺の底部である。111は脚部と胴部の境の粘土の継ぎ目で剥離している。112はハケによる密な調整が施されている。高台内と内器面には黒斑が認められる。113は底面がやや凹む。内外面に工具痕が認められる。

壺 (第22図 114~126)

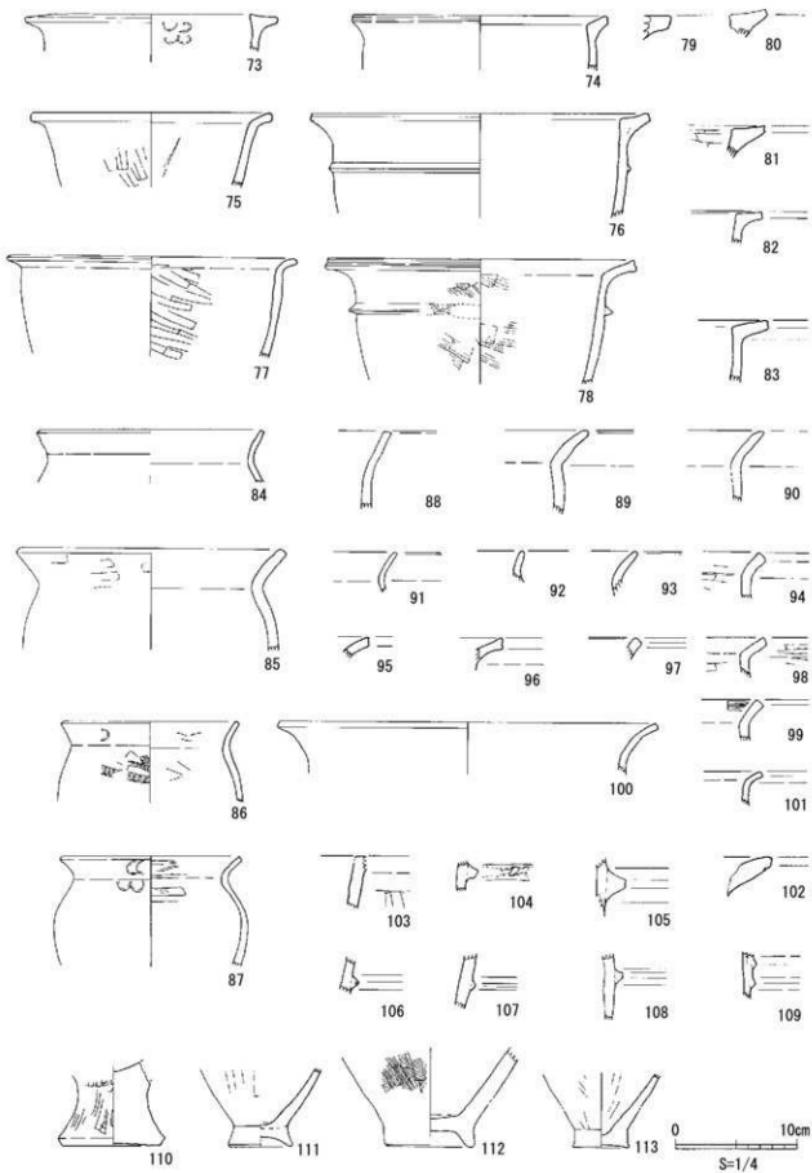
114~126は壺である。114は口縁内面が剥離しているが朝顔形に開くと考えられる。115は口縁部に貼付け突帯をもつ。口縁上面が丸く仕上げられる。やや古手の様相である。116は直口気味であり内外面に黒斑が認められる。117は風化が著しく調整不明である。118の口縁部は横ナデにより平坦である。調整は工具による丁寧なナデ調整である。内面頸部に明瞭なしぶりの痕跡がみられる。119は小さな平底の底部から内湾しながら立ち上がり胴部が張る。胴部上半にミガキ状の調整が認められる。外面に数か所の黒斑がある。120は口縁が短く折れる。器壁はうすい。121の内面は黒斑があり、丁寧なナデ調整が施されている。122は長頸壺である。胎土のキメは細かく内外面とともに丁寧なナデ調整が認められる。123の外面は工具による丁寧なナデ調整、内面にはしぶりの痕跡がみられる。124は3本の刻目の無い突帯があり、突帯下部には斜め上方からの工具痕が観察される。125・126は壺の底部である。125は丸みを帯びた平底を呈する。内面中央部に粘土を重ね厚みをもたせ、周囲に指によるナデの痕跡が残る。126・127は平底の底部である。126はやや丸みを帯びた小さな平底状である。127は外反しながら立ち上がる。胎土は粗く、内外面には黒斑が認められる。

高坏 (第22図 128~132)

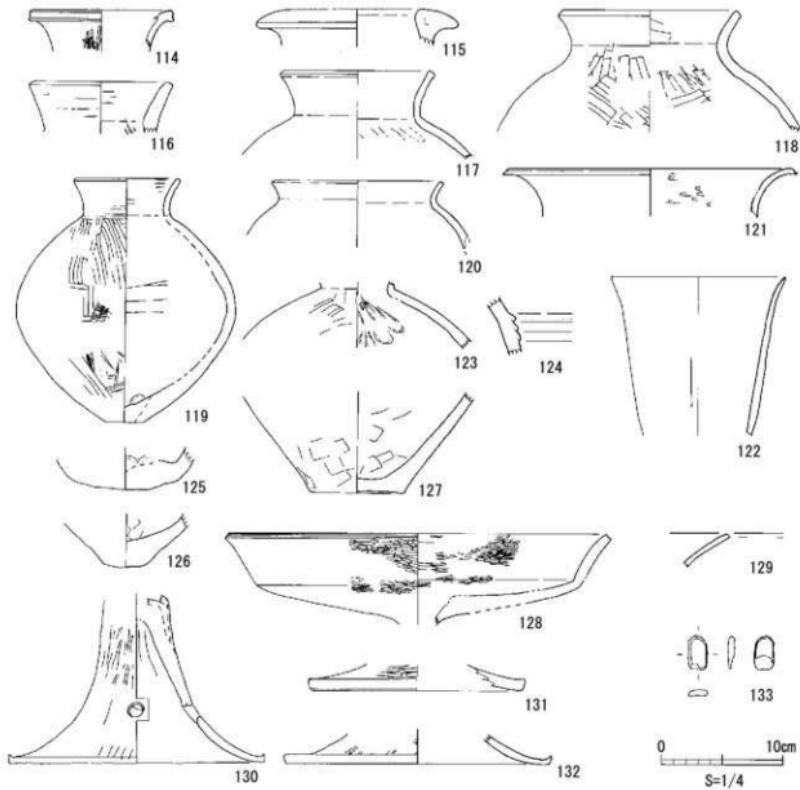
128~132は高坏である。128の内外面にはミガキ調整が施されている。129は口唇部が丁寧に面取りされる。130は脚部に4か所の円形の透かしを有する。内面据部には黒斑がみられる。131・132は高坏の据部である。131の端部は台形状で、132は外端部がはねあがる。調整は工具による丁寧なナデ調整である。

土製品 (第22図 133)

133はおはじき状の土製品である。全面に丁寧なナデ調整が認められる。



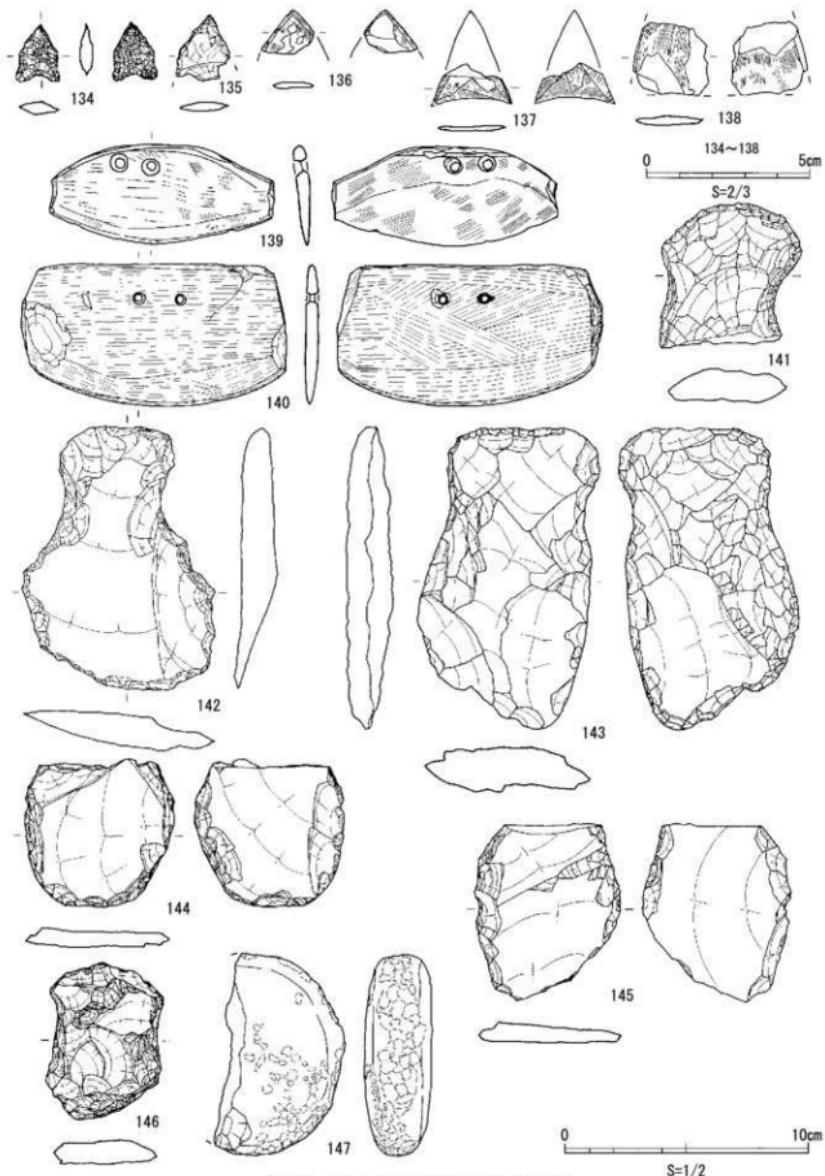
第21図 F地点包含層出土遺物実測図(1)



第22図 F地点包含層出土遺物実測図（2）

石器（第23図）

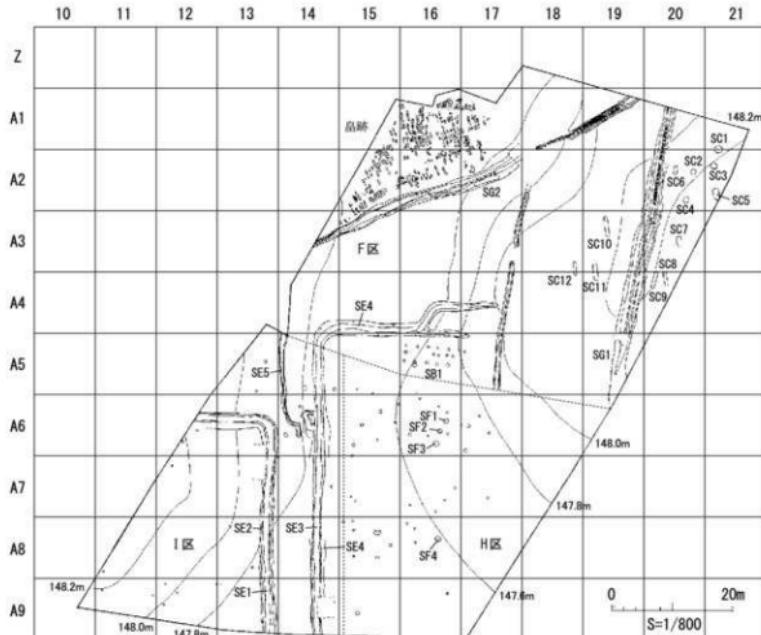
134・135はチャート製の打製石鎌である。134は小形で五角形を呈する。縄文晩期に属する可能性がある。136～138は磨製石鎌である。136は緑色珪質頁岩、137・138は黒色の頁岩製である。139・140は石斧丁である。いずれも頁岩製である。139は刃部・背部ともに湾曲し孔は2か所穿たれる。両端部を欠損している。140は長方形を呈する。背面は直線的で外湾する刃部を有している。141～146は打製石斧である。141は砂岩製で握り部より下端を欠損している。142は上面より大きく剥ぎ取りその後細かな調整を施している。自然面を多く残す。上部に摩耗が認められる。右側部は欠損後、再加工したものと考えられる。143は打製石斧の未製品と考えられる。表裏面ともに自然面が残る。144・145はホルンフェルス製である。上部を欠損後、再加工している。146は砂岩製である。打製石斧であったものの上部を残して再加工し刃部を形成したものと考えられる。147は砂岩製の敲石である。1/2を欠損する片面と側縁部に敲打痕が認められる。



第23図 F地点包含層出土遺物実測図 (3)

4 古代～近世の遺構と遺物

F地点では古代～近世の遺構は生産遺構としての畠跡、道路状遺構2条、溝状遺構5条、掘立柱建物跡1棟、土坑12基、井戸跡4基が確認されている。調査区中央にある埋没谷の東西に道路状遺構、北西側（A 1-16グリッド付近）に畠跡が検出され、谷間に溝状遺構が位置している。文明降下軽石を埋土とする畠跡や溝状遺構内からは、古代・中世の土師器・陶磁器が僅かであるが出土し、埋土状況の観察からも本来なら時期の区分をするべきであるが、遺構に伴う遺物が少ないとあり、個々の時期を決定するのが困難なため「古代～近世」としてあつかう。



第24図 F地点古代～近世遺構分布図

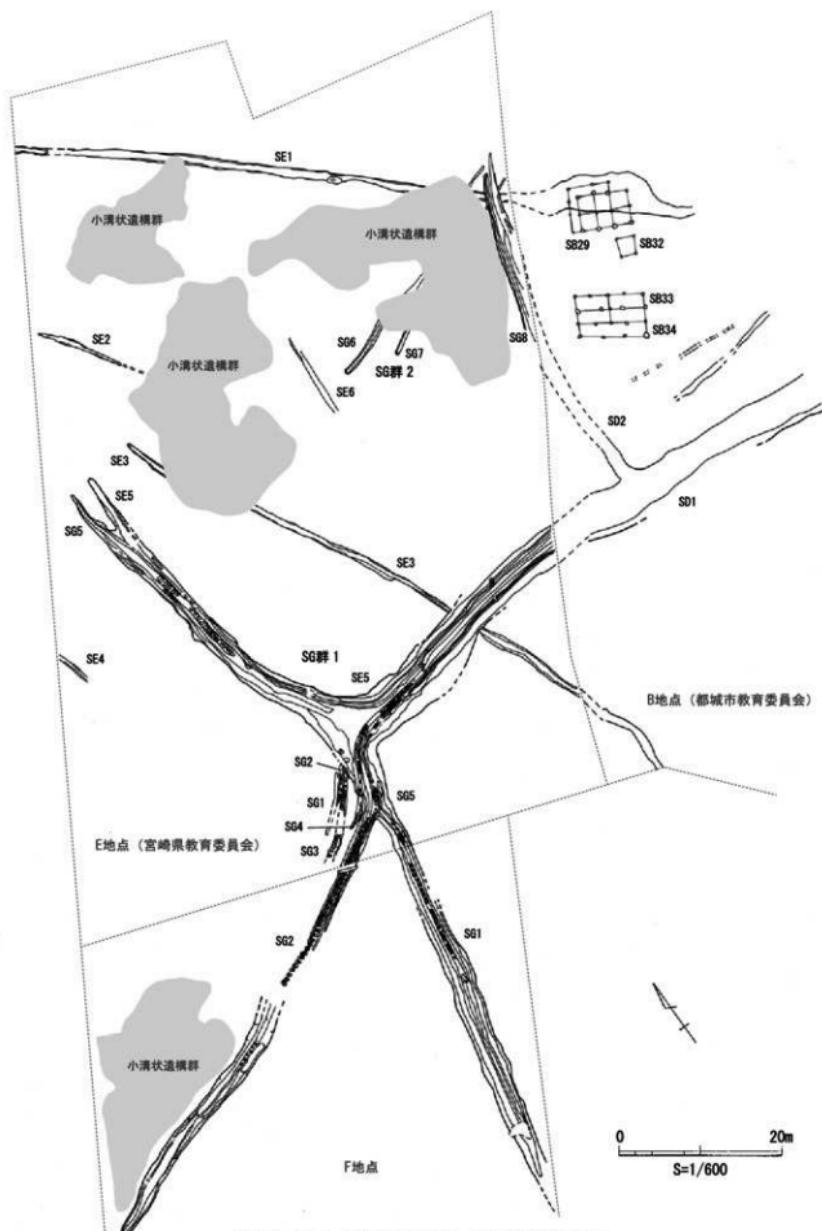
(1) 道路状遺構 (SG 第24・25図)

道路状遺構はF地点北半（旧F区の範囲）に2条確認された。2条ともIV層面で検出され、最深部はVI層（御池降下軽石層）まで掘り込まれている。1号道路状遺構・2号溝状遺構はE地点（宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第160集）のSG1群5号溝状遺構に繋がり、分岐してA3-20グリッドより北方向の5号溝状遺構、B地点（都城市文化財調査報告書第68集）の1号・2号溝状遺構へ続くものと考えられる。

1号道路状遺構 (SG 1 第24～26図)

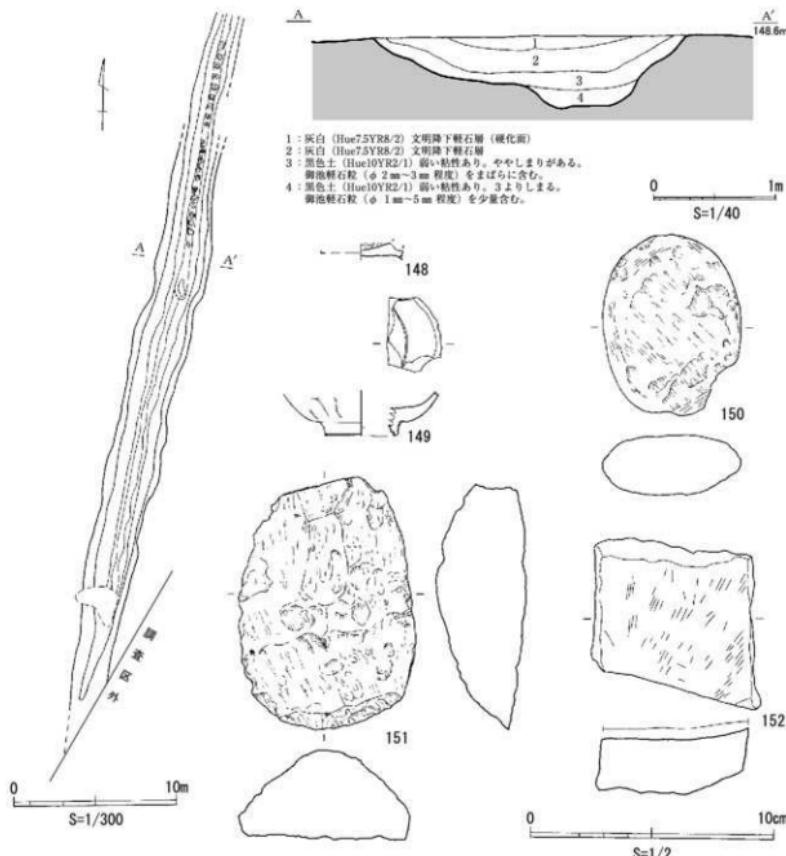
1号溝状遺構はA1-20グリッドから南北方向に走行する硬化面を有する溝状の遺構である。地形に沿い北側へ下る。標高が高い南側部分は調査区外へ延びると考えられる。軸方向はN-13.8°-Eを指向する。

Va層面で検出され、最深部はVI層（御池降下軽石層）まで掘り込まれている。A3-20グリッドより

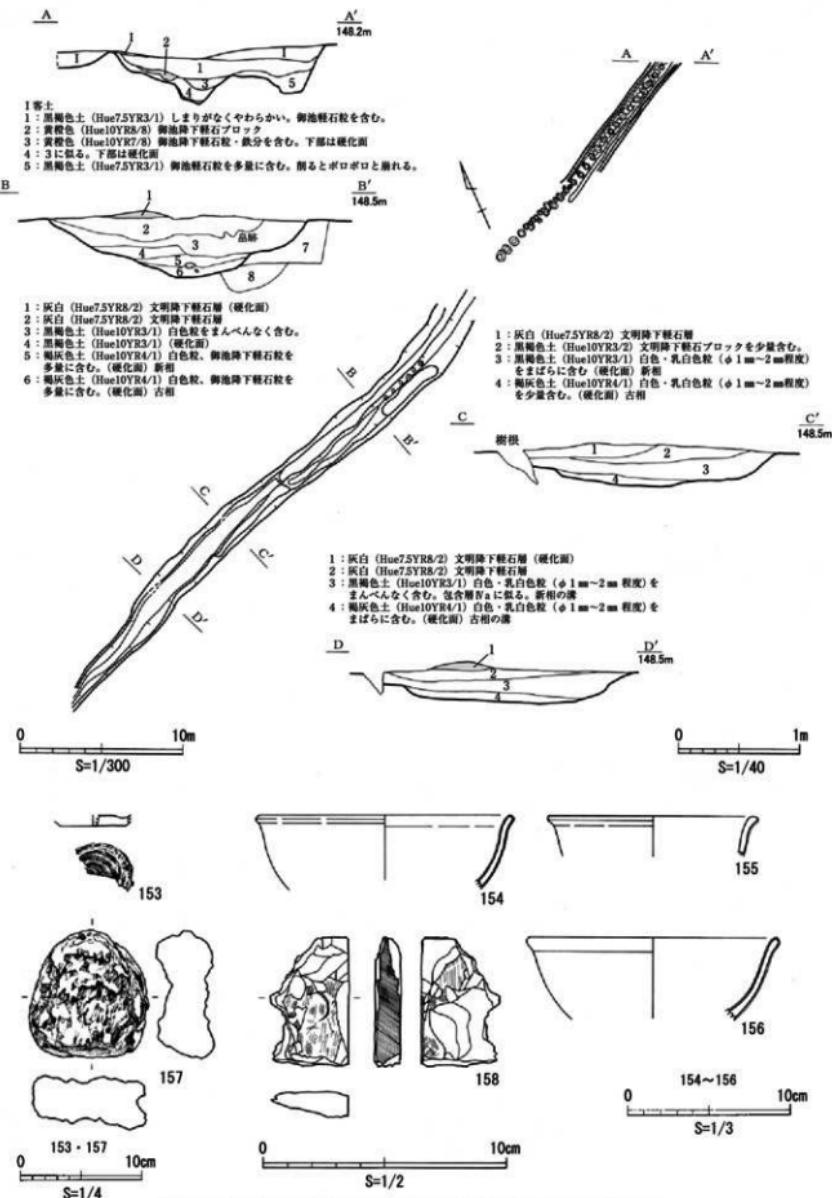


第25図 B・E・F地点溝状遺構・道路状遺構分布図

北側段差を有し一段下がる。長さ53m、幅約3.0m、深さ約0.5m。溝の断面はA-2-20より北側は浅い箱型、南側はV字状を呈する。底面に小さな円形（約15cm）、楕円形（長軸約40cm）の凹凸痕が認められ、凹凸の周囲部は硬化する。溝内に残る硬化面は大きく2枚である。硬化面はA-3-20グリッドより南側では残存が認められない。硬化面はすべて南北方向であり、最上層は文明輕石降下後に形成されている。底面の硬化面と凹凸部分は平田遺跡E地点SG1群の二股に分かれるSG5の東側に続くことが確認された。1号溝状構造からの遺物は5点のみである。148は黒色土器の底部である。内面は黒化し、高台内には黒斑がみられる。149は龍泉窯系の青磁碗（上田秀夫氏分類B-II）、150・151は輕石製品である。150は楕円形で側面は平坦に加工され、筋状の凹みが認められる。151の下部は片刃状の加工が施される。両側面は平坦面で断面形は台形状を呈する。152は砂岩製の砥石である。使用頻度によるものか研ぎ面が「U」字状を呈する。



第26図 F地点 1号道路状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図



第27図 F地点 2号道路状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図

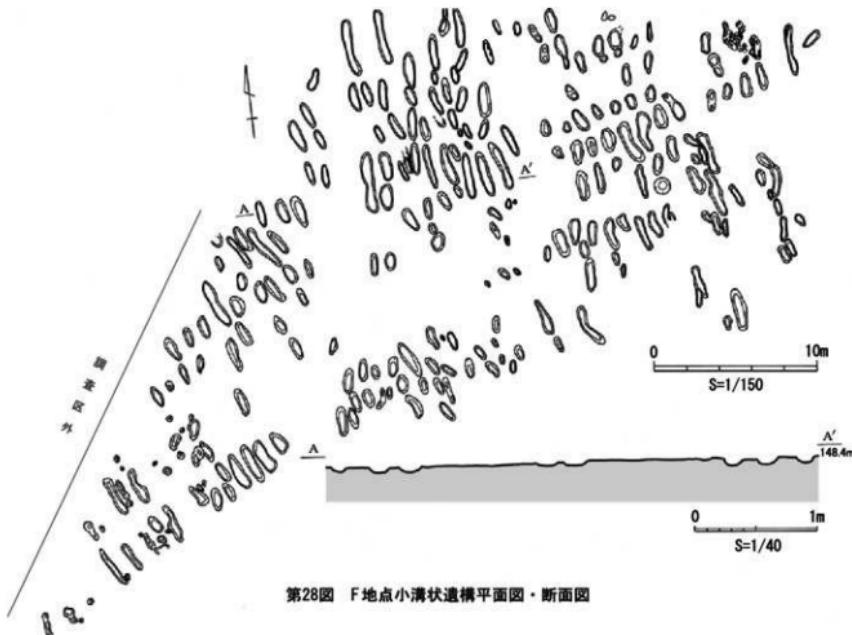
2号道路状遺構 (SG2 第24・25・27図)

2号溝状遺構はF地点北側から南西に延びる。軸方位はN-68.4°-Eを指向する。A1-19グリッド付近で東に位置する1号溝状遺構からの距離は約4mである。A2-17付近で擾乱のため上部を消失しており、底面の梢円形凹凸のみが残存していた。確認された範囲内での現存長は約55m、幅は中央部で約2.6m、凹凸痕の顕著な北側で1.4mを測る。断面形状は、北側で箱形、中央部より南側は「U」字状を呈する。最深部は約0.5mを測り、北東側の底面には円形もしくは梢円形を呈する凹凸痕が認められる。溝中央付近では凹凸痕がまばらとなり、段差を有するA2-12グリッド付近からはみられなくなる。硬化面は3か所あり最上層は桜島降下軽石層である。平田遺跡E地点SG1群のSG5西側に接続すると考えられる。

153は土師器皿で底約5.4cm、底部切り離しは回転糸切りである。154～156は口縁部が外反する青磁碗である。上田秀夫氏分類のD類に属すると考えられる。14世紀中頃から15世紀前半の所産と考えられる。157は軽石製品である。表裏面ともに中央部が不整円形に凹み、側縁に線刻状の加工が認められる。浮子であろう。158は頁岩製の砥石である。

(2) 小溝状遺構 (第28図)

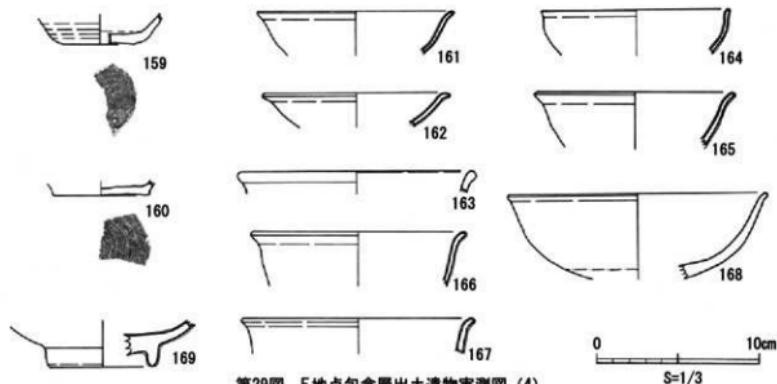
F地点では生産遺構(畠跡)として小溝状遺構群が埋没谷上の西側にあたるA1-16グリッドを中心確認されている。調査区の壁面の断面にみられることから、北側および西側に続くと考えられる。2号溝状遺構より南側での広がりは確認されなかった。削平の影響で全体的に残存状況は良好とは言えず、深さが1.0cm未満のものが大部分を占める。遺構はほぼ等高線に直交しているが、軸方向がN-18.5°-EとN-34°-Eに大別できる。断面形は「U」字形もしくは逆台形状を呈し、遺構間の距離は



約0.2mとなる。埋土には桜島文明軽石が混入する。一部の埋土にはブロック状の黒色土が含まれることから復旧痕の可能性も考えられる。

(3) 中世の遺物 (第29図)

F地点では調査区北側(旧F区)の道路状遺構・小溝状遺構の周囲にのみ当該期の遺物の出土が認められる。159・160は底部切り離しが糸切りの土師器である。159は壺で底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。160は皿である。161・162は白磁の端反り碗である。体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する。森田分類のC類に相当し、15世紀前後の所産である。163~169は青磁である。164~167は端反り碗の口縁部から体部であり、丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。上田分類のD類(14世紀中葉~15世紀前半)に相当する。169はD類碗の底部である。全体的に釉が厚く、貫入が認められ、高台内の釉をふき取っている。163は口縁の形状からB類の可能性も考えられる。168は釉が薄く体部下半が露胎となる。



第29図 F地点包含層出土遺物実測図(4)

5 近世以降の遺構と遺物

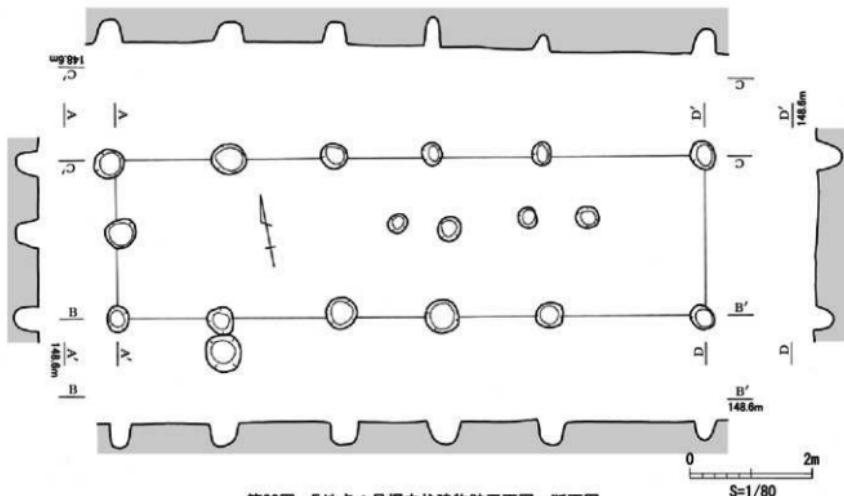
(1) 挖立柱建物跡 (第24~30図)

1号掘立柱建物跡 (S B 1)

近世に属すると考えられる掘立柱建物跡はF地点中央部(旧F区とI区の境付近)A 5~16グリッドで検出された。桁行5間×梁行2間で主軸はN-81.5°-Eとほぼ東西方向を指向する。4号溝状遺構の南約2mに位置している。桁方向の柱間約1.8m、梁間は約1.3mを測る。柱穴の検出面からの深さは約28~50cmを測る。建物東側では梁中央部の柱穴は確認できなかった。中央部東側でやや径の小さいピット4基が東西方向に確認されたが性格は不明である。柱穴の埋土内から薩摩焼の小片が出土している。

(2) 土坑(土壤) (第31~34図)

土坑は、F地点北東側(旧F区)で12基確認された。銭貨等の遺物が出土した土坑5基は、1号道路状遺構の東側、A 2~20グリッドを中心とした標高148.2m付近に集中している近世墓と考えられる。平面形態から円形4基・隅丸長方形3基・幅の狭い長方形5基の3タイプに分類できる。



第30図 F地点 1号掘立柱建物跡平面図・断面図

1号土坑 (S C 1 第31図 第4表)

A 1-21グリッドで検出された長径1.30m×短径1.15mの円形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深部で0.65mである。底面はほぼ平坦で断面形は箱形である。埋土にはVIa層上部の土が堆積する。

遺物は床面に170、床面からやや浮いたレベルで171、172の洪武通宝（明錢：鋳造年代343～349）が2枚重なって出土している。洪武通宝には背文はみられない。鋳造錢なのか模倣錢なのかは判断しがたい。貨幣として本邦錢とともに流通していた可能性も考えられる。そのほか埋土中から錢貨173と錢文不明の細片、土師器細片が確認された。

2号土坑 (S C 2 第31図)

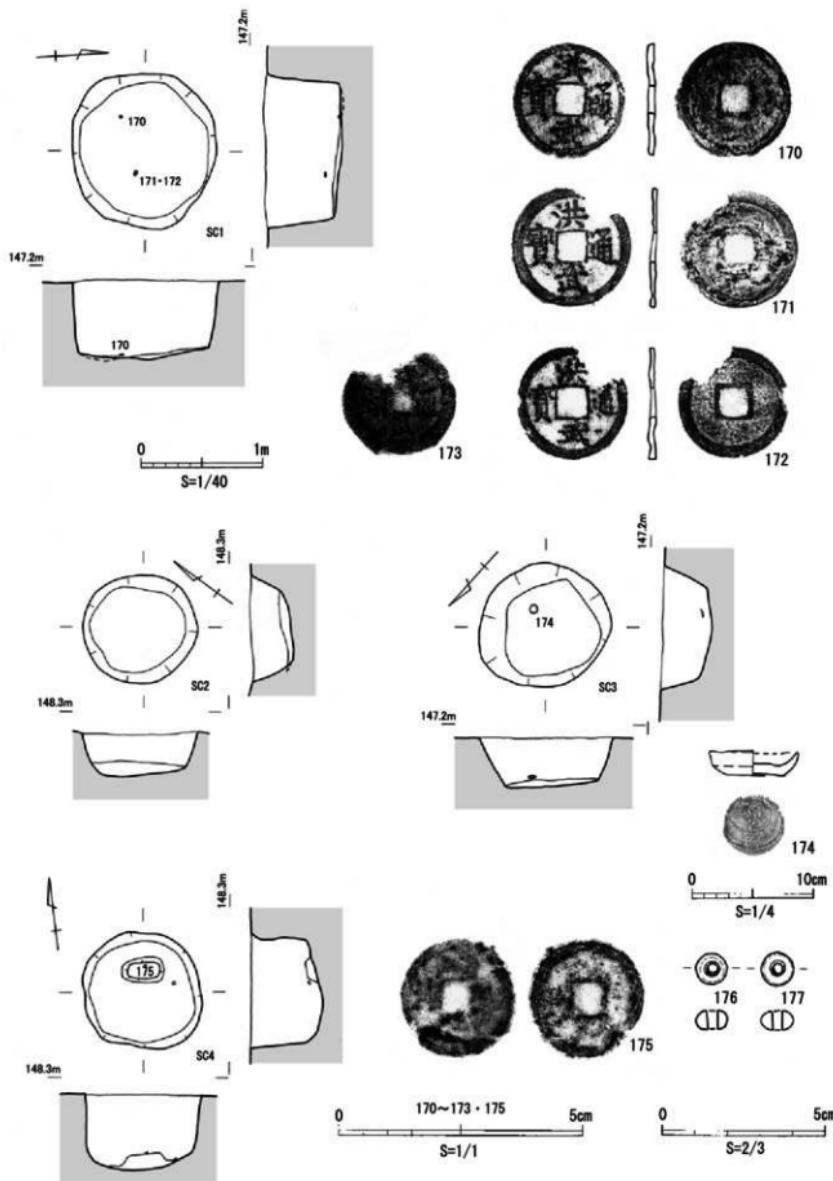
1号土坑の南西約6m、A 2-20グリッドに位置している。長径0.94m×短径0.88mの円形を呈する。検出面からの深さは最深部で0.36mである。断面形は「U」字状を呈し、床面は北東から南西に約5度傾斜する。埋土はVIa層上部の土に似るが、テフラの混入がほとんど見られず弱い粘性を帯びる。埋土中から遺物の出土は認められない。

3号土坑 (S C 3 第31図)

1号土坑の南約2mに位置する。平面は長径約1.1m×短径約1.0mの円形、断面は台形状を呈する。検出面からの深さは最深部で0.43m。底面から法量で口径7.2cm、底径4.8cm、器高2.0cm、底部切り離しが糸切の土師皿174が出土している。

4号土坑 (S C 4 第31図 第4表)

A 2-20グリッド、2号土坑の南4.6mに位置する。平面は直径約1.0mの円形、断面は「U」字状を呈し、検出面からの深さは最深部で0.62mである。底面北側に平面が長軸0.35m×短軸0.2mの長楕円形、断面の厚さ0.12mの台形状の硬化面が認められた。



第31図 F地点 1~4号土坑平面図・断面図・出土遺物実測図

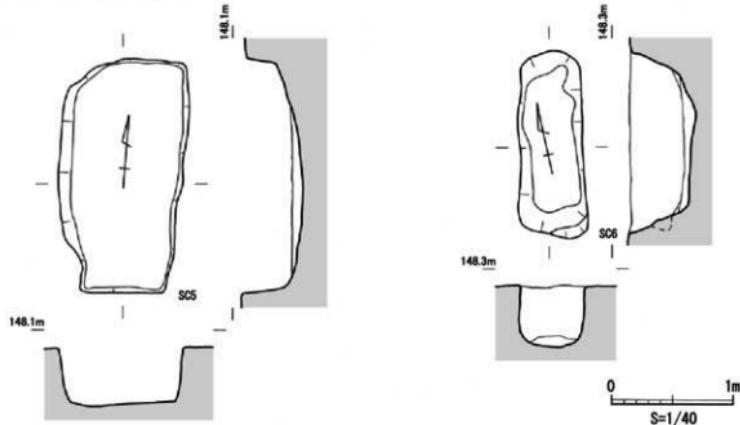
硬面化面上で赤褐色に銹化した錢貨175と玉176・177が出土した。175は寛永通宝であろう。玉は乳白色のガラス製で径1cm、中央に3mm程度の孔が穿たれている。数珠の一部の可能性がある。床面の埋土を篩ったところ、銹化して錢文不明な錢貨1枚が確認された。

5号土坑 (SC5 第32図)

A 2-21グリッドに位置し、調査区東壁面に一部かかるかたちで検出された。軸方向はN-5°-Eである。平面は長方形で、規模は長軸1.95m×短軸1.0m、検出面からの深さは最深部で約0.5mである。床面はほぼ平坦である。床面からの立ち上がりが90°に近かったこともあり調査中に西側壁面が崩落しており、崩落した埋土を除去する際、錢貨片が確認された。錢文は不明である。

6号土坑 (SC6 第32図)

2号土坑の西側、A 2-20グリッドで検出された長軸1.53m×短軸0.51mの隅丸長方形を呈する土坑である。遺構の南側は掘り込みが二段になる。検出面からの深さは最深部で0.54mである。床面の平面形は不整形である。埋土は1号土坑と同様、IVa層上部の土が堆積する。遺物は出土していないが近世の所産である可能性が高い。



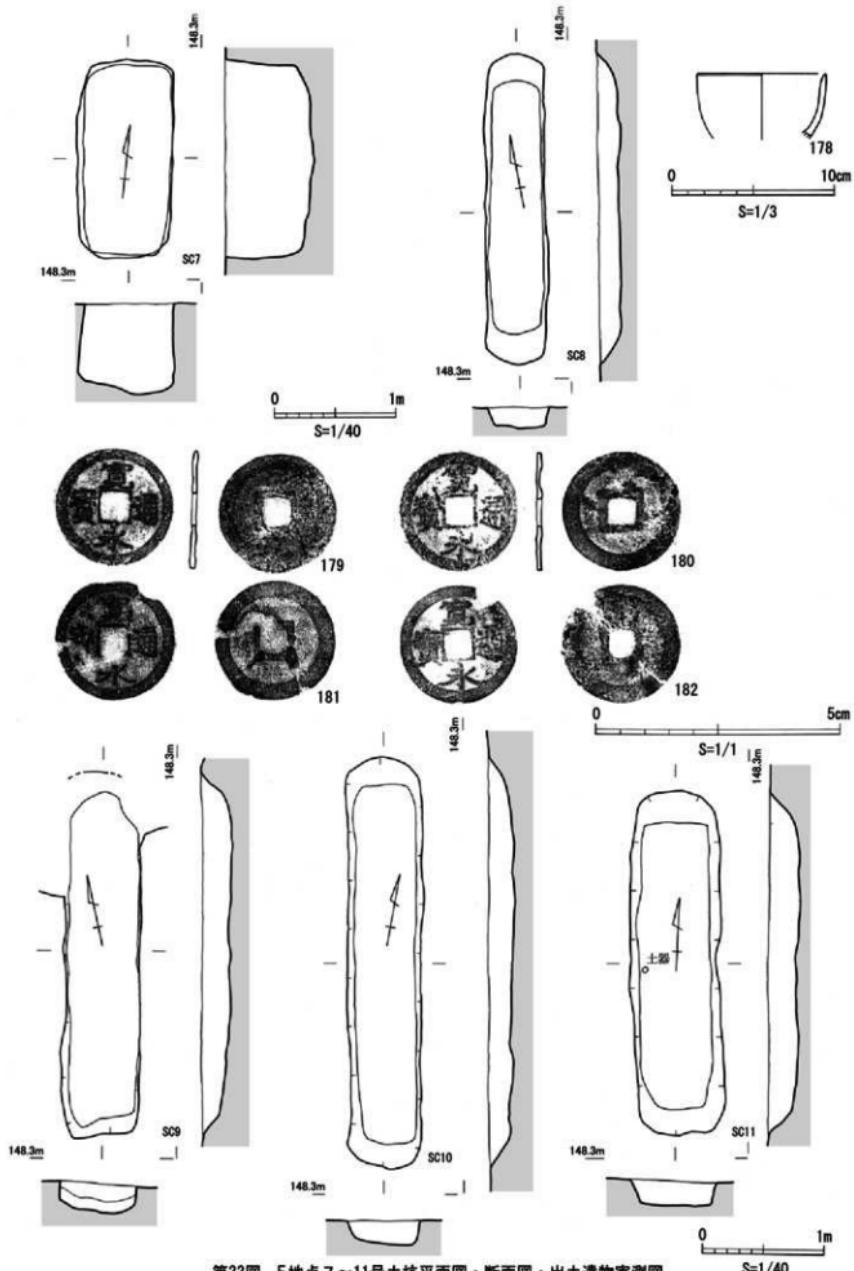
第32図 F地点5・6号土坑平面図・断面図

7号土坑 (SC7 第33図 第4表)

調査区北東側、A 3-20グリッドで検出された。軸方向はN-5°-Eで、北東に位置する5号土坑と軸方向を同じくする。長軸1.63m×短軸0.78mの長方形を呈する土坑である。底面は平坦ではなく、若干凹凸が認められる。断面形は箱形である。埋土はIVa層上部の土に類似するがテフラの混入がほとんど見られずやや粘性を帯びる。埋土中から錢貨179～182が出土している。すべて寛永通宝である。

8号土坑 (SC8 第33図)

調査区北東側、A 3-20とA 4-20グリッドの境界付近で検出された長軸2.54m×短軸0.49mの幅の狭い長方形を呈する土坑である。上部が削平されていることもあり、検出面からの深さは最深部で約14cmである。埋土はIVa層に類似する黒色土である。埋土中から磁器碗178が出土している。内外面に貫入がある。



第33図 F地点 7~11号土坑平面図・断面図・出土遺物実測図

S=1/40

9号土坑 (SC9 第33図)

8号土坑の西0.6mに位置する。調査区北東側、A 3-20とA 4-20グリッドの境界付近で検出された。主軸は長軸2.54m×短軸0.49mの幅の狭い長方形を呈する。上部北側が削平されており、検出面からの深さは最深部で約19cmである。埋土はIVa層に類似する黒色土である。遺物の出土はみられなかった。

10号土坑 (SC10 第33図)

10号土坑は1号道路状遺構 (SG1) の西側、A 3-19グリッドで検出された。主軸はN-11°-Wである。長軸3.37m×短軸0.56mの幅の狭い長方形を呈する土坑である。南北方向の断面は浅い皿型である。検出面からの深さは最深部で約20cmである。床面形状は長方形を呈する。埋土はIVa層に類似する黒色土である。

11号土坑 (SC11 第33図)

10号土坑の南約4.0mに位置する。主軸はN-3.5°-Wである。長軸2.84m×短軸0.75mの幅の狭い長方形を呈する土坑である。南北方向の断面はSC10と類似する浅い皿形である。検出面からの深さは最深部で約23cmである。西側床面付近で土師器の細片が出土している。

12号土坑 (SC12 第34図)

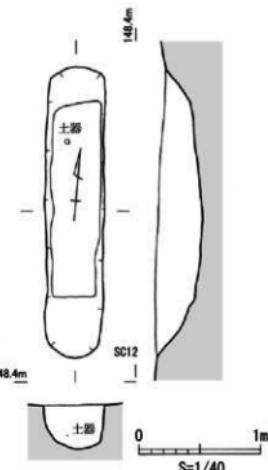
A 3-18グリッドに位置する。主軸はN-6.0°-Wである。長軸2.47m×短軸0.49mの幅の狭い長方形を呈する。断面は「U」字状を呈する。床面は長方形で、検出面からの深さは最深部で約34cmである。埋土中から土師器の細片が出土している。

(3) 溝状遺構 (第24・35図)

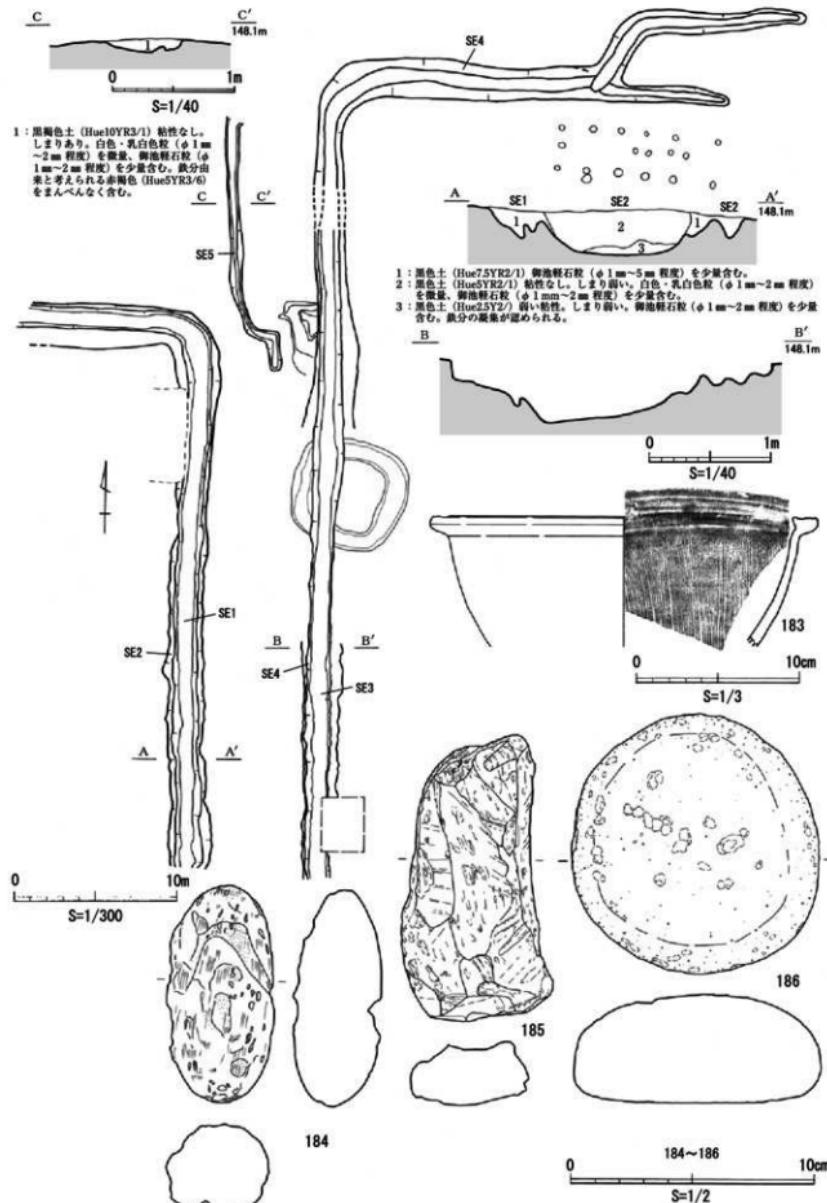
F地点において溝状遺構は大きく5条確認されている。時期はすべて近世以降である。

1号・2号溝状遺構 (SE1・2 第35図)

1号溝状遺構・2号溝状遺構は調査区南端、A 9-13グリッドから真北方向に延びA 6-13グリッドでほぼ直角に曲がり西走し調査区外へ延びる。V層を調査中に検出された。擾乱により消失する箇所もあるが、検出した範囲内で長さ約47.4m、幅1.3~1.5m、深さは最深部で0.45mであり、断面は「U」字状を呈する。1号溝状遺構は2号溝状遺構が埋没した後、その中央部に掘削され、床面はVI層（御池降下軽石層）まで達している。埋土は文明降下軽石を含む黒褐色土を主体とし、底面に約3~10cmの鉄分の凝聚する明褐色土の堆積が認められる。埋土中から軽石製品184・185が出土している。184は楕円形を呈し、表裏面と上下端に加工痕が認められ凹む。浮子の用途が考えられる。185の平面形は長方形状を呈する。裏面は平坦に加工され斜方向に工具状の痕跡がみられる。2号溝状遺構の幅は2.2~2.7m、検出面からの深さは最深部で0.3mである。断面は浅い皿型を呈する。東西両側に段を有し側溝となる。底面には顕著な凹凸が認められる。埋土中から安山岩製の磨礫石186が出土している。表面と側面に敲打痕が認められる。裏面が平坦に加工されていることから台石的な用途も推定される。



第34図 F地点12号土坑平面図・断面図



第35図 F地点 1～5号溝状造構平面図・土層断面図・出土遺物実測図

3号・4号溝状遺構 (SE 3・4 第35図)

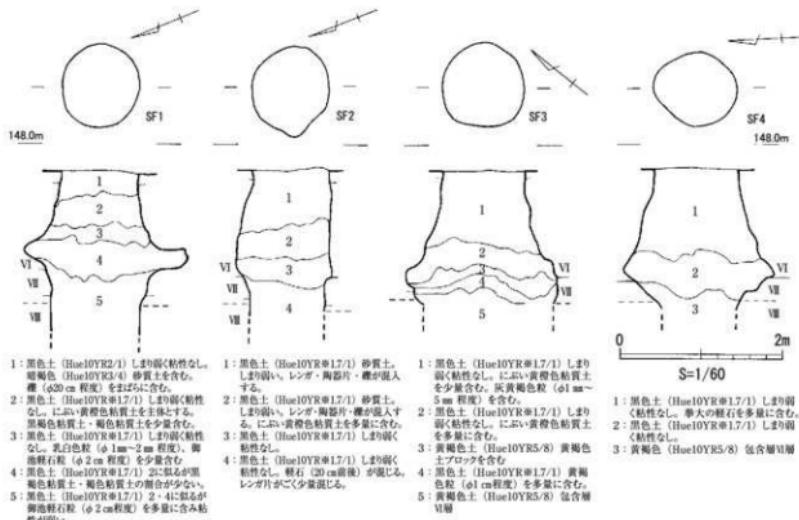
1号溝状遺構・2号溝状遺構の東側約8mに位置し並行している。4号溝状遺構は1次調査(旧F区)、A4-14グリッドで東に方向を変える。A4-16グリッドで二叉状になる。当初、この箇所はガラスやコンクリート片が多量に出土したことから攪乱箇所と認識していた。部分的には近現代まで下る可能性もある。また1次調査と2次調査の境界部分にあたるA5-14グリッド付近で確認できなかったことや平面形状等に差異が認められるため、図面上では復元できるが同一の遺構ではない可能性もある。3号溝状遺構はA7-14グリッドで、1号周溝状遺構の西側を切りこんでいる。現存長53m、幅1.2~1.9m、検出面からの深さは最深部で0.5mである。断面形は「U」字状を呈する。埋土には文明降下軽石や御池降下軽石がブロック状に入ることから、比較的短期間で埋め戻された可能性がある。埋土中から擂鉢183が出土している。桶目1単位ごとの間隔は狭く、上端は口縁下でナデそろえられる。土層断面の観察から4号溝状遺構の中央部を掘りなおしたものと考えられる。4号溝状遺構はA8-14グリッド北側からA6-14まで残存が確認されなかった。底面は凹凸があり3号溝状遺構の東西にあたる側溝状の部分は検出面から約0.2mを測る。

5号溝状遺構 (SE 5 第35図)

3号・4号溝状遺構の西側4mに位置する。A6-14グリッドでゆるやかに蛇行し消失する。検出面からの深さは約18cmで埋土は黒褐色土單一である。東側の不整形の広がりとともに自然流路の可能性がある。遺物の出土は認められなかった。

(4) 井戸跡 (第36図)

F地点の南東側(旧H区)でV面層を掘削中に4基の井戸跡が確認された。4号井戸跡を除く3基はA6-16グリッドに位置する。当該地区は比較的地下水位が高く、周辺には現在でも井戸を生活用水として使用している住宅が複数見受けられる。井戸の平面形は約1mの円形状を呈する。周囲に板や石の



第36図 F地点1~4号井戸跡平面図・土層断面図

痕跡は認められず素掘りである。掘削中、湧水により壁面崩落の危険性を考慮し、平面上端を記録した後、前面をオーブンカットし半裁しながら埋土の記録を行うこととした。壁面がオーバーハングしている箇所や御池降下軽石層壁面で崩落が認められたことから途中で掘削を断念した。

1号井戸跡（S F 1 第36図）

1号井戸跡はF地点A 6-16グリッド北東側で検出された。平面は径0.9mの円形で、確認できた範囲で検出面からの深さは1.9mである。深さ1.1m付近で袋状に広がり下部は幅1.1mの円柱状である。袋状部分で最大幅は約2.0mとなる。壁面がVII層（アカホヤ火山灰層）を約50cm掘削した時点で湧水がみられた。遺物の出土はみられなかった。

2号井戸跡（S F 2 第36図）

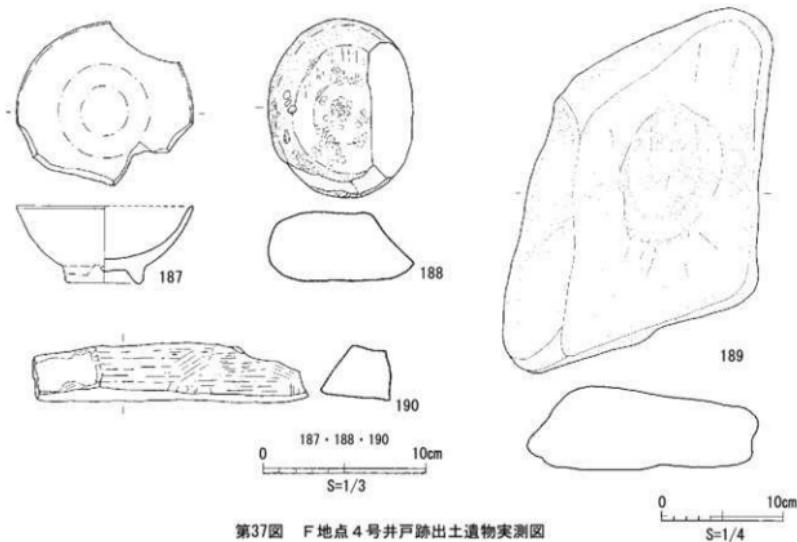
1号井戸跡の南西約1.5mに位置する。長径約1.1m×短径0.95mで西側がやや細くなる。断面はほぼ円柱状を呈する。検出面からの深さは約1.6mである。VII層下面で湧水がみられた。4層に分層された埋土の最上層にはレンガや小砾が含まれる。

3号井戸跡（S F 3 第36図）

3号井戸跡は直径1.05mの円形を呈する。1号井戸跡、2号井戸跡とN-25°-Eの軸上に位置している。1号井戸跡からの距離は3.5m、2号井戸跡からは約2mである。確認できた範囲で深さ約1.6mである。断面はラスコ状を呈し、検出面から1.3mで最大幅は1.95mである。遺物の出土はみられなかった。

4号井戸跡（S F 4 第36・37図）

1号井戸跡から南約20m、A 8-16グリッドに位置する。長径1.05m×短径0.85mの楕円形を呈する。確認できた範囲で検出面からの深さは1.5mである。深さ1.3mの付近で、断面の左右が張り出す形状で、



第37図 F地点 4号井戸跡出土遺物実測図

最大幅約1.95mである。埋土は大きく3層に分かれ、VII層上面で湧水が確認された。埋土中から碗187、砂岩製の磨礫石188、台石189、砥石190が出土している。187は薩摩燒黑系の碗である。外面は底部付近まで施釉され、底部は露胎である。内部は見込み部分が蛇の目釉剥ぎされ、高台疊付は面取りされる。189は砂岩製で使用頻度のためか、表面中央部は浅い凹みが認められる。重量は6kg。190は縦長の長方形を呈する砂岩製の砥石である。大部分を折損しているが残存する面に縱方向を主とする顕著な擦痕が認められる。

(5) 近世の遺物 (第38図)

陶磁器碗 (第38図 191・192・194)

191は京焼風の磁器碗である。内外面は貫入がみられ、見込みに砂目跡が認められる。192は薩摩燒黑系の碗である。内外面・高台内まで前面に釉が施される。見込みは蛇の目釉剥である。194の釉調は灰オリーブ色である。

磁器皿 (第38図 193)

底部から体部にかけての資料である。体部下半は露胎となる。高台内に判読し難いが『五十口』の墨書きが認められる。

陶器壺 (第38図 195~198)

薩摩燒系の壺である。口縁上面は釉剥ぎされ、重ね焼きのための貝目がみられる。196は土瓶もしくは壺の可能性もあるが注ぎ口や取手の痕跡が認められなかつたためここに分類した。胴部下半にスタンプ印がみられる。197の口縁は折り返され端部は平坦に整えられ釉剥ぎされている。内面には横方向のハケ状の痕跡が認められる。198は口縁がやや内傾し、釉剥ぎされた口縁上面には明瞭に貝目の痕跡が認められる。

擂鉢 (第38図 199)

199は推定口径約30.2cmを測る。内面には横方向のハケ状の工具痕の後5条1単位の擂目が施される。外面オーリーブ黒色、内面は赤褐色を呈する。

鉢 (第38図 200・201・202)

200は平底の底部から直線的に立ち上がる。外面胴部に2条の回線が施される。推定口径23.1cmである。内外面ともに褐灰色を呈する。201は瓦質土器、202は土師質土器で形状から焙烙の可能性もある。

皿 (第38図 203)

产地不明の陶器皿である。底部から短く立ち上がり口縁にいたる。内面に2条の回線がめぐる。内外面ともに赤褐色を呈する。

土瓶 (第38図 204)

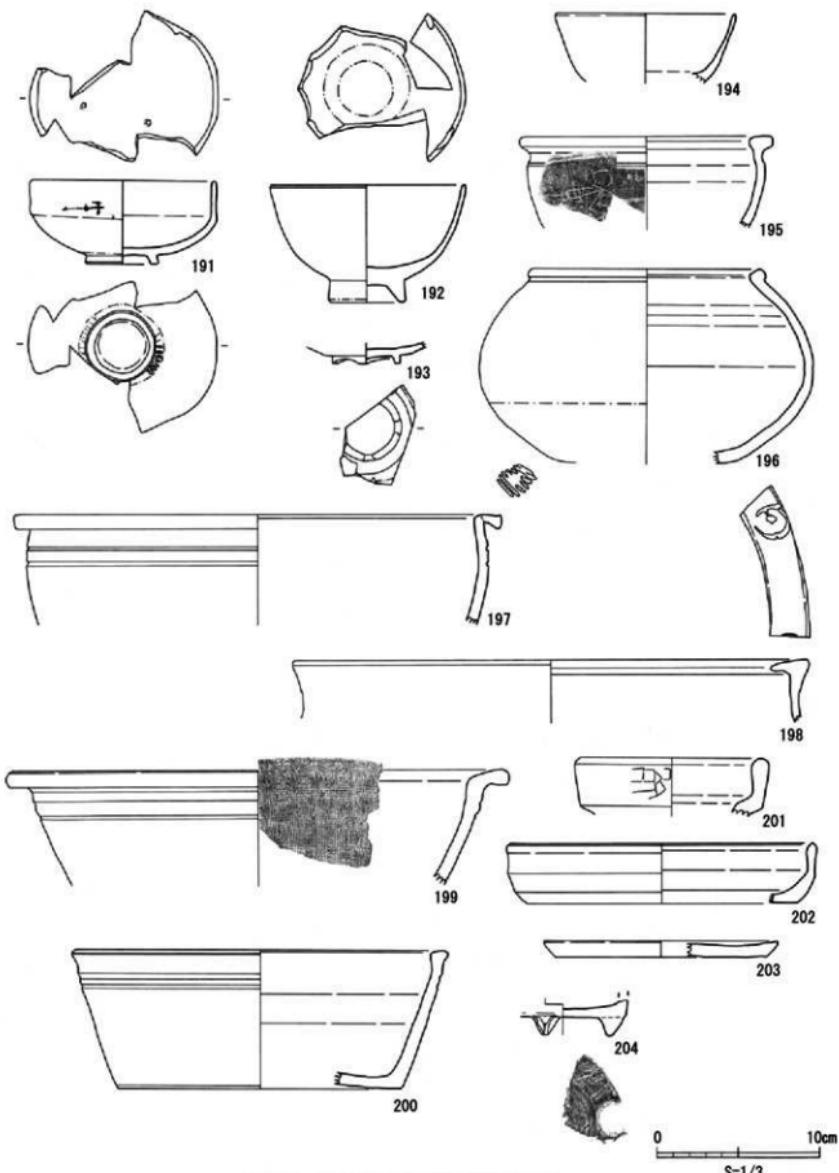
204は土瓶の底部と考えられる。土師質で胎土は軟質である。

石器 (第39図 205~208)

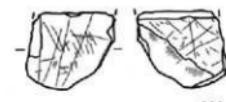
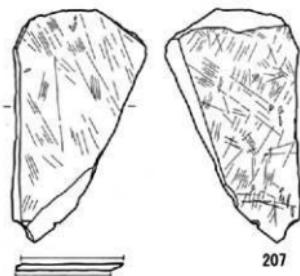
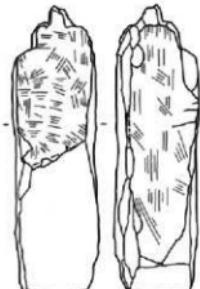
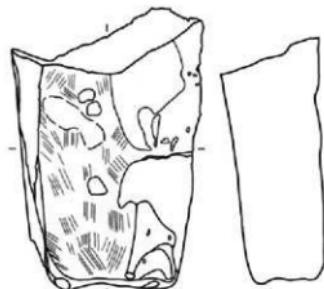
4点の砥石が出土した。205・206は砂岩製である。205は表面のみを使用し、3か所に敲きの痕跡が認められる。206は縦長で表裏面を使用している。使用頻度のためか湾曲している。顕著な擦痕が観察できる。207・208は頁岩製である。表裏面に斜方向を主体とする擦痕がみられ、厚みは3mmと非常にうすい。

錢貨 (第39図 209~213)

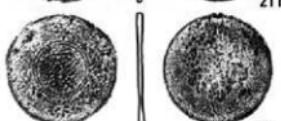
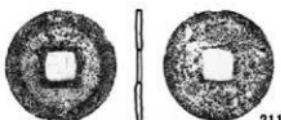
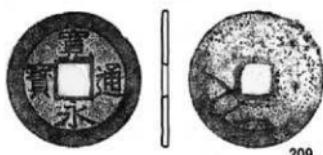
錢貨5点を採拓した。すべて本邦錢である。209・210は寛永通宝である。寛永通宝の鑄造は寛永三年(1626)年にはじまり、約240年間鑄造していた。211は錢文不明である。212は一錢貨で、213は五錢貨である。



第38図 F地点包含層出土遺物実測図（5）



0 205~208 10cm
S=1/2



0 209~213 5cm
S=1/1

第39図 F地点包含層出土遺物実測図 (6)

第1表 F地点出土遺物観察表(土器)

レイア ウト番 号	遺物 番号	出土地 点(更 改後)	出土地 点(調 査時)	種別	器種	部位	出土 過程	出土 層位	法 量(cm)		手造・調整・文様ほか		色 調		埴土の特徴	備考	
									口径	底径	高さ	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	500	F	H	绳文 土器	深鉢	口縁～ 底部	Va/ Vb				横・縱方向の ミガキ	横方向のミガ キ	黒褐・に ぶい黄 褐色	灰褐・明 赤褐色	2mm以下の灰白色粒、1mm以下 の褐色粒。微細な黑色光沢粒、 透明光沢粒を含む		
2	114	F	H	绳文 土器	浅鉢	底部	Va				横・縱方向のミガ キ	横方向のミガ キ	にぶい黄 褐色	黒褐色	1mm以下の白色粒、微細な透明 光沢粒を含む		
3	518	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部	SAI	IVb (11.1)			横ナギ、楕 多方向の工具 ナギ、工具ナ ギ後ナギ?	横方向の工具 ナギ	桜	明黄褐	5mm以下の褐色粒、3mm以下 の黑色粒。赤褐色粒、灰白色 粒、透明光沢粒、黑色光沢粒を 含む		反転復元
4	517	F	I	弥生 土器	壺	口縁	SAI	(11.2)			横ナギ、楕 多方向の工具 ナギ	横方向の工具 ナギ	桜	桜	3mm以下の赤褐色粒、黑褐色 粒、白色粒を含む		反転復元
5	531	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部付 近	SAI		8.95		(19.1)	横ナギ、楕 工具ナギ後ナ ギ?	横ナギ、工 具ナギ後ナ ギ、絞割	浅黄褐	4mm以下の褐色粒、灰白色粒。 3mm以下の透明光沢粒、2mm以 下の黑色光沢粒を含む	黒褐色・黒斑剥 れ	
6	539	F	I	弥生 土器	高杯	口縁～ 底部付 近	SAI	IVb/ Va (28.8)			横・縱方向の ミガキ	横方向のミガ キ、ミガキ	桜	桜	1mm以下の赤褐色粒、にぶい半 透明粒、黑色光沢粒を含む		反転復元
7	538	F	I	弥生 土器	高杯	底部	SAI	IVb			縦ナギ後ナ ギ、横ナギ、 ミガキ、横ナ ギ	横ナギ	桜	桜	1mm以下の赤褐色粒、黑色光 沢粒、にぶい光沢粒を含む		反転復元
8	546	F	I	弥生 土器	鉢	口縁～ 底部	SAI	Va 7.6	3.35	10.75	横方向の工 具ナギ	斜方向の工具 ナギ	桜	黄褐	3mm以下の黒褐色粒、黒褐色 粒、灰白色粒、褐色光沢粒、透明 光沢粒、赤褐色光 澤粒を含む	口縫及びつ 内縫に黒斑 れあり	
9	544	F	I	弥生 土器	鉢	口縁～ 底部付 近	SAI	Va (11.7)			横・縱方向の 工具ナギ	不明	浅黄	浅黄褐	4mm以下の赤褐色粒、黒褐色 粒、灰白色粒、黑褐色粒、黄褐 色粒を含む		反転復元
15	510	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部付 近	SC1	IVb/ Va 24.3			横ナギ、楕 多方向の工具 ナギ	斜方向の工具 ナギ、工具ナ ギ後ナギ?、 多方向の工 具ナギ	桜・浅黄 褐	白灰・浅 黄褐	7mm以下の褐色粒、5mm以下 の灰色粒、3mm以下の灰白色粒 を含む	外縫にスス付 け	
16	501	F	I	弥生 土器	壺	口縁	SC1	Va			横ナギ、楕 多方向の工具 ナギ	横・縱方向の 工具ナギ	浅黄	浅黄	3mm以下の赤褐色粒、灰白色 粒を含む		
17	515	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部付 近	SC1	IVb 21.3			横ナギ、楕 多方向の工 具ナギ、斜 方向の工 具ナギ?、 斜方向の工 具ナギ?	横・縱方向の 工具ナギ、ナ ギ	浅黄褐	にぶい黄 褐色	5mm以下の褐色粒、3mm以下 の白色粒、2mm以 下の灰白色粒 を含む	風化著しい	
18	511	F	I	弥生 土器	壺	完形	SC1	Va (6.15)	21.85	(29.3)	横・縱方向の 工具ナギ	横・縱方向的 工具ナギ	桜	黄褐・浅 黄褐	4mm以下の赤褐色粒、暗赤色 粒、3mm以下の灰白色粒、3mm以 下の灰白色粒、 透明光沢粒、較厚赤 色粒を含む		
19	506	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部付 近	SC1	Va (19.8)			横ナギ、斜 多方向の工 具ナギ	斜方向的 工具ナギ、斜 方向の ハケ目	明黄褐	明黄褐	3mm以下の灰白色粒、褐赤色 粒、褐色粒、黑褐色 粒を含む	全体にスス付 け、一部風化 物付着、下部 に黒斑、反転 復元	
20	508	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部	SC1	Va 19.5	6.2	25.0	横ナギ、楕 多方向の工 具ナギ	横・縱方向的 工具ナギ、斜 方向の工 具ナギ	にぶい黄 褐色	桜	4mm以下の赤褐色粒、赤褐色 粒、3mm以下の半透明の白色 粒、2mm以下の半透明 光沢粒を含む	底部附近に 指壓圧痕あり	
21	514	F	I	弥生 土器	壺	腹部完 形	SC1	Va (15.1)	5.6	19.4	横・縱方向的 工具ナギ	横・縱方向的 工具ナギ、指 押さえ	浅黄褐	桜	6mm以下の褐色粒、褐色 粒、3mm以下の灰白色粒、灰白 色光沢粒、2mm以 下の黑色光 沢粒を含む	風化著しい 内縫に黒斑 れあり	
22	509	F	I	弥生 土器	壺	ほぼ完 形	SC1	Va (15.1)	5.6	19.4	横・縱方向的 工具ナギ	横・縱方向的 工具ナギ、指 押さえ	黄褐・黄 褐色	黄褐・黄 褐色	5mm以下の黒褐色粒、4mm以 下の赤褐色粒、黃褐色粒、灰白 色粒、2mm以下の透明光沢粒、較 厚赤褐色粒を含む		
23	504	F	I	弥生 土器	壺	口縁	SC1	IVb (15.3)			横方向の工 具ナギ、ツバ 底	横・斜 方向の工 具ナギ	桜	浅黄褐	5mm以下の灰褐色粒、2mm以 下の黑色光沢粒、赤褐色光 澤粒を含む	反転復元	
24	527	F	I	弥生 土器	壺	口縁～ 底部	SC1	Va 12.55			横ナギ、楕 多方向の工 具ナギ、斜 方向の工 具ナギ後ナ ギ?、ツバ 底	横・斜 方向の工 具ナギ、斜 方向の ハケ目	桜・浅黄 褐	灰白	7mm以下の褐色粒、5mm以下 の灰白色粒、灰白色 粒、2mm以下の 黑色光沢粒、透明 光沢粒を含む	風化著しい	
25	525	F	I	弥生 土器	壺	腹部付 近～底 部	SC1	Va	5.0		横・斜方向的 工具ナギ	横・斜方向的 工具ナギ	桜・明黄 褐	浅黄褐	6mm以下の灰褐色粒、4mm以下 の褐色粒、灰白色 粒、2mm以下の透 明光沢粒を含む	外縫に黒斑 れあり	
26	523- 2	F	I	弥生 土器	壺	底部	SC1	Va			横・縱方向的 工具ナギ	しばり、指压 底	にぶい黄 褐色	桜・浅 黄褐	4mm以下の黒褐色粒、灰白色 粒、透明光沢粒を含む	風化著しい、 反転復元	
27	523- 1	F	I	弥生 土器	壺	底部	SC1	Va (5.2)			横・縱方向的 工具ナギ	工具ナギ後 ナギ	浅黄褐	浅黄褐・灰 褐色	4mm以下の黒褐色粒、半透明 光沢粒を含む	風化著しい、 反転復元	
28	536	F	I	弥生 土器	鉢	完形	SC1	Va 18.2	4.8	10.85	横・縱・多方 向の工 具ナギ	横・縱・多方 向の工 具ナギ	浅黄褐	黄褐	6mm以下の褐色粒、褐色 粒、4mm以下の赤褐色粒、灰白色 粒、4mm以下の赤褐色粒、灰白色 粒、赤褐色 光沢粒を含む	外縫全体に に風化著しい、 内縫一帯に 黒斑あり	
29	627	F	I	弥生 土器	高杯	杯口 縁	SC1	Va			工具ナギ	工具ナギ	桜	浅黄褐	4mm以下の褐色粒、透明光 沢粒、赤褐色 光沢粒を含む		

レイア ク番 号	遺物 番号	出土地 点(更 後)	出土地 点(原 始時)	種別	器種	部位	出土 深幅	出土 層位	法 量(cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		出土の特徴	備考		
									口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
30	628	F	I	弥生 土器	高 环	瓶部～ 底部	SC1	Va	(24.8)		工具ナデか	工具ナデか	浅黄褐	棕	3mm以下の褐色系、2mm以下の透明光沢粒、赤褐色粒を含む			
31	533	F	I	弥生 土器	鉢	脚部～ 底部	SC1	Va	3.1		ナデ、指押さ え丸	ナデ	浅黄褐	棕	5mm以下の灰白色粒、薄褐色 粒・純褐色粒・灰色粒を含む			
32	545	F	I	弥生 土器	鉢	口縁～ 底部	SC1	Va	9.8		横ナデ、ナ デ、ナデ後方 方向の工具ナ デ	指押さえ後方 方向の工具ナ デ	棕	棕	3mm以下の褐色系、深褐色系、 2mm以下の灰白色粒、透明光沢 粒を含む	外底底部から 脚部に墨斑 あり		
33	547	F	I	弥生 土器	鉢	完形	SC1	Va	10.0		(3.6)	新方向の工 具ナデ	指押さえ後工 具ナデ	棕・浅黄 褐・青白	棕	5mm以下の灰白色粒、3mm以下 の赤褐色粒、灰色粒を含む		
34	549	F	I	弥生 土器	鉢	完形	SC1	Va	9.25		ナデ、多方角 方向の工具ナ デ	新方向の工 具ナデナデ後 指押さえ板	棕	棕	5mm以下の灰白色粒、3mm以下 の赤褐色粒、透明光沢 粒を含む			
35	625	F	I	弥生 土器	鉢	口縁～ 脚部	SC1	Va	(8.6)		指押さえ、ナ デ	指押さえ、ナ デ	浅黄褐	浅黄褐	5mm以下の暗褐色系、黑色光沢 粒・透明光沢粒・褐色系 を含む			
36	503	F	I	弥生 土器	便	口縁～ 脚部	SL1	Va	(19.2)		横ナデ、横・ 斜方向の工具 ナデ、斜・斜方 向の工具ナデ	斜・斜方向的 工具ナデ	棕	棕	5mm以下の暗褐色系、棕色系 5mm以下の灰白色粒、黑色光沢 粒・白色光沢粒、1mm以下の黑 色粒を含む	外周にス付 着・反転復元		
37	507	F	I	弥生 土器	便	底部付 近	SL1	Va	(20.0)		横ナデ、版・ 横方向の工 具ナデ	斜・横・斜方 向の工具ナデ	棕	棕	5mm以下の赤褐色系、4mm以下 の灰白色粒、褐色系・灰白色 粒・白色光沢粒、2mm以下の黑 色粒を含む	反転復元		
38	520	F	I	弥生 土器	蓋	底部付 近	SL1	Va	5.7		縦・斜方向的 工具ナデ	斜方向的工 具ナデ	棕	棕	3mm以下の黒褐色系、2mm以下 の赤褐色系、1mm以下の透 明光沢粒	反転復元		
39	529	F	H/I	弥生 土器	蓋	脚部～ 底部	SL1	Va	5.8		縦・斜・多方 向の工具ナデ	指ナデ後押 し、斜方向の 工具ナデ、工 具ナデ	棕	棕	4mm以下の褐色系、3mm以下 の灰白色粒、黑色光沢粒・褐色系 を含む	外外面に皺 折付着・墨斑 あり		
40	801	F	I	弥生 土器	便	底部付 近～底 部	SL1	Va	2.2		ナデ、風化 層	斜・橫方向的 工具ナデ	棕	棕	2mm以下のにじみ赤褐色系、 褐色系・褐色光 沢粒を含む	外周に墨斑 あり		
41	534	F	H	弥生 土器	鉢	口縁～ 底部	SL1	Va	(18.3)		横ナデ、横・ 縦方向のナデ	指押さえ板	棕・明黄 褐	棕	4mm以下の暗褐色系・褐色系 3mm以下の灰褐色系・黑色光 澤粒・褐色光澤 粒・白色光澤 粒・軟褐色系を含む	風化著しい・ 反転復元		
42	540	F	H	弥生 土器	高 环	脚部付 近完形	SL1	Va	16.25		縦方向のミガ キ、横ナデ、 擦れ	縦方向的工 具ナデ	明黄褐	棕	2mm以下の赤褐色系・褐色系 ・灰褐色系・黑色光澤粒・透明 光澤粒・白色光 澤粒・灰褐色 光澤粒を含む	穿孔Aか否 か・反転復元		
43	548	F	H	弥生 土器	鉢	完形	SL1	Va	9.0		8.05	指押さえ	指押さえ	棕	3mm以下の黃褐色系・灰白色 系・褐色系・赤褐色系・褐色光 澤粒・赤褐色光 澤粒・透明光 澤粒を含む	全体的にい びつな指押さ え痕あり		
44	541	F	I	弥生 土器	鉢	脚部～ 底部	SL1	Va	(3.8)		工具ナデか?	工具ナデか?	棕	棕	5mm以下の灰白色系、2mm以下 の灰色系・透明光澤系・黑色光 澤系を含む	風化著しい		
45	512	F	H	弥生 土器	便	口縁～ 底部付 近	1号 土器層	Va	24.7		ナデ、横・方 向の工具ナ デ	ナデ・斜・橫 方向の工 具ナデ	棕	棕	5mm以下の赤褐色系・褐色系 3mm以下の灰褐色系・黑色光 澤系・褐色光 澤系・白色光 澤系を含む	外張一部墨 斑・ス付着・ 内面化粧 付着		
46	513	F	H	弥生 土器	便	完形	1号 土器層	Va	26.45		7.3	36.9	ナデ、横・斜 方向の工 具ナデ	ナデ・横・斜 方向の工 具ナデ	明黄褐	棕	4mm以下の褐色系・褐色系・3 mm以下の灰白色系・黑色光 澤系・褐色光 澤系・白色光 澤系を含む	外張S付 着・内面化粧 付着
47	543	F	H	弥生 土器	便	脚部～ 底部	1号 土器層	Va	4.85		ハケ目後ナ デ、横方向の ハケ目、工具 ナデ後ナデ	斜方向的工 具ナデ	浅	浅黄褐	3mm以下の褐色系・灰褐色系、 2mm以下の透明光澤系を含む	反転復元		
48	528	F	H	弥生 土器	便	口縁～ 底部	1号 土器層	Va	8.0		(3.0)	斜・横方向的 工具ナデ	斜・横方向的 工具ナデ後ナ デ・擦れ	浅黄褐	3mm以下の赤褐色系・褐色系 ・灰褐色系・白色光 澤系・黑色光 澤系・透明光 澤系を含む	外周に墨斑・ 脚部付近に 底斑・底部付 近に縫跡		
49	530	F	H	弥生 土器	便	完形	1号 土器層	Va	8.0		6.0	18.3	横ナデ、版方 向の工具ナ デ後ナデ消 し・擦れ	ナデ・版方 向の工具ナ デ後ナデ消 し・擦れ	浅黄褐	棕	5mm以下の褐色系、4mm以下 の褐色系・3mm以下の反白粒、2 mm以下の透明光澤系を含む	風化氣味・反 転復元
50	522	F	H	弥生 土器	便	口縁～ 脚部	1号 土器層	Va	9.25		3.85	横ナデ、版方 向の工具ナ デ後横ナデ、 擦・横・版方 向の工具ナ デ	工具ナデ後横 ナデ・擦・工具 向の工具ナ デ後縫跡	棕	4mm以下の褐色系・4mm以下 の灰褐色系・2mm以下 の褐色系を含む	外底底部付 近に3本の 縫跡		
51	524	F	H	弥生 土器	便	脚部付 近～底 部	1号 土器層	Va	3.85		多方向の工 具ナデ、擦 ・横・版方 向の工具ナ デ	工具ナデ後 擦・多方向 工具ナデ・擦 ・横・版方 向の工具ナ デ	棕	棕	5mm以下の褐色系・4mm以下 の灰褐色系・2mm以下 の褐色系を含む			
52	526	F	H	弥生 土器	便	脚部付 近～底 部	1号 土器層	Va	3.3		横・版方 向の工 具ナデ	横・版方 向の工 具ナデ、指ナ デ	浅黄褐	浅黄褐	4mm以下の褐色系・3mm以下 の赤褐色系・褐色系・2mm以下 の褐色系を含む	外周に墨 斑・内面化 粧付着		

レイア ク番 号	出土地 番号	出土地 点(調 査後)	種別	器種	部位	出土 深度	出土 層位	法 量 (cm)		手法・因襲・文様ほか		色 調		出土の特徴	備考		
								口径	底径	標高	外 面	内 面	外 面	内 面			
53	535	F	H	弥生 土器	鉢	完全	1号 土器層	Va	17.9	5.6	9.5	横ナデ、横方 向の工具ナ デ、工具ナデ と押さえ、 縫剝	横方向の工具 ナデ、工具ナ デ	浅黄檜	浅黄檜	3mm以下の褐色 粒、赤褐色粒、灰白色粒、灰白 光沢粒、黒褐色粒、黑褐色光沢 粒を含む	外蓋一部裏 縫剝あり
55	71	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	27.3	8.6	32.9	ナデ、斜み目 貼り付け突 起、横方向の 工具ナデ、 横ナデ	横ナデ、横、 斜方向の工具 ナデ、指捺痕	浅黄檜	浅黄檜 にぶい黄 檜	3mm以下の赤褐色粒、黑色粒、 1mm以下の透明光沢粒を含む	
56	82	F	H	弥生 土器	甕	口縁	3号 土器層	Va	(30.7)			ナデ、横方向 の荒いナデ、 横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	4mm以下の黑色粒、純白色粒、褐 色粒、灰白色光沢粒、透明光沢 粒を含む	反転復元
57	72	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部付近	2号 土器層	Va	31.4			ハケ目後横ナ デ、横、斜方 向のハケ目	ハケ目か?	浅黄檜	浅黄檜	5mm以下の褐色粒、3mm以下の 褐色光沢粒、黒褐色粒、1mm下 の灰白色粒、微細な透明光沢 粒を含む	内外面一部 裏縫あり、外 縫一帯にスヌ 付帯
58	78	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	(23.1)			横ナデ、ハケ 目後ナデ、横、 斜方向のハ ケ目	ハケ目後ナ デ、横、斜方 向のハケ目	にぶい黄 檜	檜、黑	3mm以下の褐色粒、純白色粒、 灰白色粒、1mm下 の透明光沢粒を含 む	内外面の口部以 外に黒縫あり、 外縫一部黒縫 ・反転復元
59	81	F	H	弥生 土器	甕	口縁	2号 土器層	Va	30.0			工具による横 ナデ、横方向 のナデ	横方向の工具 ナデ	浅黄檜	浅黄檜	5mm以下の褐色粒、純白色粒、 1mm以下の透明光沢粒、灰色 粒を含む	内外面に黒縫 あり
60	241	F	H	弥生 土器	甕	胴部	2号 土器層	Va				ナデ、風化著 しい	横、斜方向 の工具ナ デ	浅黄檜	浅黄檜	5mm以下の赤褐色粒、灰白色 粒、黑色粒、黑色光沢粒、灰 色粒、透明光沢粒を含む	反転復元
61	74	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	(12.0)	(4.0)	12.3	横方向のミガ キ、斜、斜方 向のミガキ	工具によるナデ	浅黄檜	浅黄檜	5mm以下の褐色光沢粒、3mm下 の褐色粒、灰白色光沢粒、黑色 粒、2mm以下の透明光沢粒を含 む	黒化気味・外 縫に黒縫原 あり・内縫に丹 波りか?・反 転復元
62	73	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	13.1	3.8	12.6	ナデ、斜方 向のナデ、斜方 向の工具ナ デ	ナデ	明黄檜	明黄檜	3mm以下の赤褐色粒、1mm下 の透明光沢粒、灰白色光沢粒を含 む	内縫原元・反 転復元
63	77-1	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	(10.5)		12.0	横ナデ、工具 による横ナ デ、斜、斜方 向の工具 ナデ	同じ上部の横 ナデ、横、斜方 向の工具ナ デと押さえ、 縫剝	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	3mm以下の赤褐色粒、2mm下 の乳白色粒、黑色粒、1mm下 の透明光沢粒を含む	内縫原元・反 転復元
64	77-2	F	H	弥生 土器	甕	底部	2号 土器層	Va		3.1	3.9	縫剝	指ナデ	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	3mm以下の黑色粒、赤褐色光 沢粒、1mm以下の灰白色粒、透 明光沢粒を含む	底面に絆縫 あり・内縫原元 ・反転復元
65	78	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	2号 土器層	Va	(7.0)	3.7	18.8	ナデ、斜方 向のナデ、斜方 向の工具ナ デ	ナデ	縫・斜方 向のナデ	にぶい黄 檜	4mm以下の黑色光沢粒、3mm下 の赤褐色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒を含む	内縫原元・反 転復元
66	83	F	H	弥生 土器	甕	底部	2号 土器層	Va				ナデ?、縫剝	側方向の工具 ナデ、指押さえ	浅黄檜	縫	5mm以下の赤褐色粒、3mm下 の赤褐色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒を含む	縫剝あり・反 転復元
67	242	F	H	弥生 土器	甕	胴部～ 底部	2号 土器層	Va		(5.1)		側・斜方 向の工具ナ デ	側・斜方 向の工具ナ デ	浅黄檜	浅黄檜	5mm以下の赤褐色粒、3mm下 の赤褐色光沢粒、黑褐色光 沢粒、透明光沢 粒を含む	内縫原元・ 縫・斜方 向の工具ナ デあり
68	134	F	H	弥生 土器	甕	胴部～ 底部	2号 土器層	Va		6.15		工具によるナ デ後ナギキ	工具による斜 向のナデ、ナ デ後ナギキ?	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	5mm以下の赤褐色光沢粒、2mm下 の赤褐色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒を含む	底面に黒縫 あり上縫原元 ・反転復元
69	516	F	I	弥生 土器	甕	胴部～ 底部	3号 土器層	Va		8.1		斜・斜方 向の工具ナ デ	多方向・斜方 向の工具ナ デ	浅黄檜	浅黄檜	7mm以下の赤褐色光沢粒、黑褐色 光沢粒、灰白色粒、透明光沢 粒を含む	反転復元
70	502	F	I	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	3号 土器層	Va				横ナデ、多方 向のナギキ	斜・横方 向のナギキ、 しりぞり	黑	にぶい黄 檜	3mm以下の赤褐色光沢粒、墨褐色 光沢粒、灰白色光 沢粒、物細かな黒褐色光沢 粒を含む	内外面に黒 縫原元・反 転復元
71	505	F	I	弥生 土器	甕	口縁～ 底部	3号 土器層	Va	(22.5)			横ナデ、工具 ナデナデ	押さえ後工 具ナデ、ナ デ、工具 向の真ナデ 後押さえ	にぶい黄 檜	浅黄檜	5mm以下の赤褐色光沢粒、3mm下 の灰白色粒、2mm下の黑色 粒、純白色粒、白色 光沢粒を含む	内外面に黒 縫原元・反 転復元
72	532	F	I	弥生 土器	壺	底部	3号 土器層	Va	(28.7)			横ナデ、工具 ナデ	横方向の工具 ナデ	檜	にぶい黄 檜	4mm以下の赤褐色光沢粒、純 白色光沢粒、赤褐色 光沢粒、物細 かな赤褐色光 沢粒を含む	内外面に黒 縫原元・反 転復元
73	99	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va	(20.8)			横ナデ	横ナデ、指捺痕	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	2mm以下の透 明光沢粒、1mm下 の灰色粒を含む	外蓋一部 にスヌ付帯 ・反転復元
74	6	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va	(20.8)			横ナデ、横 方のナデ	横、斜方 向のナデ	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	3mm以下の黒褐色光沢粒、2mm下 の赤褐色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒、黑色 光沢粒を含む	外蓋一部 にスヌ付帯 ・反転復元
75	9	F	F	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Vb	(19.5)			横ナデ、横、 斜方 向のナデ	横方向のナ デ、斜方 向のナデ	褐灰檜	褐灰檜	2mm以下の赤褐色光沢粒、2mm下 の灰白色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒、物細 かな透明光沢 粒を含む	外蓋一部 にスヌ付帯 ・反転復元
76	128	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(27.7)			横ナデ、横方 向のナデ、 貼り付け突 起、ナ デ	横方向のナ デ、ナ デ	にぶい黄 檜	にぶい黄 檜	4mm以下の赤褐色光沢粒、褐色 光沢粒、2mm下 の灰白色光沢粒、1mm下の透 明光沢粒、物細 かな透明光沢 粒を含む	外蓋全体 部にスヌ付 帯・反転復元

レイア ウ番 号	遺物 番号	出土地 点(更 後)	出土地 点(調 査後)	種別	器種	部位	出土 遺構	出土 位置	法 量(cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		出土の特徴	備考
									口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	
77	85	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(22.4)		横ナデ、瓶方 向のナデ	工具による横 ナデ、瓶方 向のハバ目	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑・黒	2mm以下の灰色粒・赤褐色粒。 1mm以下の透明光沢粒を含む	内面に底面あ り、反転復元
78	3	F	F	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Vb	(25.1)		横ナデ、瓶方 向のナデ、斜 方右のハバ 目。刮削付 突部	横方向のナ デ、斜方右の ハバ目。ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	3mm以下の白色粒・褐色 粒、2mm以下の透明光沢粒・灰 白色粒・灰褐色粒、1mm以下の 黑色光沢粒を含む	外間にスス付 着、黒化・若し い・反転復元
79	14	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、瓶方 向のナデ	ナデ	浅黃緑	浅黃緑	3mm以下の白色粒・黑色光 色粒、1mm以下の 透明光沢粒を含む	黒化著しい
80	4	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、瓶方 向のナデ	横方向のナ デ	椎	椎	4mm以下の反白粒、2mm以下 の黒粒、1mm以下の透明光沢 粒、反転を含む	黒化著しい
81	8	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、瓶方 向のナデ	横ナデ、瓶方 向のナデ	椎	椎	3mm以下の反白粒、2mm以下 の透明光沢粒を含む	黒化著しい
82	121	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va			横ナデ、工 具による横 ナデ	工具による横 ナデ	浅黃	にぶい黃 緑	2mm以下の乳白色粒、1mm以 下的赤褐色粒、微細な透明光 沢粒を含む	
83	7	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横方向のナ デ、ナデ	横ナデ、瓶方 向のナデ、ナ デ	明赤緑	にぶい赤 緑・にぶい黃 緑	3mm以下の青褐色・白色粒、2mm下 の反白粒、1mm以 下的透明光沢粒を含む	内面下部に 底面あり
84	109	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(18.0)		不明	不明	浅黃	浅黃	2mm以下の反白粒、1mm以下 の透明光沢粒を含む	全般的に黒 化・黒化著しい・反 転復元
85	102	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(21.0)		横方向の工 具ナデ	横・斜方向の 工具ナデ	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	4mm以下の褐色粒・黑色光 色粒・灰褐色粒・灰褐色 粒、1mm以下の 透明光沢粒を含む	全般的に黒 化・黒化著しい・反 転復元
86	79	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(14.0)		工具による横 ・斜方向の工 具ナデ、指頭痕	工具ナデ	にぶい黃 緑・深黃	にぶい黃 緑	2mm以下の褐色粒・黑色光 色粒、1mm以下の 透明光沢粒を含む	外間にスス付 着、黒化・反 転復元
87	119	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(14.6)		指頭痕、瓶方 向のナデ	工具による横 ナデ、瓶方 向の工具ナ デ	椎	椎	3mm以下の赤褐色粒・白灰色 粒、2mm以下の黑色光 色粒を含む	反転復元
88	112	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va			工具による横 ナデ、瓶方 向の工具ナ デ	工具による横 ナデ	浅黃・に ぶい黃 緑	浅黃	2mm以下の赤褐色粒・黑 色光沢粒、1mm以 下的透明光沢粒 を含む	
89	108	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va			ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい黃 緑・黑	にぶい黃 緑	3mm以下の赤褐色粒・白灰色 粒、1mm以下の 透明光沢粒、1mm下 の黑色光沢粒を含む	全般的に黒 化・黒化著しい
90	101	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va			横方向・斜方 向の工具ナ デ	斜方向の工 具ナデ(ナデ ナデ後ナデ)	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	3mm以下の赤褐色粒・白灰色 粒、2mm以下の無色 透明光沢粒、半透 明光沢粒を含む	外間にスス付 着
91	122	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va			工具による横 ナデ	横ナデ、ナ デ、指頭痕	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	4mm以下の赤褐色粒、3mm以 下的黑色光沢粒、2mm以下の無色 透明光沢粒を含む	
92	83	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、瓶方 向の工具ナ デ	横方向の工 具ナデ	椎	椎	2mm以下の反白粒、褐色 粒、半透明光沢 粒を含む	
93	12	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、ナデ	ナデ	椎	椎	5mm以下の赤褐色粒、1mm以 下的光沢粒、褐色 粒、透明光沢粒を含む	
94	2	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			ナデ	横方向の工 具ナデ	椎	椎	3mm以下の反白粒、2mm以下 の黑色光沢粒、透 明光沢粒を含む	
95	10	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ	横方向のナ デ	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	2mm以下の反白粒、透明光 沢粒を含む	外間にスス付 着
96	118	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va			横方向のナ デ	横方向のナ デ	浅黃	浅黃	1mm以下の赤褐色粒・黑 色光沢粒、透明光 沢粒を含む	
97	19	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、瓶方 向のナデ	横ナデ、ナ デ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色粒・赤褐色 粒・褐色粒・透明光 沢粒を含む	
98	1	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横方向の工 具ナデ	横方向の工 具ナデ(ナ デ後ナデ)	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	2mm以下の白色粒・赤褐色 粒・褐色光沢粒を含む	
99	13	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			ナデ	ナデ	浅黃	にぶい黃 緑	1mm以下の黑色光沢粒・白色 粒・褐色光沢粒を含む	
100	87	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va	(31.0)		ナデ	ナデ	浅黃	椎	4mm以下の褐色粒・灰色粒・白 色光沢粒、2mm以下 の透明光沢粒、微細な透明光 沢粒を含む	黒化著しい・ 反転復元
101	105	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va			横ナデ、ナ デ	工具による横 ナデ	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	2mm以下の透明光沢粒・褐色 粒を含む	
102	5	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va			横方向のナ デ	横方向のナ デ	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	3mm以下の透明光沢粒・灰色 粒、2mm以下の 褐色光沢粒・透明光 沢粒を含む	
103	11	F	F	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va			横方向のナ デ、瓶方 向のハ バ目	横方向の ハバ目	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	2mm以下の透明光沢粒・灰色 粒、2mm以下の 褐色光沢粒・透明光 沢粒を含む	
104	22	F	F	弥生 土器	甕	底部		Va			刮削付 突部、横方 向のナデ	ナデ	にぶい黃 緑	にぶい黃 緑	2mm以下の半透明光沢粒・灰色 粒・白色光沢粒を含む	

レイア ク番 号	遺物 番号	出土地 点(更 改後)	出土地 点(原 始地)	種別	器種	部位	出土 状況	出土 層位	法 量(cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		出土の特徴	備考	
									口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
105	21	F	F	弥生 土器	甕	胴部		Va			横方向のナ デ、貼り付け 突審	ナデ	にぶい黄 褐色	2mm以下の黒色光沢粒、1mm以 下の褐色粒・半透明白色粒・黑 色粒を含む			
106	159	F	F	弥生 土器	甕	胴部		Va			横方向のナ デ、貼み目突審	斜方向のナデ	椎	にぶい黄 褐色	2mm以下の褐色粒・淡灰色粒・ 半透明白色粒・黑色粒・透明光沢粒 を含む		
107	20	F	F	弥生 土器	甕	胴部		Va			横方向のナ デ、貼り付け 突審	ナデ	浅黃褐色	3mm以下の半透明白色粒・白色 粒・褐色粒・黑色粒、2mm以下の 灰白色粒を含む			
108	23	F	F	弥生 土器	甕	胴部		Va			ナデ、横方 向のナデ、貼り 付け突審	ナデ	にぶい黄 褐色	3mm以下の褐色粒、2mm以下の 半透明白色粒・白色粒・灰色 粒・褐色粒、1mm以下の金雲母 を含む			
109	126	F	H	弥生 土器	甕	胴部		Va			椎ナデ、貼 り付け突審	斜方向のナデ	灰黃褐色	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下 の灰白色粒、1mm以下の金雲母 を含む			
110	24	F	F	弥生 土器	甕	底部		Va	(E.1)		縱方向の工 具ナデ、横方 向の工具ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色	8mm以下の灰白色粒、2mm以 下黒褐色・黑色粒を含む			
111	145	F	H	弥生 土器	甕	頭部～ 底部		Va	4.9		横方向のハケ 目・ナデ	ナデ	浅黃褐色	3mm以下の灰色粒・褐色粒・白 色透明光沢粒、1mm以下の透明 光沢粒・黑色光沢粒を含む		反転復元	
112	30	F	F	弥生 土器	甕	頭部～ 底部		Va	7.3		縱方向のハケ 目、横方向の ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色・灰	3mm以下の灰色粒、2mm以下の 褐色粒・白色粒・赤褐色光沢粒・ 黑色粒、微細な透明光沢粒を含 む		外縁に部分 的に黒褐色 の付着あり ・反転復元	
113	542	F	I	弥生 土器	甕	頭部～ 底部		IVb	(4.7)		工具ナデか?	工具ナデか?	椎	4mm以下の褐色光沢粒、2mm以 下の灰白色粒・白褐色のにぶい光沢 粒を含む		黒褐色着しい ・反転復元	
114	15	F	F	弥生 土器	甕	口縁		Va	(11.3)		横ナデ、横方 向のナデ後一 部縱方向のミ ガキ	横方向のナデ	にぶい黄 褐色	3mm以下の褐色粒、2mm以下の 半透明白色粒・黑色粒、微細な黑色 光沢粒・透明光沢粒を含む		反転復元	
115	124	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va	(16.7)		横ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色	1mm以下の黒褐色・白色粒・ 微細な白色粒・透明光沢粒を含 む		全体的に黒 褐色着しい・ 反転復元	
116	117	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va	(10.6)		ナデ・横方 向の工具ナデ	横方向の工具 ナデ・しごり 窓	にぶい黄 褐色	7mm以下のにぶい赤褐色粒、4 mm以下の褐色光沢粒・灰褐色粒、2 mm以下の黒褐色・透明光沢粒を含 む		口縁部一部 に黒褐色 の付着あり ・反転復元	
117	116	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部		Va	(11.8)		ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色・黄 褐色	4mm以下の灰白色粒・褐灰色 粒・灰褐色光沢粒・褐色光沢粒、2mm 以下の黒褐色・透明光沢粒を含む		全体的に黒 褐色着しい・ 反転復元	
118	500	F	H/I	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部		IVb	(15.0)		横ナデ、横方 向の工具ナデ	斜方向の工具 ナデ・横方向 の工具ナデ	にぶい黄 褐色	5mm以下のにぶい赤褐色粒、2 mm以下の褐色光沢粒・黑色粒・ 透明光沢粒を含む		顎面内にし て黒褐色 の付着あり ・反転復元	
119	75	F	H	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(8.4)	3.1	19.9	ナデ、横方 向による横 ナデ、ハケ 目、工具ナ デ	ナデ	にぶい黄 褐色	3mm以下の黒褐色、2mm以下の 赤褐色光沢粒・黑色粒、1mm以 下の黒褐色・透明光沢粒を含む		一部黒褐色 ・反転復元
120	551	F	I	弥生 土器	甕	口縁～ 底部		Va	(13.6)		ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色	5mm以下の褐色光沢粒・2mm以 下の黑色粒・黑色光沢粒・透明光 沢粒を含む		黒褐色着しい ・反転復元	
121	80	F	H	弥生 土器	甕	口縁		Va	(23.2)		工具による横 ナデ、横ナデ	横方向のミガキ	にぶい黄 褐色	2mm以下の赤褐色光沢粒・透 明光沢粒、1mm以下の黒褐色光 澤粒を含む		反転復元	
122	16	F	F	弥生 土器	長瓶 甕	口縁～ 底部付 近		IVb	(14.2)		横ナデ、横方 向のナデ、横 方向のナデ	横ナデ、ナデ	にぶい黄 褐色	2mm以下の透明光沢粒・微細な 黑色粒・黑色光沢粒を含む		反転復元	
123	519	F	H	弥生 土器	甕	頭部～ 胴部		IVb			縦・斜方向の 工具ナデ後相 互いナデ	ナデ、しごり 窓	にぶい黄 褐色	4mm以下の反転光沢粒、3mm以 下のにぶい赤褐色粒、2mm以下の白 色光沢粒・1mm以下の黒褐色光 澤粒を含む		反転復元	
124	127	F	H	弥生 土器	甕	胴部		Va			椎ナデ、貼 り付け突審	ナデ?	にぶい黄 褐色	2mm以下の透明光沢粒・黑色 粒、1mm以下の灰白色粒を含む		黒褐色着しい	
125	31	F	F	弥生 土器	甕	底部		IVb			横方向の工 具ナデ	ナデ	浅黃褐色	3mm以下の褐色光沢粒・2mm以 下の黑色粒・黑色光沢粒・無色透 明光沢粒を含む		黒褐色着しい ・反転復元	
126	137	F	H	弥生 土器	甕	頭部～ 底部		Va	3.0		横方向の工 具ナデ	ナデ	にぶい黄 褐色	4mm以下の褐色光沢粒・褐色光 澤粒・黑色粒、1mm以下の黒褐色光 澤粒を含む		黒褐色着しい ・反転復元	
127	28	F	F	弥生 土器	甕	頭部～ 外部		Va	(7.8)		斜方向の工 具ナデ	多方向の工具 ナデ	明黃褐色	5mm以下の褐色光沢粒・黑色光 澤粒・黑色粒、1mm以下の黒褐色光 澤粒を含む		黒褐色着しい ・反転復元	
128	552	F	I	弥生 土器	高坏	口縁～ 外部		IVb/ Va	(31.0)		横方向のミガキ	斜・横方向の ミガキ	にぶい黄 褐色	2mm以下の黒褐色光沢粒・白色光 澤粒・反転褐色光沢粒・にぶい赤 褐色光澤粒、微細な透明光沢粒を含 む		黒褐色の一部 に黒褐色 の付着あり ・反転復元	

レイア ウ番 号	遺物 番号	出土地 点(更 後)	出土地 点(原 始)	種別	器種	部位	出土 状様	出土 層位	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		地土の特徴	備考	
									口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
129	537	F	I	弥生 土器	高坪	口縁		Va				横方向のミガ キ、工具ナデ 後土ナデ、斜方 向の工具ナデ	北ガキ	にぶい黄 緑	緑	2mm以下の赤褐色・にぶい透明 光沢粒。1mm以下の黒色光沢粒 を含む		
130	87	F	H	弥生 土器	高坪	脚部～ 底部		Va		21.0		横方向のミガ キ、すかし丸 鍵方向の工具 ナデ、模ナデ	指伸しによ る心ぼり、瓶方 向のナデ、瓶方 向の工具ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	2mm以下の赤褐色・1mm以下の 黒色粒・透明光沢粒を含む	穿孔4か所	
131	142	F	H	弥生 土器	高坪	脚部部		Va		(17.2)		横方向の工具 ナデ、模ナデ	ナデ	にぶい緑	浅黄緑	3mm以下の灰色粒・白色粒、2 mm以下の黒色光沢粒・白色半 透明粒。1mm以下の透明光沢粒 を含む	反転復元	
132	140	F	H	弥生 土器	高坪	脚部部		Va		(21.6)		横方向のミガ キ、横ナデ	ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	3mm以下の灰色粒・褐色粒、2 mm以下の黒色光沢粒・微細な 透明光沢粒を含む	部分的に黒 色を取り、反転 復元	
133	146	F	H	弥生 土器	不明			Va				ナデ	ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	2mm以下の灰色粒・褐色粒・白 色半透明粒・透明光沢粒・黑色 光沢粒を含む		
148	34	F	F	黑色 土器	坪	底部	SG1	IVa				横方向のミガ キ、ナデ	多方向のミガ キ	灰白・黑	褐灰	1mm以下の褐色粒・微細な透明 光沢粒・灰白色粒を含む		
153	36	F	F	土師器	坪	底部	SG2	IVa		(5.4)		回転ナデ・角 切り底	へら状工具に よる回転ナ デ	にぶい緑	浅黄緑	1mm以下の褐色粒・白色粒・赤 褐色粒を含む		
159	38	F	F	土師器	坪	底部	SG1	IVa		(8.0)		回転ナデ・角 切り底	回転ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	1mm以下の褐色粒・黑色粒・透 明光沢粒を含む	底部付近に スズ付墨の 痕?反転復元	
160	37	F	F	土師器	皿	底部		IVa		(8.0)		横ナデ・糸切 り底	回転ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	1mm以下の褐灰色を含む	反転復元	
174	35	F	F	土師器	皿	口縁～ 底部	SC3	IVa	7.2	4.8	2	へら状工具に よる回転ナ デ・糸切り底	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	4mm以下の赤褐色・1mm以下 の透明光沢粒を含む		

第2表 F地点出土遺物観察表(陶磁器)

レイア ウ番 号	遺物 番号	出土地 点(更 後)	出土地 点(原 始)	種別	器種	部位	出土 状様	出土 層位	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		地土の特徴	備考
									口径	底径	器高	外 面	内 面	輪調	地土調		
149	256	F	F	青磁	碗	底部	SG1				4.4	施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入、 露胎	灰白	精良		反転復元
154	254	F	F	青磁	碗	口縁	SG2					施釉	施釉	灰	精良		反転復元
155	250	F	F	青磁	碗	口縁	SG2	(12.8)				うすい施釉、 貫入	施釉、貫入	灰白	精良		反転復元
156	245	F	F	青磁	碗	口縁～ 底部	SG2	(15.2)				施釉	施釉	オーリーブ 灰	灰	精良	反転復元
161	261	F	F	白磁	碗	口縁～ 底部		IVa	(12.2)			施釉、灰胎	施釉	灰白	精良		反転復元
162	262	F	F	白磁	碗	口縁		IVa				施釉	施釉	灰白	精良		反転復元
163	248	F	F	青磁	碗	口縁		IVa	(14.4)			施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入、 露胎	オーリーブ 灰	灰	精良	反転復元
164	251	F	F	青磁	碗	口縁		IVa	11.6			施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入、 露胎	灰	精良		反転復元
165	247	F	F	青磁	碗	口縁		IVa	(12.0)			施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入	灰白	精良		反転復元
166	246	F	F	青磁	碗	口縁		IVb				施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入、 露胎	灰白	精良		反転復元
167	253	F	F	青磁	碗	口縁		IVb	(14.2)			施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入	灰白	精良		反転復元
168	244	F	F	青磁	碗	口縁～ 底部		IVa/ IVb	(15.0)			施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入	黄灰	精良		反転復元
169	258	F	F	青磁	碗	底部		IVb		(6.4)		施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入	オーリーブ 灰	灰	精良	反転復元
178	260	F	F	福器	碗	口縁～ 底部	SC8		(7.9)			施釉	施釉	灰白	精良		反転復元
183	553	F	I	陶器	罐	体形	SE3	(23.4)				自然胎	擦り目	オーリーブ 灰	精良		
187	554	F	H	陶器	碗	口縁～ 底部	SF4	17.5	4.9	4.8		施釉、露胎	施釉、蛇の目 胎	黑褐	精良		
191	243	F	F	福器	碗	口縁～ 底部		IVa	(11.15)	42	5.15	施釉、露胎、 しづき 状の剥離	施釉、貫入、 露胎、目跡	オーリーブ 灰・浅黄	灰白	精良	
192	268	F	F	陶器	碗	口縁～ 底部		IVa	(11.8)	(4.4)	7.25	薄い施釉、露胎	施釉、蛇の目 胎	黑褐	精良		反転復元
193	266	F	F	福器	皿	底部		IVa		(4.2)		施釉、貫入、 露胎	施釉、貫入	灰白	灰白・浅 黄	微細な黑色粒を含む	反転復元

レイアウト番号	遺物番号	出土地点(変更後)	出土地層(調査時)	種別	器種	部位	出土遺構	出土層位	法 量(cm)		手法・特徴・文様ほか		色 調	地土の特徴	備考	
									口径	底径	器高	外 国 内 面				
184	269	F	F	陶器	碗	口縁～底部	IVa	(11.0)			鉄錆による斑點	鉄錆による斑點	オリーブ 黒	にぶい赤 褐色	微細な灰白色粒・黒色粒を含む	反転復元
185	272	F	F	陶器	甕	口縁～底部	IVa	(15.0)			施釉、次締	施釉	灰オーブ 黒	黄灰	精良	反転復元
186	273	F	F	陶器	甕	口縁～底部付近	IVa	(14.0)			露胎、施釉	施釉	オリーブ 黒	褐	精良	反転復元
187	276	F	F	陶器	甕	口縁～底部	Va	(29.5)			施釉、凹線、部分的に露胎	露胎、施釉	黒褐	褐灰	2mm以下の白色半透明粒・黒色粒・褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	反転復元
188	279	F	F	陶器	甕	口縁	IVa	(31.4)			自然胎	自然胎	褐灰・灰 褐	褐灰	1mm以下の白色粒・黒色粒・褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	反転復元
189	283	F	F	陶器	罐鉢	口縁～底部	IVa	(30.2)			露胎	棒子目状の盛り目	オリーブ 黒	にぶい赤 褐色	精良	反転復元
200	275	F	F	陶器	鉢	口縁～底部	IVa	(23.1) (17.3)	8.55	施釉、凹線	施釉	褐灰	にぶい赤 黒	2mm以下の黒色粒・褐色粒・黒色光沢粒・透明光沢粒・1mm以下の白色粒、微細な透明光沢粒を含む	反転復元	
201	17	F	F	瓦質土器	鉢	口縁～底部	IVa	(15.0)			ナデ、工具による横方向のナデ	ナデ、横方向のナデ	にぶい褐	にぶい褐	4mm以下の暗褐色・褐色・灰白褐色を含む	外側にスス付有・反転復元
202	287	F	F	土師質土器	鉢	口縁～底部	IVa	(18.6) (16.6)	3.8	横ナデ、横方向の工具による回転ナデ	横方向の回転ナデ	灰白	褐灰	2mm以下の黒色光沢粒・1mm以下の褐色粒・灰色粒、微細な透明光沢粒を含む	全面的にスス付有・反転復元	
203	286	F	F	陶器	皿	口縁～底部	IVa	(14.3) 13.1	1.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	褐	灰褐	微細な灰白色粒・黒色粒を含む	反転復元	
204	33	F	F	土師質土器	土瓶	底部	Va				ナデ、削り面、端付け縫	回転ナデ	にぶい 褐	にぶい 褐・褐灰	3mm以下の褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	

第3表 F地点出土石器計測表

レイアウト番号	器種	出土地点(変更後)	出土地層(調査時)	出土遺構	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
10	礎	F	I	SA1	埋土	21.00	10.30	8.70	3060.00	砂岩	
11	台石	F	I	SA1	埋土	20.60	10.30	6.30	2075.00	砂岩	
12	礎	F	I	SA1	埋土	20.20	10.80	8.90	2385.00	砂岩	
13	礎	F	I	SA1	SA1	18.30	9.20	8.30	2006.40	砂岩	
14	鍛石製品	F	I	SA1	埋土	14.70	11.20	7.60	385.00	鍛石	
54	台石	F	H	1号土器層	埋土	22.45	21.35	4.15	2963.10	砂岩	
134	打製石礎	F	F		Va	1.75	1.35	0.40	0.76	チャート	
135	打製石礎	F	I		Va	2.00	1.60	0.30	0.74	チャート	
136	磨製石礎	F	F		Va	1.40	1.65	0.20	0.44	真石	
137	磨製石礎	F	F		Va	0.90	2.30	0.15	0.54	真石	
138	磨製石礎	F	F		Va	2.30	2.30	0.30	1.82	真石	
139	石磨丁	F	H		Va	4.10	9.25	0.50	30.80	真石	
140	石磨丁	F	H		Va	5.85	10.90	0.55	63.30	真石	
141	打製石斧	F	H		Va	5.90	5.80	1.40	57.20	砂岩	
142	打製石斧	F	I		Va	10.80	7.95	1.35	132.90	砂岩	
143	打製石斧	F	F		Va	12.40	7.50	1.90	170.50	砂岩	
144	打製石斧	F	F		Vb	6.10	6.20	0.80	46.20	ホルンフェルス	
145	打製石斧	F	F		Va	7.30	6.00	0.85	45.80	ホルンフェルス	
146	打製石斧	F	F		Va	6.40	4.80	1.05	44.40	真石	
147	敲石	F	F		Va	8.30	5.40	2.70	182.90	砂岩	
150	鍛石製品	F	F	SG1	Va	7.40	5.75	2.50	27.90	鍛石	
151	鍛石製品	F	F	SG1	Va	10.40	7.35	3.70	62.10	鍛石	

レイアウト番号	器種	出土地点(変更後)	出土地点(調査時)	出土遺構	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
152	砥石	F	F	SG1	Va	7.00	7.00	2.30	163.10	砂岩	
157	軽石製品	F	F	SG2	Va	10.50	9.80	4.90	140.00	軽石	
158	砥石	F	F	SG2	Va	5.40	3.20	1.10	25.00	真岩	
178	玉	F(S-O)	SC4	Va	0.95	0.95	0.60	0.78	ガラス		
177	玉	F(S-O)	SC4	Va	1.00	1.00	0.60	1.22	ガラス		
184	軽石製品	F	I	SE1	Va	8.90	4.40	3.60	36.80	軽石	浮子
185	軽石製品	F	I	SE1	Va	11.80	6.30	2.80	70.90	軽石	
186	磨歎石	F	I	SE2	Va	10.70	10.20	4.45	876.50	安山岩	
188	磨歎石	F	H	SF4	Va	11.10	8.90	4.30	588.50	砂岩	
189	台石	F	H	SF4	Va	29.90	22.30	6.90	9000.00	砂岩	
190	砥石	F	H	SF4	Va	17.00	3.65	4.30	292.30	砂岩	
205	砥石	F	F		Va	11.60	7.90	4.00	519.40	砂岩	
206	砥石	F	F		Va	11.85	3.50	7.00	385.00	砂岩	
207	砥石	F	F		Va	9.60	5.50	0.30	23.25	真石	
208	砥石	F	F		Va	3.20	3.60	0.30	5.40	真石	

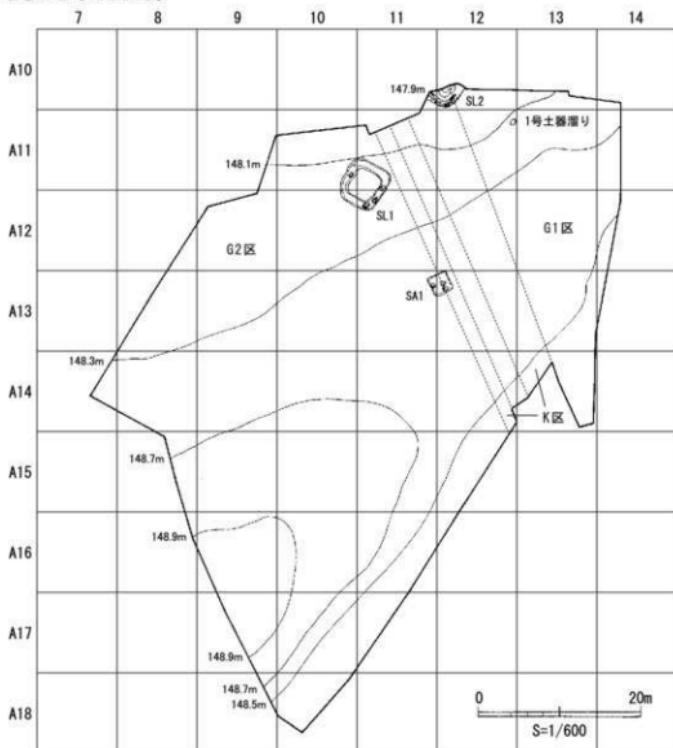
第4表 F地点出土銭貨觀察表

レイアウト番号	器種	銭貨名	出土遺構	出土地點(変更後)	出土地點(調査時)	銭径(cm)	銭孔径(cm)	重量(g)	国名年号	鋳造年号間	背文
170	銭貨	洪武通宝	SC1	F	F区(x-k)	2.30	0.50	2.80	明	1368-1393	-
171	銭貨	洪武通宝	SC1	F	F区(x-k)	2.40	0.60	2.10	明	1368-1393	-
172	銭貨	洪武通宝	SC1	F	F区(x-k)	2.30	0.60	1.80	明	1368-1393	-
173	銭貨	錢文不明	SC1	F	F区(x-k)	2.30	(0.60)	1.30			-
175	銭貨	寛永通宝?	SC4	F	F区(x-a)	2.30	0.60	1.80	寛永	1638-1659	-
179	銭貨	寛永通宝	SC7	F	F区(x-a)	2.40	0.60	2.40	寛永	1638-1659	-
180	銭貨	寛永通宝	SC7	F	F区(x-a)	2.40	0.50	3.50	寛永	1638-1659	-
181	銭貨	寛永通宝	SC7	F	F区(x-a)	2.40	0.60	2.00	寛永	1638-1659	-
182	銭貨	寛永通宝	SC7	F	F区(x-a)	2.30	0.60	2.50	寛永	1638-1659	-
209	銭貨	寛永通宝		F	H区	2.80	0.60	5.08	寛永	1638-1659	-
210	銭貨	寛永通宝		F	F区	2.40	0.60	2.69	寛永	1638-1659	-
211	銭貨	錢文不明		F	F区	2.30	0.65	2.04			-
212	銭貨	一錢		F	F区	2.30	-	3.60	大正		
213	銭貨	五銭		F	F区	1.90	(0.50)	1.93	大正	大正11年	

第2節 G地点（G1・G2・K区）の調査

1 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物跡1基、周溝状遺構2基、土器溜り1基が確認された。弥生時代の遺構・遺物は1次調査区（F地点）に隣接した調査区北側に集中している。そのうち竪穴建物跡と周溝状遺構1基は1次調査と2次調査の掘削範囲にまたがって確認された。周溝状遺構2基はF地点で検出された1号周溝状遺構と同じく標高約148m付近に立地している。検出された遺構は弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

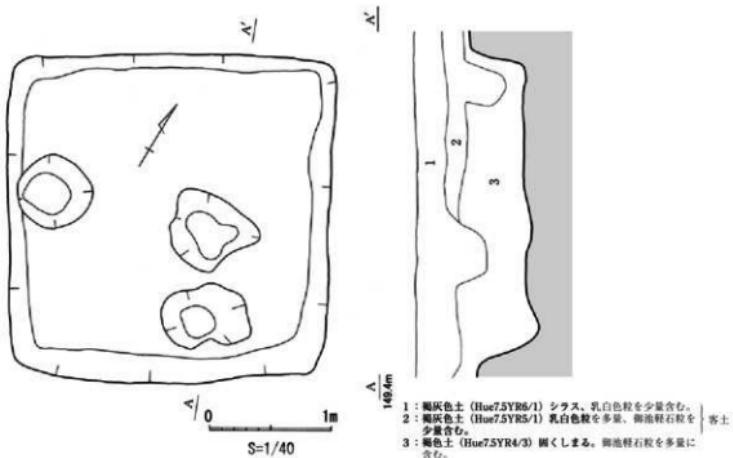


第40図 G地点弥生時代遺構分布図

(1) 竪穴建物跡（竪穴状遺構）

1号竪穴建物跡（S A 1 第40・41図）

1号竪穴建物跡は調査区中央部にあたるA13-11（1次調査G2区）からA13-12（2次調査K区）グリッドにかけての範囲に位置する。V層上面での検出であり、1次調査でプランの約70%が確認された。平面プランは長軸2.73m×短軸2.65mの隅丸方形を呈する。東側の床面には建物跡に伴うとみられるピット2基が確認された。床面付近の埋土から弥生土器の小片が出土している。2次調査で確認され



第41図 G地点 1号竪穴建物跡平面図・土層断面図

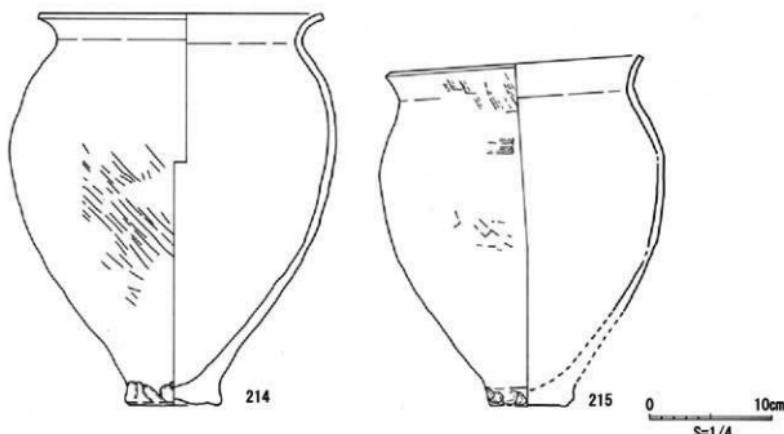
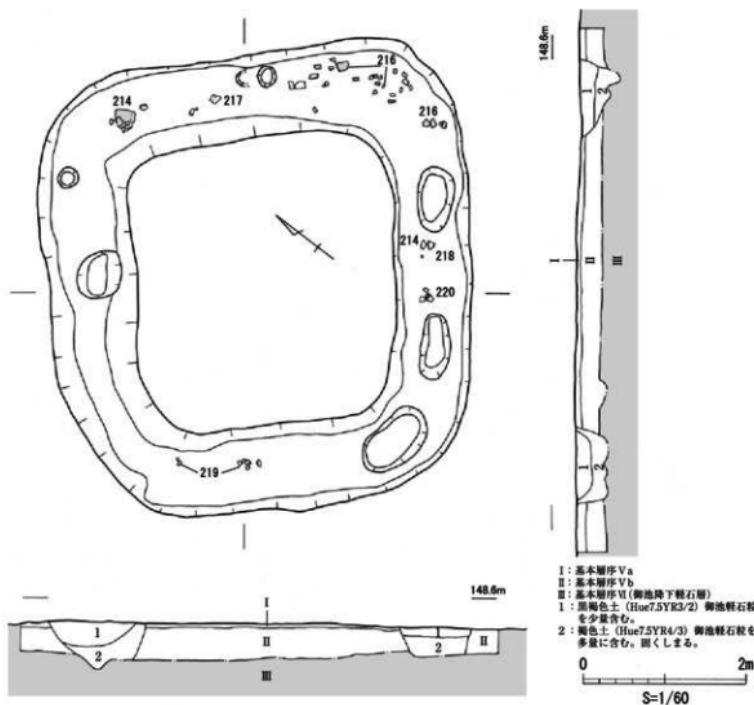
た範囲の床面の埋土を対象にフローテーション作業を行った。分析結果は第IV章を参照されたい。

(2) 周溝状遺構

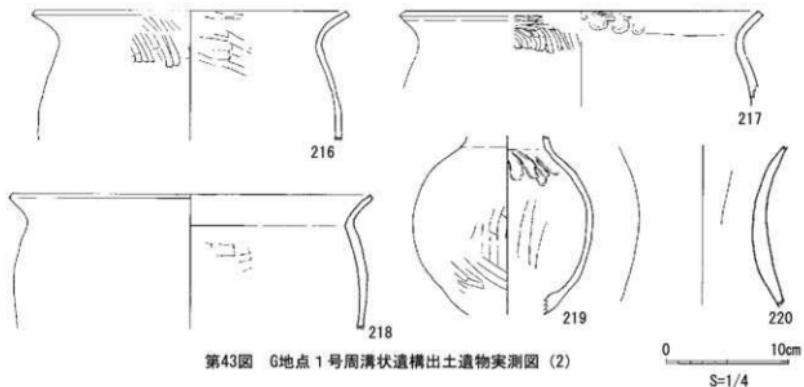
1号周溝状遺構 (S L 1 第40・42図)

1号周溝状遺構は、G地点北側(旧G 2区)、A11-10からA12-11グリッドの範囲に位置する。標高は約148.2mである。平面プランは、長軸約5.58m×短軸約5.2mの隅丸方形を呈する。周溝は幅0.95~1.05mで、検出面からの深さは最深部で0.5mである。埋土は大きく2層に分かれる。周溝を掘削する際、検出面からVI層(御池降下軽石層)上位まで約0.4m掘削した後、15~20cm程度御池降下軽石を入れたと考えられ、貼床状に硬化している。溝の掘削時床面の南西側に深さ約25cmの楕円形のピットが3か所確認された。ピット内の埋土も御池降下軽石を含み硬い。遺物は溝埋土の黒褐色土(1層)から出土し、貼床の硬い褐色土(2層)からの出土は認められない。土器は溝の北東部と南東部に集中しており、北東部で微量の炭化物が検出された。周溝の土層ベルト4か所の埋土の上層と下層についてはサンプリングしてフローテーションを行った。5mmのふるいで一次選別をした後フローテーション作業を行った。1号周溝状遺構の南東隅は1号溝状遺構によって切られている。

214~218は甕である。口縁部は緩やかに「く」の字状に外反する。214・215は胴部最大径を有する箇所周辺に顕著なスス付着が認められる。底部外面には指押さえの痕跡がみられる。216は口縁部外面のみススが付着する。内外面は工具ナデの後、指ナデを施す。217は内外面にスス付着が認められ、口縁部内面は指ナデによる鈍い稜が形成される。218の内外面は工具による粗いナデ調整である。219は壺である。小さめの底部から内湾気味に立ち上がり胴部は球形状を呈する。内面に下方から上方へナデ調整がみられる、内外面ともに黒斑がみられる。底部内面には粘土の縫ぎ目がみられ周囲をナデ調整した結果、中央部がもり上がる。220は器台である。内外面に粗いナデ調整が施される。



第42図 G地点 1号周溝状遺構平面図・土層断面図・出土遺物実測図(1)

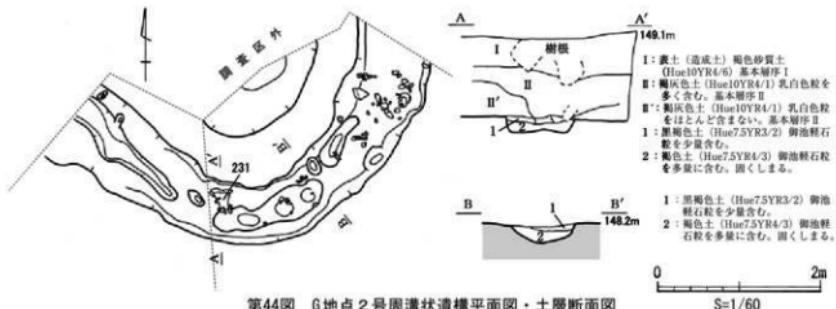


第43図 G地点 1号周溝状遺構出土遺物実測図 (2)

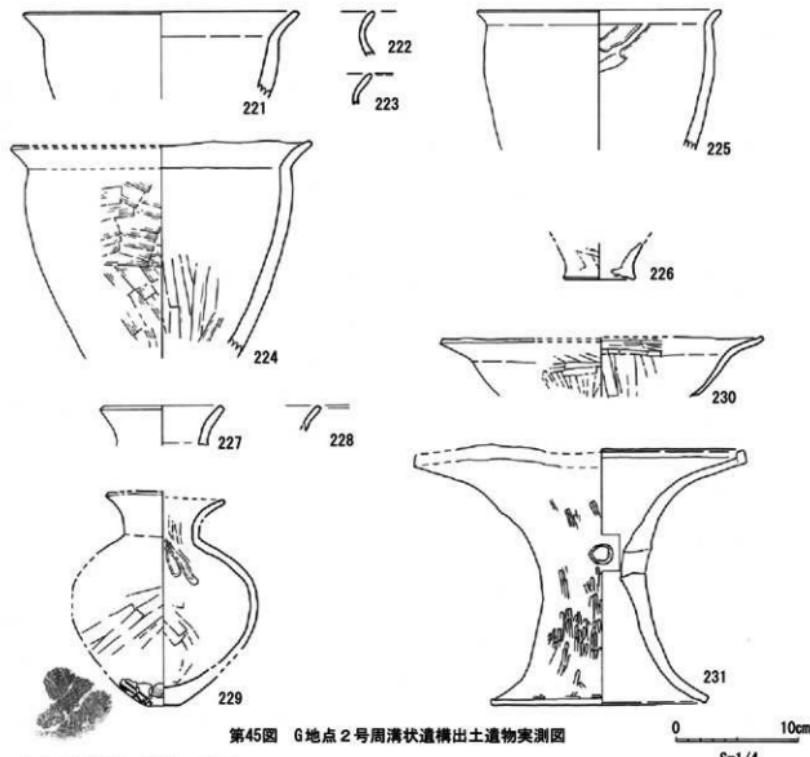
2号周溝状遺構 (S L 2 第40・44図)

2号周溝状遺構は、G地点北側(1次調査: G1区・2次調査: G2区)にまたがって確認された。1号周溝状遺構の北東約10mに位置し、標高約148mの地点にある。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、遺構の2/3以上は都城市道志比田和田線の下に延びている。周溝は幅0.85~1.15mで、検出面からの深さは最深部で0.43mである。埋土は大きく2層に分かれる。周溝を掘削する際、掘方として検出面からVI層(御池降下軽石層)上位まで約0.4m掘削した後、10~15cm程度御池降下軽石を入れたと考えられ貼床状に硬化している。周溝の南東側を中心に遺物の出土がみられ、また底面に長楕円形の土坑が検出された。

221~225は甕である。口縁はゆるやかに「く」の字状に外反し端部は丸みを帯びる。221は外面全体に顎著なスヌ付着がみられる。224の胴部内面には下から上方向に工具ナデが施され、口縁付近は横方向の工具ナデ後を指ナデ調整し稜を作り出す。225は口縁部外面に黒斑が認められる。226はやや上げ底状になる甕の底部である。227~229は壺である。229は小さな平底の底部から内湾しながら立ち上がる。頸部はしまり、口縁は直に延びて外反する。底部に黒斑と2本の弧状の線刻が認められる。230は高杯である。頸部で屈曲し口縁部に向けて大きく開く。口縁端部は平坦に面取りされる。231は器台で、3か所に円形透かしを有する。内外面はミガキ調整が施される。外面に赤色顔料の痕跡が観察される。



第44図 G地点 2号周溝状遺構平面図・土層断面図

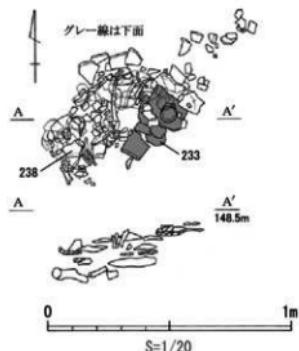


第45図 G地点2号周溝状遺構出土遺物実測図

(3) 土器溜り (第40・46図)

1号土器溜り

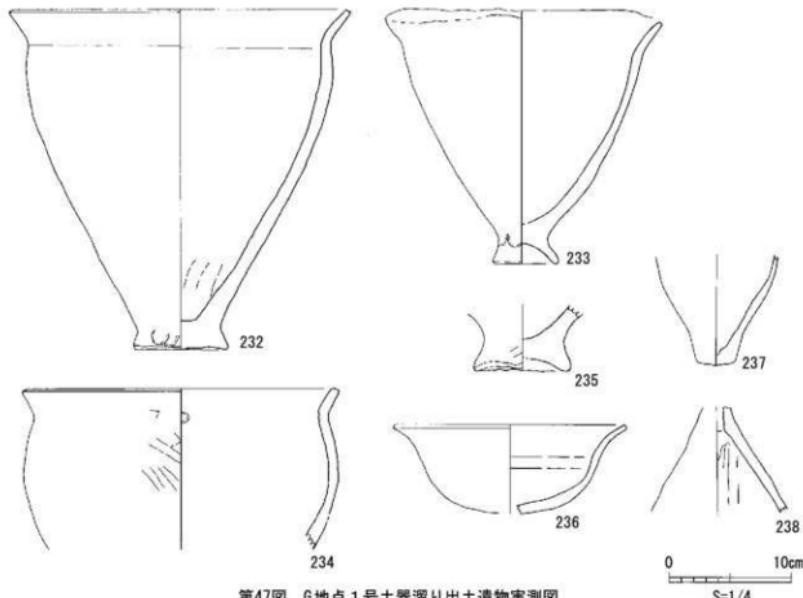
1号土器溜りは2号周溝状遺構の東約4mに位置する。長軸0.62m×短軸0.48mを測る。Va層を掘削中に確認された。土器が集中する範囲の精査を行ったものの掘り込み等は確認されなかった。遺物はまとまって出土しており一括性が高いものと考えられる。232～235は甕である。232はやや上げ底気味の底部から直線的に立ち上がり、口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反する。口縁端部は平坦である。外面胴部半と内面にススの付着が認められる。233は上げ底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁はゆるやかに外反する。外面は底部付近から口縁部にかけて約8cm幅の帯状の黒斑がみられる。外面底部は顕著な指壓さえにより外方向へ開く。234は胴部が張る器形となる。口縁端部



第46図 G地点1号土器溜り平面図・断面図

部は平坦に仕上げられ、内面には斜方向の工具ナデが施される。235は上げ底で端部は直線的に開く。236・238は鉢である。236は口径18.8cmの鉢である。内外面は丁寧な工具ナデ調整を施す。237は小さな平底の小形の鉢である。底部付近に黒斑がみられる。238は高坏の脚部である。外面は風化のため明瞭ではないが、赤色顔料と考えられる痕跡が観察される。

2号周溝状遺構との間で甕(224・232~234)、高坏238の接合関係が認められた。

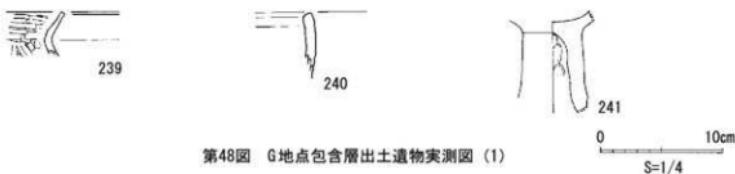


第47図 G地点1号土器溜り出土遺物実測図

S=1/4

(4) 包含層出土の弥生土器 (第48図 239~241)

建物等の基礎による削平や擾乱により遺物の出土は少ない。239は甕の口縁部で、「く」の字状に外反する。内面は顕著な工具による調整痕がみられる。240は鉢である。内外面ともにナデ調整が施される。241は高坏の脚部である。内面に指ナデの痕跡がみられる。

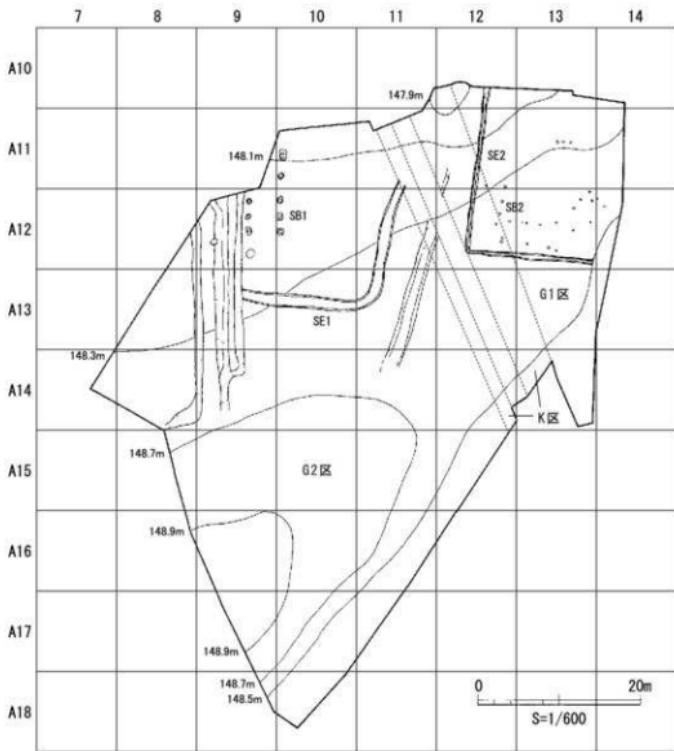


第48図 G地点包含層出土遺物実測図(1)

S=1/4

2 近世以降の遺構と遺物

G 地点における近世の遺構として、掘立柱建物跡 2 棟と区画の一部と考えられる「L」字を呈する溝状遺構 2 条を検出した。また、調査区西側で確認された溝 4 条については近～現代の所産である。

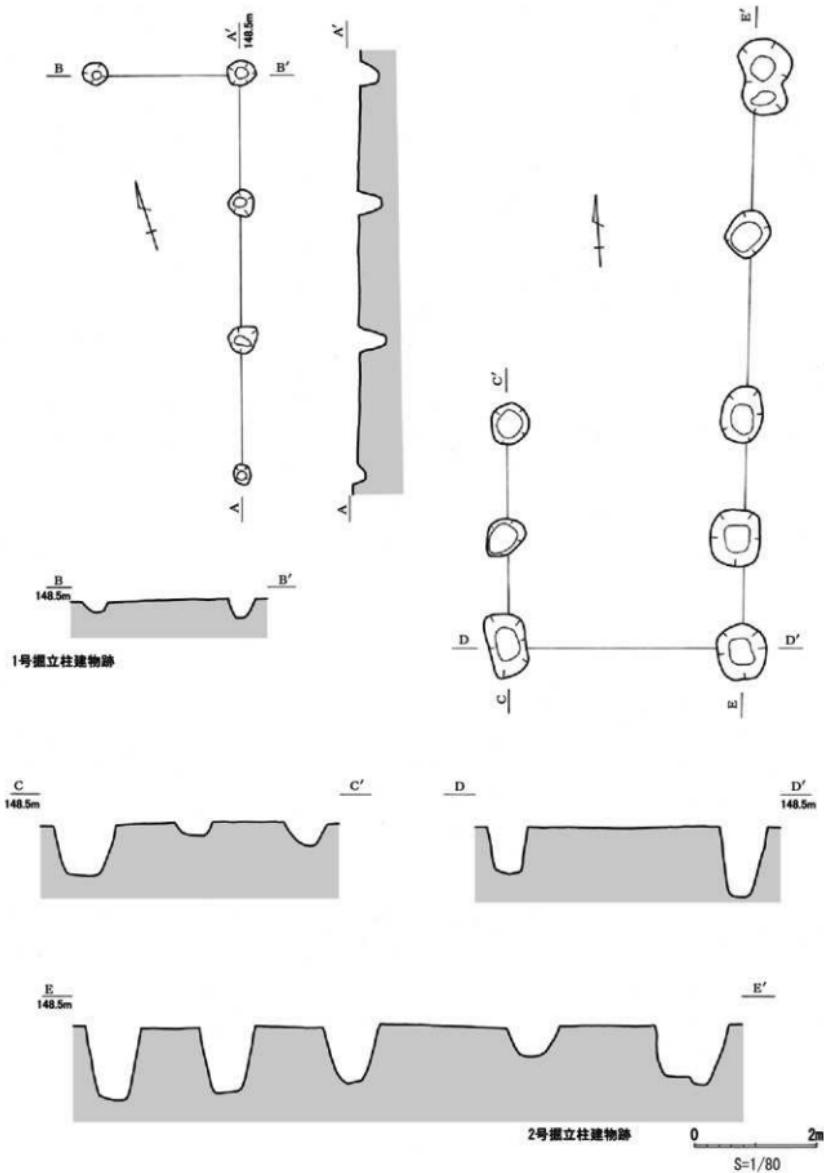


第49図 G 地点近世以降の遺構分布図

(1) 掘立柱建物跡（第49・50図）

1号掘立柱建物跡（SB1 第49・50図）

近世に属すると考えられる掘立柱建物跡は G 地点北東部（旧 G 1 区）の A12-126 グリッドで検出された。1 号溝状遺構の東側に位置し、残存する範囲で桁行 3 間以上 × 梁行 1 間以上、主軸は $N-17.5^{\circ}-E$ を指向する。桁方向の柱間は約 2.35m。柱穴の検出面からの深さは約 14～40cm である。部分的な確認となつたため詳細な規模は不明である。図化はできていないが、柱穴の埋土内から土師器小片が出土している。



第50図 G地点 1号・2号掘立柱建物跡平面図・断面図

2号掘立柱建物跡（S B 2 第49・50図）

2号掘立柱建物跡はG地点西側（旧G 2区）のA12-9グリッド付近に位置する。当初、平面規模から土坑と考え調査を進めていたものが、南北方向に並んで確認されたため掘立柱建物跡と認定した。残存する範囲で桁行4間以上×梁行1間以上である。桁方向の柱間平均値は約1.8m、梁方向約3.8m。柱穴の断面は台形状を呈し、検出面からの深さは約30~110cmとなる。部分的な確認のため詳細な規模は不明である。國化はできていないが、柱穴の埋土内から肥前系と考えられる碗の小片が出土している。

（2）溝状遺構（第49・51・52図）

1号溝状遺構（S E 1 第49・51図）

1号溝状遺構はG地点（旧G 2区）中央北側で検出された。1号周溝状遺構東側にあたるA11-11グリッドからN-19°-Eを指向し、A13-11グリッドでN-85.5°-Wへ方向を変える。北側については残存が確認できなかった。確認された範囲で長さ約31m、幅1.3~1.5m、検出面からの深さは最深部で約0.21mである。断面は皿状を呈し、埋土は文明降下軽石を含む黒褐色土である。

242~244は肥前系の染付碗である。242・243は外面に弦文・丸文が描かれ、内面には見込みに圓線が巡る。18世紀後半~19世紀。245は皿である。胴部下半が露胎となる。底部に糸切の痕跡がみられる。246は把手状の土製品である。247は鉢である。「L」字状の水平に開く口縁部をもち上面に貝目がある。248は土瓶である。注口部は短く外上方に立ち上がり先端部の屈曲がきつい。249は安山岩製の台石である。表面が使用により浅い段を有し凹む。250・251は軽石製品である。250・251ともに梢円形を呈し、両側縁、裏面に加工の痕跡が認められる。浮子の用途が考えられる。

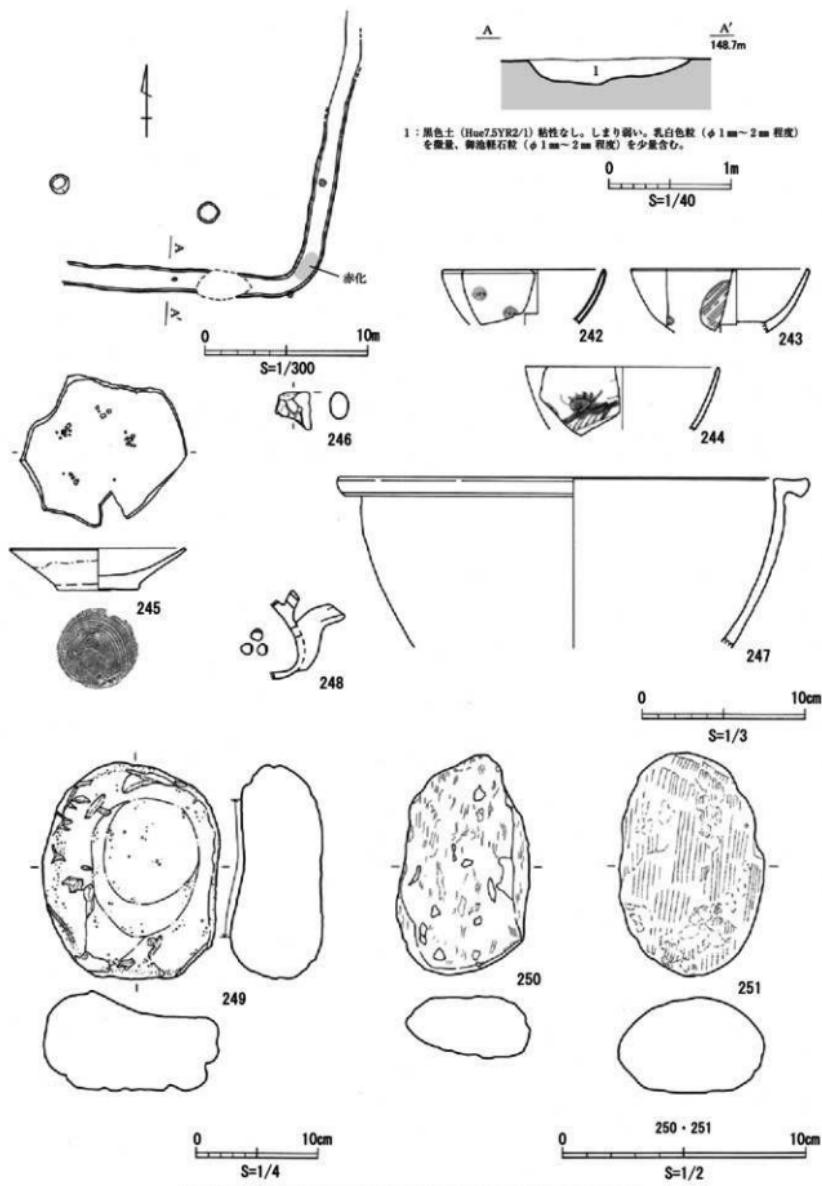
2号溝状遺構（S E 2 第49・52図）

2号溝状遺構はG地点北東側（旧G 1区・K区）で検出された。A10-12グリッドからN-8°-Eに延び、A12-12グリッドでN-95°-Eへ方向を変える。V層を調査中に検出された。東側は搅乱により消失する。検出した範囲内で長さ約36.2m、幅0.5~0.75m、深さは最深部0.25mであり、断面は「U」字状を呈する。252は皿である。外面は口縁部から底部付近まで釉垂れがみられる。見込みに砂目痕が3か所認められる。底面は糸切り離しである。253は捕鉢である。口縁端部を外側に一度折り返し、大きく肥厚させた玉縁状の口縁を有する。内面見込みに砂目の痕跡が認められる。254は土製品である。内面に指頭の痕跡がみられる。255は軽石製品である。縦長で表面は平坦に加工されている。

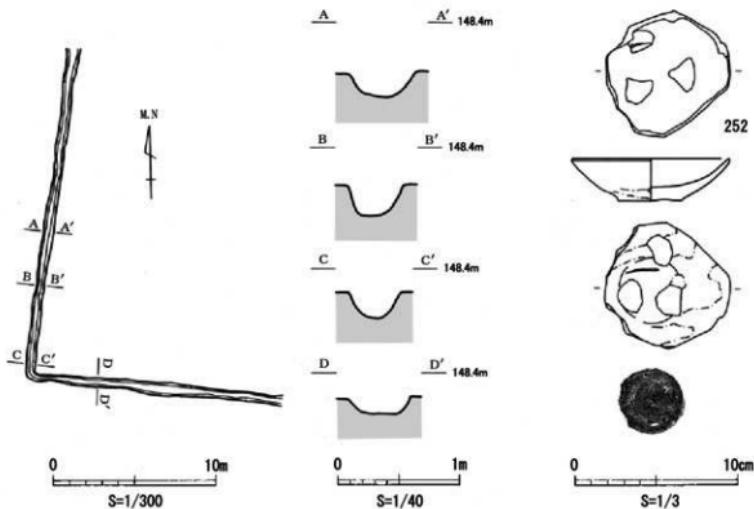
（3）包含層出土の遺物（第53図）

G地点（旧G 1・G 2区）において出土した遺物を掲載した。主体となる時期は近世であるが、時期を遡るもの等も認められるがここに一括する。

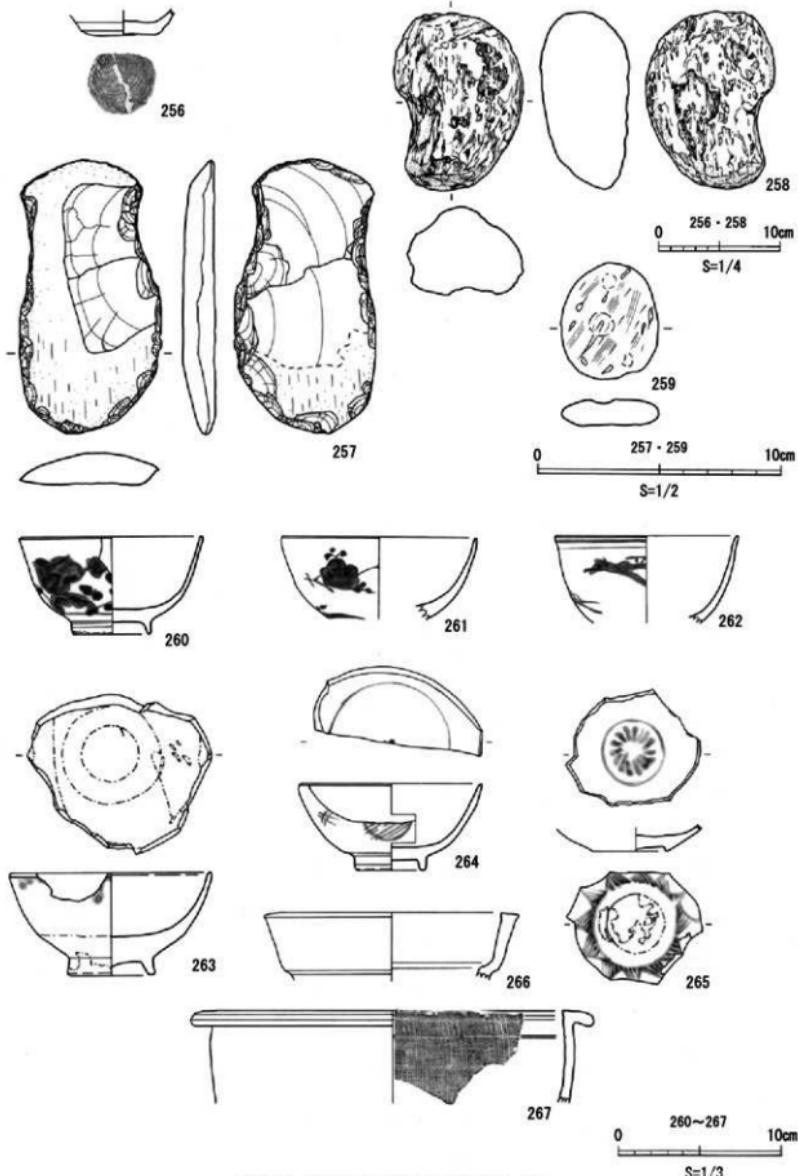
256は底部糸切り離しの土器器壺である。底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。257は砂岩製の局部磨製石斧である。側面より大きく剥ぎ取りその後細かな調整を施している。下部に磨痕が認められる。258・259は軽石製品である。258は平面形が「D」字状を呈する。表裏面に加工痕が認められその部分が凹む。259は梢円形を呈するもので、厚みは約1.1cmである。260~262・264は肥前系の磁器の丸碗である。260・261は雪梅花文、262は草文が表現される。264は外面に丸文、見込みはコンニャク印判で五弁花文が施される。18世紀後半の所産と考えられる。263は碗で見込みは蛇の目釉剥ぎである。265は皿である。底部に釉が付着している。266は鉢である。内外面は赤黒色を呈する。口縁上面は平坦である。267は捕鉢である。内面に7本を1単位とする櫛目がみられる。



第51図 G地点 1号溝状造構平面図・断面図・出土遺物実測図



第52図 G地点 2号溝状遺構平面図・断面図・出土遺物実測図



第53図 G地点包含層出土遺物実測図 (2)

第5表 G地点出土遺物観察表(土器)

レコード番号	遺物番号	出土場所(変更時)	出土地点(変更時)	種別	器種	部位	出土遺構	出土層位	法 異(cm)			手法・調整・文様ほか		色 質		治土の特徴	備考
									口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
214	44	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	SL1	1層	(23.0)	7.4	32.2	工具による痕 ナデ、斜方 向の工具ナデ、 指揮痕	横ナデ、傾方向 のナデ、ナデ のハケ目	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	4mm以下の黒色粒・赤褐色粒、2 mm以下の灰白色粒を含む	
215	40	G	G2	再生土器	裏	口縁～底部	SL1	Va	(20.4)	6.9	(28.9)	横ナデ、傾・斜 方向のハケ目	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	4mm以下の灰褐色粒・褐色粒・灰 白色粒を含む	外部にスス・内 部表面に炭化 物付着
216	59	G	G2	再生土器	裏	口縁～底部	SL1	1層	(25.5)			横ナデ、斜方 向の工具ナデ、 斜方のナデ	横方向のハケ 目(工具によるナ デ)、ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	5mm以下の黒色粒・灰褐色粒、2mm 以下の灰白色粒を含む	外部口縁部に スス付着・反転 復元
217	53	G	G2	再生土器	裏	口縁～底部	SL1	1層	(28.0)			工具による横ナ デ、斜・傾・斜 方向の工具ナ デ	工具による横ナ デ、斜・傾・斜 方向の工具ナ デ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の 灰褐色粒・灰白色粒・透明光沢粒・ 黑色光沢粒を含む	外面一部にス ス付着・内面 広範囲に炭化 物付着・反転 復元
218	55	G	G2	再生土器	裏	口縁～底部	SL1	1層				横ナデ	工具によるナデ	浅黄緑	浅黄緑	5mm以下の灰白色粒、3mm以下の 灰褐色粒・褐色粒・透明光沢粒、 2mm以下の灰白色粒を含む	反転復元
219	46	G	G2	再生土器	裏	底部～底面部付 近	SL1/S SL2	1層				傾方向のナデ、 斜方向のナ デのハケ目	指揮されしほ り、傾方向の ナデ	にぶい黄 緑	浅黄・褐 黄	4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の赤 褐色粒・褐色粒、1mm以下の灰白色 粒を含む	
220	183	G	G-2	再生土器	器台	底部	SL1	Va				ナデ	ナデ、ナデ	浅黄緑	浅黄緑	4mm以下の赤褐色粒・赤褐色粒、 灰白色粒・透明光沢粒を含む	反転復元
221	54	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	SL2	Va	(21.8)			横ナデ	横方向のナデ、 ナデ	灰黄緑	褐灰	2mm以下の透明光沢粒・褐色粒・ 黑色光沢粒を含む	表面全体にス ス付着・内面に 指揮され・反転 復元
222	49	G	G	再生土器	裏	口縁	SL2	Va				ナデ	ナデ	灰白	浅黄緑	2mm以下の灰白色粒・透明光沢粒・ 黑色光沢粒を含む	
223	50	G	G	再生土器	裏	口縁	SL2	Va				横ナデ、傾方 向のナデ	ナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	2mm以下の灰白色粒・透明光沢粒・ 黑色光沢粒を含む	
224	45	G	G/H	再生土器	裏	口縁～底部	SL2/1 号 土器部	Va	24.3			横ナデ、ナデ、 斜・傾・傾方 向のハケ目	横ナデ、傾・傾 向のナデ、ナ デのハケ目	浅黄緑	浅黄緑	5mm以下の赤褐色粒、4mm以下の 灰褐色粒、2mm以下の透明光沢粒、 1mm以下の黑色光沢粒を含む	外表面に黒斑 あり
225	58-1	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	SL2	Va	(19.7)			横ナデ、傾方 向のナデ	横ナデ、傾方 向のナデ	浅黄・暗 灰	灰	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の 黑色光沢粒、1mm以下の透明光 沢粒を含む	反転復元
226	58-2	G	G	再生土器	裏	底部	SL2	Va	(8.0)			斜方内の工具 ナデ、ナデ、ナ デ	ナデ	灰黄	灰	4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の 灰白色粒、2mm以下の透明光沢 粒・黑色光沢粒を含む	
227	51	G	G	再生土器	裏	口縁	SL2	Va	(9.6)			横ナデ、ハケ目 ナデ	ハケ目後ナ デ	にぶい黄 緑	浅黄緑	4mm以下の透明光沢粒、3mm以下の 灰白色粒、2mm以下の透明光沢 粒・黑色光沢粒を含む	反転復元
228	52	G	G	再生土器	裏	口縁	SL2	Va				ナデ	ナデ	にぶい黄 緑	浅黄緑	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の 透明光沢粒を含む	
229	41	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	SL2	Va	9.55	2.65	17.7	横ナデ、ナデ、 斜・傾・傾方 向の工具ナ デ、ナデ、傾 向のナデ	横ナデ、傾・傾 向のナデ、ナ デ、ナデ、傾 向のナデ	にぶい黄 緑	褐灰・浅 黄緑	4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の 灰白色粒、2mm以下の灰白色粒・ 黑色光沢粒を含む	外表面・底部 付近に黒斑あり
230	56	G	G	再生土器	高环	口縁～杯部	SL2	Va				横方向の工具 ナデ、傾・傾方 向のナデ	横方向の工 具ナデ	浅黄緑	浅黄緑	3mm以下の赤褐色粒・灰白色粒・ 2mm以下の透明光沢粒・黑色 光沢粒・軟質赤褐色粒を含む	内部面の口縁 的一部分に黒斑 あり
231	39	G	G	再生土器	器台	口唇部～底部	SL2	Va	(26.9)	17.9	21.4	横方向、傾 向のナデ、 斜・傾・傾方 向のナデ、 指揮痕	横ナデ、ミガ ナデ、指揮痕	浅黄緑	黑	2mm以下の赤褐色粒・黑色粒、1 mm以下の無色透明粒を含む	穿孔4か所
232	42	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	1号 土器部 /SL2	Va	(27.7)	7.6	(27.9)	ナデ、傾・傾 向のナデ、 指揮痕	横ナデ、傾方 向のナデ、指 揮痕	浅黄・暗 黄	にぶい黄 緑	5mm以下の赤褐色粒、1mm以下の 透明光沢粒を含む	外表面ス付着
233	43	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	1号 土器部 /SL2	Va	22.8	5.0	21.0	横ナデ、傾方 向のナデ、指 揮痕	横ナデ、傾方 向のナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	2mm以下の透明光沢粒を含む	
234	57	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	1号 土器部 /SL2	Va	(25.0)			横ナデ、ナデ、 斜・傾・傾方 向のナデ、 指揮痕	指揮痕、横ナ デ、ナデ、傾 向のナデ	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	2mm以下の赤褐色粒・黑色粒、1 mm以下の透明光沢粒を含む	反転復元
235	67	G	G	再生土器	裏	口縁～底部	1号 土器部 /SL2	Va				横方向のナデ、 工具ナデ	ナデ	浅黄・暗 黄	にぶい黄 緑	4mm以下の黒色粒、3mm以下の 赤褐色粒、1mm以下の透明光沢粒 を含む	
236	64	G	G	再生土器	縫	口縁～杯部	1号 土器部 /SL2	Va	(18.8)			横ナデ、工具 によるナデ	横ナデ、工具 によるナデ	縫	縫	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の 黑色光沢粒、1mm以下の透明光 沢粒を含む	反転復元

レイア ウ番 番号	出土地 点(変 更後)	出土地 点(調 査時)	種別	器種	部位	出土 遺構	出土 層位	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか			色 調		出土の特徴	備考
								口径	底径	基高	外 面	内 面	外 面	内 面			
237	193	G	G	男生 土器	鉢	胴部一 底部	1号 土器層	Va		(3.1)	縦方向のナデ	ナデ	にぶい黄 緑	2mm以下の赤褐色粉・にぶい赤 色粒・灰白色粒を含む	黒化著しい・反 転復元		
238	70	G	G	男生 土器	高杯	环形部 脚部	1号 土器層 /SL2	Va			横ナデ	工具によるナデ	にぶい黄 緑	3mm以下の黒色粉・2mm以下の透 明光沢粉・赤褐色粉を含む	外面上に丹塗り?・ 反転復元		
239	48	G	G	男生 土器	裏	口縁		Va			ナデ	横方向・縦方向 の工具ナデ	淡青	3mm以下の黒色粉・3mm以下の透 明光沢粉を含む			
240	47	G	G/G2	男生 土器	鉢	口縁		Va			横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ	にぶい黄 緑	3mm以下の黒色粉・にぶい褐色 粉・2mm以下の透明光沢粉を含む			
241	65	G	G	男生 土器	高杯	环形部 脚部		Va			ナデ	指押えの後 ぼりあり	淡青	1mm以下の黒色粉・微細な透明 光沢粉を含む	反転復元		
246	69	G	G2	土製品	不明	把手	SE1	Va			指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	桜	桜	2mm以下の赤褐色粉・1mm以下の 灰白色粒を含む		
254	68	G	G2	土製品	足二 子アト サ器	口縁一 底部	SE2	Va	(2.9)	(1.2)	横ナデ・ナデ	ナデ	にぶい黄 緑	8.8mmの高脚小器・微細な赤色 粒・透明光沢粉を含む	外面上に丹塗り 反転復元		
256	191	G	G	土師器	壺	环形部 底部		Va		5.4	回転ナデ・角 切り底	回転ナデ	にぶい黄 緑	1mm以下の褐色粉・黒褐色粉・微 細な灰白色粉・透明光沢粉を含む			

第6表 G地点出土遺物観察表(陶磁器)

レイア ウ番 番号	出土地 点(変 更後)	出土地 点(調 査時)	種別	器種	部位	出土 遺構	出土 層位	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか			色 調		出土の特徴	備考		
								口径	底径	基高	外 面	内 面	外 面	内 面					
242	307	G	G2	磁器	碗	口縁一 底部付 近	SE1		(10.0)		施跡	施跡	灰オリーブ	灰オリーブ			反転復元		
243	298	G	G2	磁器	碗	口縁一 底部付 近	SE1		(10.8)		施跡	施跡・團線	灰白	灰白	難良		反転復元		
244	301	G	G1	磁器	碗	口縁一 脚部	SE1		(12.0)		施跡・貞人	施跡・貞人	灰白	灰白	難良		反転復元		
245	313	G	G2	陶器	皿	口縁一 底部	SE1	(10.85)	5.0	2.8	施跡・貞人・各 切り底	施跡・貞人・日 脚	にぶい桜	1mm以下の黒色粉・灰色粉を含む	透明光沢粉を含む		反転復元		
247	317	G	G2	陶器	鉢	口縁一 脚部	SE1		(26.8)		露胎・自然釉	自然釉	オリーブ 墨	灰褐	難良	反転復元			
248	314	G	G2	陶器	土瓶	口縁一 底部	SE1				施跡・露胎	露胎	桜	桜	外面上部に少 々付着				
252	555	G	K	陶器	皿	口縁一 底部	SE2	(9.7)	3.9	2.6	施跡・露胎・日 脚・条切り造	施跡・露胎・日 脚	オリーブ 墨	オリーブ 墨	難良	反転復元			
253	326	G	G1	陶器	擂钵	口縁一 底部	SE2		(25.6)	(14.4)	12.2	施跡・露胎	露胎	にぶい黄 緑	にぶい黄 緑	難良	反転復元		
260	295	G	G	磁器	碗	口縁一 底部			(11.1)	4.7	6.0	施跡・貞人・團 線・二重團線・施 跡	施跡・貞人	明緑灰	灰白	難良	反転復元		
261	300	G	G2	磁器	碗	口縁一 底部付 近			(11.8)		施跡	施跡	灰白	灰白	難良		反転復元		
262	299	G	G2	磁器	碗	口縁一 底部付 近			(11.2)		施跡	施跡	明オリー ブ灰	灰白	難良		反転復元		
263	310	G	G	陶器	碗	口縁一 底部			(12.3)	5.5	6.4	施跡・貞人・火 印・火印・露胎	施跡・貞人・火 印・火印・露胎	明赤褐	黒褐色 にぶい黄 緑	微細な灰白色粉・褐色粉・黑色 粒を含む	反転復元		
264	297	G	G	磁器	碗	口縁一 底部			(11.0)	(4.0)	5.4	施跡・露胎・日 脚	施跡・團線・露 胎	明オリー ブ灰	灰白	難良	反転復元		
265	304	G	G	陶器	皿	底部				4.6		施跡・貞人	施跡・貞人	淡青	淡青	基底部?			
266	316	G	G2	陶器	鉢	口縁			(15.6)		露胎・自然釉	自然釉	赤灰	赤灰	2mm以下の黒褐色粉・灰白粒、 黒色粉を含む				
267	329	G	G2	陶器	擂钵	口縁一 底部			(14.5)		露胎・施跡	施跡・施跡	桜・暗 オーライ ブ灰	にぶい桜	4mm以下の黒褐色粉・灰白粒、 黒色粉を含む				

第7表 G地点出土石器計測表

レイア ウ番 番号	出土地 点(変 更後)	出土地 点(調 査時)	器種	出土遺構	層 位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
249	G	G	台石	SE1	Va	17.90	14.50	8.30	2004.30	安山岩	
250	G	G2	軽石製品	SE1	Va	9.00	5.50	2.50	34.80	軽石	
251	G	G2	軽石製品	SE1	Va	9.10	6.05	3.90	49.50	軽石	
255	G	G2	軽石製品	SE2	Va	16.10	10.40	5.70	177.30	軽石	
257	G	G	周部磨製石斧	Va		11.25	5.85	1.35	120.50	砂岩	
258	G	G2	軽石製品	Va		14.60	10.55	7.40	325.80	軽石	
259	G	G	軽石製品	Va		4.80	4.00	1.10	11.60	軽石	

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

第1節 自然科学分析の概要

平田遺跡から採取された試料について自然科学分析を行った。分析項目は、種実同定および放射性炭素年代測定である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

第2節 種実同定

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2 試料

試料は、G2地区のSL1、G1地区のSL2、K地区のSA1から採取された選別済みの炭化物（種実類を含む：3式、番号1～37）である。試料の詳細を分析結果表に示す。なお、同一番号で複数に区分してあるものは枝番（a～c）を付した（計63ケース）。

3 分析法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4 結果

種実同定の結果、樹木種実3、草本種実5の計8分類群が検出された。分析結果を表8に示し、以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。また、主要な分類群について写真を示す。なお、選別済み炭化物の多くは炭化材であり、炭化植物片、菌類の菌核、岩片、土粒、土器片なども認められた。

〈木本種実〉

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属 写真番号1

核は炭化して黒色で、完形ならば径2.5～4.0cmの広卵体。頂部が尖り1本の明瞭な縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな瘤みと隔壁がある。核は破片で大きさは3.5mm。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ? ブナ科クリ属 写真番号2, 3

果実は炭化して黒色で、完形ならば径2.5～4.5cmの三角状広卵体。頂部は尖り基部は切形、一側面は偏平で反対面は丸みがある。果皮は表面はやや平滑で浅い微細な縦筋がある。果皮内面は粗面で粗い縦筋（種皮）がある。基部全面を占める着点は別組織で、粗く不規則な粒状紋様があり、果皮との接線は波打つ。番号8の炭化種実片は最大2.9mm。クリの果実基部に似るが、微細片で同定根拠に欠けるため？を付している。

イソヤマアオキ (*Cocculus laurifolius* DC.) ツヅラフジ科アオツヅラフジ属 写真番号4

核は炭化して黒色で、長さ2.9mm、幅3.1mm、厚さ1.8mmの偏球体。中央部に馬蹄形状の深い凹みがあ

り、基部は切形。背面觀は長方形。核は硬く厚く、表面は粗面。基部と中央の凹部を除く表面には疣状の小隆起が分布する。アオツヅラフジ (*C. trilobus* (Thunb.) DC.) の核は、隆条が臍から同心円状に列生する点で区別される。

〈草本種実〉

イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属 写真番号5～11

穎(穂)、胚乳(炭化米)は炭化して黒色で偏平な長楕円体。穎(果)は長さ6.0～7.5mm、幅は3～4mm、厚さは2～3mmで、基部に径1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穗軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が綴列する。穎は破片で、複数個の胚乳が癱着した塊状炭化物の表面に付着している(番号5)。穎内に1個入る胚乳は、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。1個は胚部がやや突出し、発芽の可能性がある(番号8)。胚乳表面はやや平滑で、2～3本の縦隆条が確認される。

番号37(SA 3B)の完形胚乳3個の計測値と粒大(長さ×幅)・粒形(長さ/幅)(佐藤, 1988)は、長さ4.0mm、幅2.4mm、厚さ1.8mmの極小型(9.6)・短粒(1.7)(番号6)、長さ4.4mm、幅2.4mm、厚さ1.7mmの極小型(10.6)・短粒(1.8)(番号7)、長さ3.4mm、幅2.1mm、厚さ1.6mmの極々小型(7.3)・短粒(1.6)である(番号8)。

タデ属 (*Polygonum*) タデ科 写真番号12

果実は炭化して黒色で、長さ1.7mm、幅1.2mm、厚さ1.0mmのやや偏平な広卵体。頂部は尖り、花柱基部が残る。基部は切形で、萼を欠損した円形の孔がみられる。果皮表面は粗面。

ダイズ属 (*Glycine*) ? マメ科 写真番号13

種子は炭化して黒色で、完形ならばやや偏平な楕円体。炭化種子は全長の約2/3を欠損し、残存長3.2mm、残存幅4.5mm、残存厚3.1mm。腹面正中線の子葉合わせ目にある臍を欠損し、隣接する幼根の一部が確認される。種皮は薄く表面は平滑で発泡している。

5 考察

種実同定の結果、G2地区SL1の番号3(Eベルト2層)ではイヌタデ近似種、番号4(Eベルト2層)ではクリ?、番号8(Wベルト1層)ではクリ?とイネ、番号28(NEベルト1層)ではイソヤマアオキとタデ属、番号29(NEベルト1層)ではオニグルミが認められた。また、K地区SAの番号36(3A)ではイネとダイズ属?、番号37(3B)ではイネとアキノノゲシが認められた。なお、番号3のイヌタデ近似種と番号37のアキノノゲシは、炭化しておらず保存状況が良好なため、後代の混入と判断されることから考察から除外した。

栽培種としては、番号8、番号36、番号37でイネ(炭化米)が認められた。番号37の完形胚乳3個の計測結果では、短粒で極々小型～極小型に分類される。なお、番号8は胚乳複数個が塊状に密着し、表面に穎(穂)が付着していることから、複数個の穂が接着した状態で熱を受けた可能性が考えられる。

番号36ではダイズ属?が認められた。豆類のダイズ属は、イネとともに植物質食料として利用されていたと考えられ、近年の土器圧痕調査や種実遺体分析事例の蓄積により、縄文時代以降の栽培の可能性が指摘されている(小畠, 2008, 2011, 那須ほか, 2015など)。

その他の分類群では、番号4でクリ?、番号8でクリ?、番号28でイソヤマアオキとタデ属、番号28でオニグルミが認められた。クリは二次林要素の落葉高木、イソヤマアオキは暖地の林内に生育する常緑低木、オニグルミは河畔林要素の落葉高木、タデ属は明るく開けた場所に生育する中生植物である。このうち、クリとオニグルミは、果実内の子葉が食用可能で収量も多いことから、古くから植物質食料として利用されており、縄文時代以降は遺跡出土例が多い（渡辺、1975など）。なお、平田遺跡B地点の住居跡（弥生時代）では、クリの炭化材が出土している（都城市教育委員会、2008）。

【文献】

- 石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑。石川茂雄図鑑刊行委員会、328p.
- 小畠弘己（2008）マメ科種子同定法。「極東先史古代の雜穀3」。日本学術振興会平成16~19年度科学研究費補助金（基盤B-2）（課題番号16320110）「雜穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書、熊本大学埋蔵文化財調査室、p. 225-252.
- 小畠弘己（2011）東北アジア古民族植物学と縄文農耕。同成社、309p.
- 佐藤敏也（1988）弥生のイネ・弥生文化の研究2巻業。金闇 怨・佐原 真編、雄山閣、p. 97-111.
- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻業、雄山閣出版、p. 131-139.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文（2012）ネイチャーウォッチングガイドブック草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－。誠文堂新光社、272p.
- 中山至大・井口ヒ秀・南谷忠志（2010）日本植物種子図鑑（2010年改訂版）。東北大学出版会、678p.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・奥石 甫（2015）炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用、資源環境と人類。第5号。明治大学黒耀石研究センター、p. 37-52.
- 南木謙彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編 第四紀試料分析法、東京大学出版会、p. 276-283.
- 宮崎県埋蔵文化財センター（2007）平田遺跡D地点・E地点——一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1-1。
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集、130p.
- 都城市教育委員会（2008）横市地区遺跡群平田遺跡A地点・B地点・C地点—横市地区県営経営体育施設整備事業に伴う発掘調査報告書—(第2分冊C地点・自然科学分析)。都城市文化財調査報告書第87集、都城市教育委員会事務局文化財課編、141p.
- 吉崎昌一（1992）古代雜穀の検出。月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p. 2-14.
- 渡辺 誠（1975）縄文時代の植物食。雄山閣出版、187p.

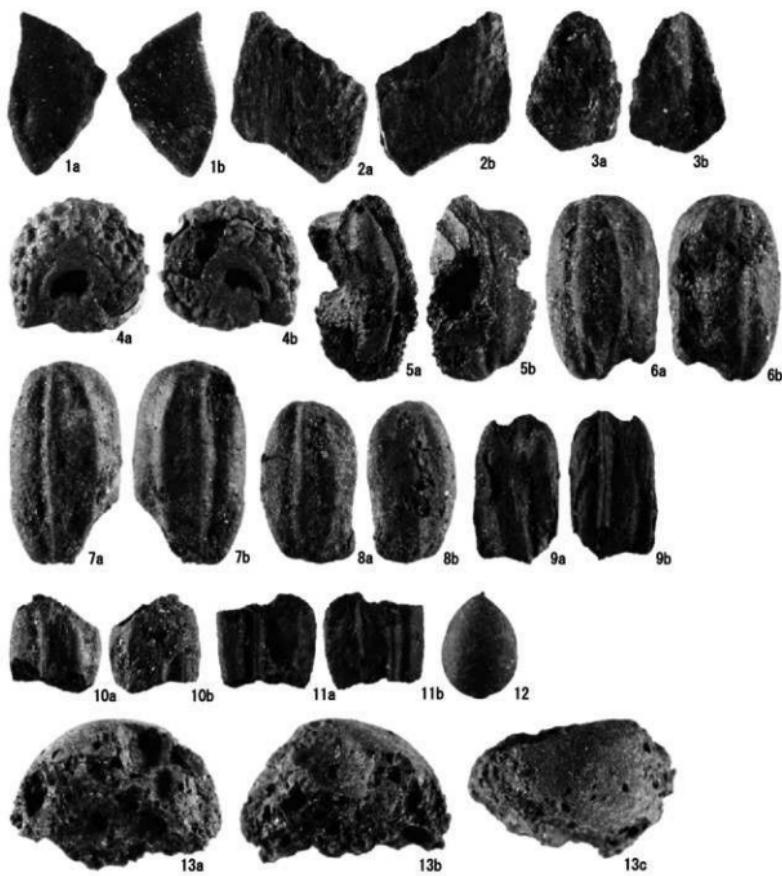
第8表 平田遺跡における種実同定結果

番号	地区	遺構	場所	層位	枝番	分類群	部位	状態	個数	備考				
1	G2	SL1	Eベルト	1層	1a	—				菌核？, 岩片, 土器片				
					1b	—				炭化材, 炭化植物片, 土粒				
					1c	—				菌核				
2	G2	SL1	Eベルト	1層	2a	—				炭化材, 炭化植物片, 菌核, 土粒				
					2b	—				菌核				
3	G2	SL1	Eベルト	2層	3a	イヌタデ近似種	果実	完形	1	炭化材, 炭化植物片, 菌核, 土粒				
					3b	—				炭化材, 炭化植物片, 菌核, 土粒				
4	G2	SL1	Eベルト	2層	4	クリ？	果実？	炭化	破片	1 基部着点？				
					5	—				菌核				
5	G2	SL1	Wベルト	1層	5a	—				炭化材, 炭化植物片, 菌核				
					5b	—				炭化材, 菌核, 土粒				
6	G2	SL1	Wベルト	1層	6	—				炭化材, 岩片				
					7	—				炭化材, 岩片				
8	G2	SL1	Wベルト	1層	8a	—				菌核				
					8b	クリ イネ	果実 頸-胚乳	炭化	破片 塊状	1 基部着点 1 2個体以上癒着				
9	G2	SL1	Wベルト	1層	9a	—				菌核				
					9b	—				炭化材, 菌核, 土粒				
10	G2	SL1	Wベルト	1層	10	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
					11	—				炭化材, 岩片, 土粒				
12	G2	SL1	Wベルト	2層	12	—				炭化材, 菌核, 岩片				
					13a	—				菌核				
13	G2	SL1	Wベルト	2層	13b	—				炭化材, 炭化植物片, 菌核				
					14	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
15	G2	SL1	Sベルト	1層	15	—				炭化材, 炭化植物片, 土粒				
					16a	—				菌核				
16	G2	SL1	Sベルト	1層	16b	—				炭化材, 炭化植物片, 土粒				
					17a	—				菌核				
17	G2	SL1	Sベルト	1層	17b	—				岩片, 土器片				
					17c	—				炭化材, 菌核, 岩片, 土粒				
18	G2	SL1	Sベルト	2層	18	—				炭化材				
					19a	—				菌核				
19	G2	SL1	Sベルト	2層	19b	—				炭化材, 炭化植物片, 菌核, 土粒				
					20	—				炭化材				
21	G2	SL1	Nベルト	1層	21a	—				菌核				
					21b	—				岩片				
22	G2	SL1	Nベルト	1層	21c	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
					22a	—				菌核				
23	G2	SL1	Nベルト	1層	22b	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片				
					23a	—				菌核				
24	G2	SL1	Nベルト	2層	23b	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
					23c	—				炭化材				
25	G2	SL1	Nベルト	2層	24	—				菌核				
					25a	—				炭化材, 炭化植物片				
26	G2	SL1	NEベルト	1層	25b	—				菌核				
					26a	—				炭化材, 炭化植物片				
27	G2	SL1	NEベルト	1層	26b	—				岩片				
					26c	—				炭化材, 炭化植物片				
28	G2	SL1	NEベルト	1層	27a	—				炭化材, 炭化植物片, 土粒				
					27b	—				菌核				
29	G2	SL1	NEベルト	1層	28a	イソヤマアオキ	核	炭化	一部欠損	1 上記同一個体の可能性				
					28b	タデ属	果実	炭化	破片	5 上記同一個体の可能性				
30	G2	SL1	NEベルト	2層	29a	オニグルミ	核	炭化	破片	1 上記同一個体の可能性				
					29b	—	—	—		炭化材, 炭化植物片, 岩片				
31	G1	SL2	埋土	3層	31a	—				炭化材, 炭化植物片				
					31b	—				岩片				
32	G1	SL2	埋土No8 器台下	3層	32	—				炭化植物片				
					33	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
34	K	SA1	1	3A	34a	—				菌核				
					34b	—				炭化材, 炭化植物片, 岩片, 土粒				
35	K	SA1	2B	3B	35	—				炭化材, 炭化植物片, 土粒				
					36	イネ	胚乳	炭化	破片	1 炭化材, 菌核, 岩片, 土粒				
37	K	SA1	3A	3B	37a	ダイズ属？	種子	炭化	破片	1				
					37b	イネ	胚乳	炭化	完形	1 土粒(?)				
					37c	アキノゲン	果実	炭化	完形	5				
					37d	イネ	胚乳	炭化	一部欠損	2 炭化材, 菌核				
					37e	イネ	胚乳	炭化	破片	1				

-:種実類無し

※年代測定試料

写真1 平田遺跡の炭化種実



1. オニグルミ 横(番号29)
2. クリ? 果実(基部)?(番号8)
3. クリ? 果実(基部)?(番号4)
4. イソヤマアオキ 横(番号28)
5. イネ 頭・胚乳(塊状)(番号6)
6. イネ 胚乳(番号37)
7. イネ 胚乳(番号37)
8. イネ 胚乳(番号37)
9. イネ 胚乳(番号37)
10. イネ 胚乳(番号36)
11. イネ 胚乳(番号37)
12. タデ属 果実(番号28)
13. ダイズ属? 種子(番号36)

2mm (1-2・4~11・13) 1mm (3・12)

第3節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

2 試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	番号13b, SL 1, Wベルト, 2層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 2	番号17c, SL 1, Sベルト, 1層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 3	番号25b, SL 1, Nベルト, 2層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 4	番号26c, SL 1, NEベルト, 1層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 5	番号37b, SA1, 3B	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

第9表 放射性炭素年代測定試料一覧

3 測定結果

加速器質量分析法（AMS : Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

試料 No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 : 年BP (暦年較正用)	暦年代（較正年代）: cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 1	36840	-26.18 ± 0.14	3165 ± 20 (3163 ± 19)	BC 1451-1416 (68.2%)	BC 1496-1471 (17.9%) BC 1465-1408 (77.5%)
No. 2	36841	-27.37 ± 0.18	1955 ± 20 (1956 ± 18)	AD 25-69 (68.2%)	AD 1-85 (95.4%)
No. 3	36842	-22.85 ± 0.23	2500 ± 20 (2499 ± 18)	BC 763-748 (9.0%) BC 685-666 (10.9%) BC 642-587 (34.1%) BC 581-556 (14.2%)	BC 773-730 (18.9%) BC 692-659 (15.9%) BC 651-543 (60.6%)
No. 4	36843	-28.03 ± 0.20	1955 ± 15 (1955 ± 16)	AD 25-70 (68.2%)	AD 5-80 (95.4%)
No. 5	36844	-26.61 ± 0.16	1655 ± 15 (1655 ± 16)	AD 385-415 (68.2%)	AD 346-371 (13.7%) AD 377-423 (81.7%)

第10表 放射性炭素年代測定結果

BP : Before Physics (Present) AD1950基点, cal : calibrated, BC : 紀元前, AD : 西暦

（1） $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の

同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は 1σ (68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素(^{14}C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムは0xCal 4.3である。

暦年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、0xCalの確率法により 1σ (68.2%確率)と 2σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1(炭化材)では 3165 ± 20 年BP(2σの暦年代でBC 1496~1471, 1465~1408年)、No.2(炭化材)では 1955 ± 20 年BP(AD 1~85年)、No.3(炭化材)では 2500 ± 20 年BP(BC 773~730, 692~659, 651~543年)、No.4(炭化材)では 1955 ± 15 年BP(AD 5~80年)、No.5(炭化材)では 1655 ± 15 年BP(AD 346~371, 377~423年)の年代値が得られた。

なお、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

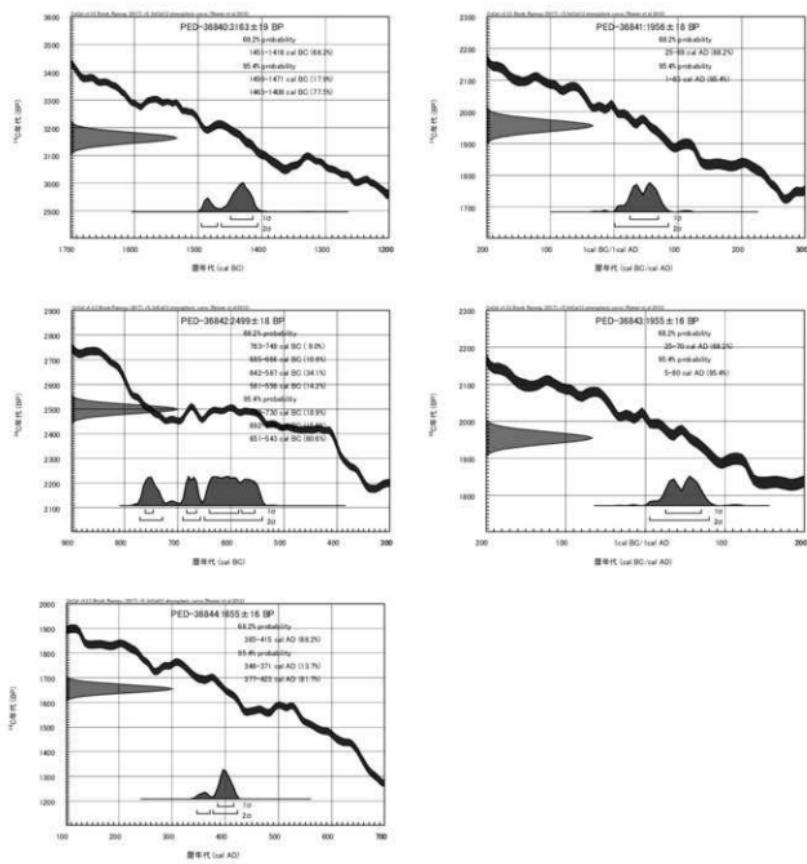
【文献】

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」、日本第四紀学会、p.3~20。

中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代較正、環境考古学マニュアル、同成社、p.301~322。

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337~360.

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0~50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869~1887.



第54図 历年較正結果

第V章 総括

平田遺跡は横市川右岸の義原台地（成層シラス台地）の北端から東流する横市川に傾斜する低位段丘面上に位置する。標高約149mのA・B・E・F・G地点から、沖積段丘のC・D地点間に約8mの比高差がみられる。発掘調査は平成15年度から行われ、途中10年あまりの中止の後、今回のF・G地点までで延べ7地点、面積は45,800m²におよぶ。これまでの調査の結果において、縄文時代早期から近世・近代まで連綿と続く人々の営みが確認されている。平田遺跡（2次）F・G地点は、弥生時代後期の竪穴建物跡や土坑・周溝状遺構、中世～近世の畠跡・道路状遺構、近世の掘立柱建物跡・溝状遺構が確認されている。また、縄文土器、弥生土器、古代～中世の青磁・白磁、土師器、近世の陶磁器、石器、軽石製品などが出土している。ここでは、過年度の調査も踏まえ、遺跡の性格について記述を行う。

1 縄文時代

平田遺跡（2次）調査では、縄文時代の遺物はすべてF地点からの包含層中からの出土である。晚期土器1、2はF地点南東側（旧H区）から出土した。また、図化は行っていないがF地点中央部北側（F区）の下層確認トレンチX～XI層で楕円押型文の小片が確認された。石器としては小形の石鏃134・135が早期、141～145の打製石斧は晩期の遺物と考えられる。隣接地点では西側のA地点で縄文時代後・晩期の土器が、谷を挟んで調査区東にあたるA地点で早期の集石遺構9基や円筒形条痕土器が確認されている。晩期では打製石斧を埋納した土坑や柱穴、組織痕土器や突帶文土器が確認されている。A・C・D・F地点では縄文時代後・晩期の遺物が散見されるものの、谷部にあたるE地点や、F地点より浅いⅧ層上位から湧水が確認されるG地点ではなく、谷上の標高の高いF地点東側に遺構の広がる可能性が考えられる。

2 弥生時代

平田遺跡の弥生時代の遺構分布は第5・40図のとおりである。平田遺跡F地点・G地点では当該期の遺構は竪穴建物跡3軒、周溝状遺構3基、土坑1基、土器溜り4か所が調査区南側の標高の高い箇所で確認された。1号竪穴建物跡は中央部を削平されているため全貌はつかめないが、遺構の外側で南側を除く3か所にピット状の遺構が検出され、西側のピット底面には硬化面が認められた。建物跡の南側ではベッド状の部分も認められていないことから、出入り口としての機能があったものと推定される。F地点の1号周溝状遺構は1号竪穴建物跡と近接した位置で確認された。遺物は周溝の2か所で出土している。出土数が少ないため判然としないが、甕36・37とともに半分に割れた状態で出土し、ともに底部が欠損している。また39の壺は頸部より上部を欠いた状態、41の鉢は伏せたように底部を上にした完形の状態での出土であり、高杯42は脚部のみ出土がみられた。G地点の1号・2号周溝状遺構では底面に楕円形の掘り込みが数箇所確認された。高杯230、器台220・231など祭祀を想起させる遺物の出土も認められる。ともに埋土中から炭化米が出土しており、自然科学分析の結果では1号溝状遺構で確認された炭化した短粒米の中に、胚乳複数個が表面に穎（殻）が付着した状態で塊状に密着したものが認められ複数個の殻が接着した状態で熱を受けた可能性が指摘されている。（第IV章参照。）また、1号溝状遺構からは炭化したクリ（果実）が確認されている。今回の分析では材を特定する分析は行っていないが、A地点8号竪穴建物跡やB地点30・31号竪穴建物跡からクリの炭化材が出土しており、食用として

だけではなく建築材としての利用が想定されている。遺物に関しては既存の土器の編年によると、F地点の1号竪穴建物跡の壺1、1号土坑甕（18～22）・鉢28、1号周溝状遺構壺39・鉢41、一括廃棄の可能性が高い1号土器溜り甕（45・46）・壺（48～52）、2号土器溜り壺（63～65）、3号土器溜り壺69、G地点1号周溝状遺構の甕（214・215）・壺219、2号周溝状遺構壺229・高坪230・器台231などから松永編年（2001）の3～4期、河野編年（2017）のⅢ～Ⅴaに相当すると考えられ、後期後半から終末期に比定される。隣接するE地点の竪穴住居跡も同様の時期と考えられる。AMS法による年代測定では試料No.4の 1955 ± 15 ^{14}C 年B.P.が遺構の年代値を示すものであろう。一方、E・F地点を挟んで東側の東側B地点には中溝式系土器を主体とする集落、西側A地点に山ノ口式系土器を主体とする集落が営まれ、両集落に密接な関係があったことを示す資料も報告されている。A地点に近いF地点西側では、中期後半に迫る土器の出土が確認されたものの同時期の遺構の広がりは確認されていない。こうしたことから、横市川に向かう谷を挟んで中期後半から後期後半まで集落の選地の差異が認められる。

3 中世～近世

（1）墓跡

F地点西側、埋没谷との境付近で、半月状に等間隔で確認された文明降下軽石が埋没した状況で小溝状遺構が確認され、ほぼ同じ単位・同じ方向で走行し断面がU字状を呈することから小溝畠の歛問部分と考えられる。北側は調査区外周の土層断面に文明降下軽石の凹凸が確認されA地点方向に延びていくと考えられる。調査区内では区画を確認するにはいたらなかった。小溝状遺構の南側では、東西に延びる2号道路状遺構の掘削により谷のあがりの北西部を分断している状況でありそれ以上の広がりは確認されなかつた。生産遺構に関しては沖積低地にあたるC・D地点で中世の水田区画が検出されている。

（2）道路状遺構

F地点で検出された1・2号道路状遺構はE地点南側で合流し、SG群1のSG5・SE5と接続することが確認された。（第25図）SG1群は分岐し北東側はC地点のSD01・SD02へ接続する。SD1・2は硬化面を有し、道路状（溝状遺構）は13世紀から15世紀を中心で掘削され文明軽石降下後も使用されていた可能性が指摘されている。SD01・SD02は谷への道路としての機能が高く、E地点のSG5、F地点で確認されたSG1・SG2で囲まれた範囲に掘立柱建物跡等の遺構はみられない。SG1は南東側へ、SG2は西側へ延びていくと考えられ2条ともに地形的に標高の高い調査区外へ延びていく。これらが接続するB・E地点で検出された溝状遺構・道路状遺構は、幅約3～5mと大規模なものであり一過性のものとは考え難い。

【参考・引用文献】

- 松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会
都城市教育委員会 2005『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第68集
宮崎県埋蔵文化財センター 2007『平田遺跡D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
都城市教育委員会 2009『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点（第1分冊 A地点・B地点）』都城市文化財調査報告書第87集
都城市教育委員会 2008『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点（第2分冊 C地点・自然科学分析）』同上
河野裕次2017「宮崎県の様相-宮崎平野南部を中心に-」『第19回九州前方後円墳研究会 長崎大会 九州島における古式土師器発表要旨集・基本資料集』 九州前方後円墳研究会



平田遺跡F地点南側(H区・I区)



1号竪穴建物跡検出状況(北東より)



1号竪穴建物跡遺物出土状況(南東より)



1号竪穴建物跡完掘状況(北西より)



2号竪穴建物跡完掘状況(北西より)

F地点の調査(1)



1号周溝状遺構出土状況(南東より)



1号周溝状遺構完掘状況(北東より)



1号土坑出土状況(北西より)



1号土器溜り検出状況(東より)



2号土器溜り検出状況(北東より)



瓦出土状況(南西より)



石庖丁出土状況1(南西より)



石庖丁出土状況2(南より)

F地点の調査(2)



1号道路状遺構検出状況(北西より)



2号道路状遺構検出状況(南西より)



1号道路状遺構埋土断面(南より)



1号道路状遺構硬化面(北より)



1号道路状遺構完掘状況(北より)



2号道路状遺構完掘状況(北より)



小溝状遺構(竪跡) 検出状況(北西より)



小溝状遺構完掘状況(南東より)



1号土壤墓半截状況(南西より)



1号土壤墓遺物出土状況(南より)



3号土壤墓(南より)と1号土壤墓(奥)



4号土壤墓遺物出土状況(南より)



3号・4号溝状遺構土層断面(南より)



6号溝状遺構土層断面(南より)



1号・2号溝状造構完掘状況(西より)



3号・4号溝状造構完掘状況(南より)



3号井戸跡半裁状況(南より)

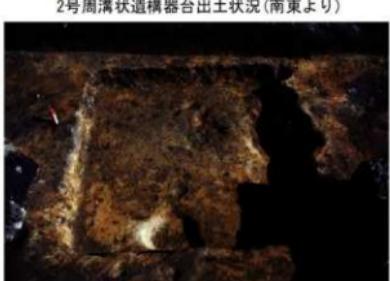


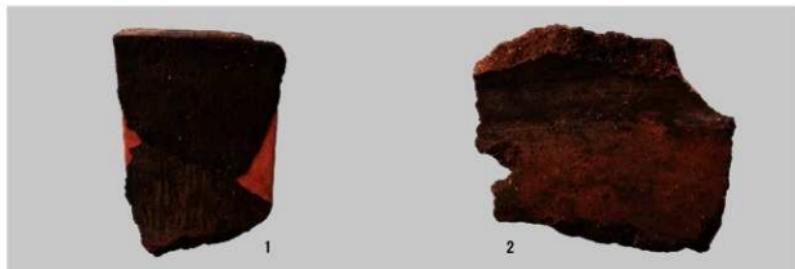
G地点 土層断面



4号井戸跡半裁状況(西から)

F地点の調査(5)・G地点の調査(1)





包含層出土遺物(1・2)



SA1(3~14)



SA1(3・4・6・7)

F地点 包含層出土遺物(1)・弥生時代1号竪穴建物跡出土遺物(1)



SA1 (8・9)



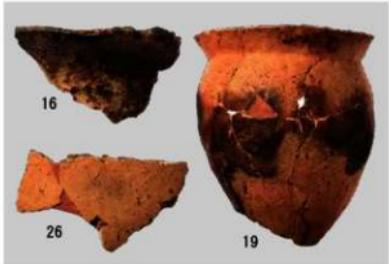
SA1 (10~14)



SC1 (15~35)



SC1 (15)



SC1 (16・19・26)

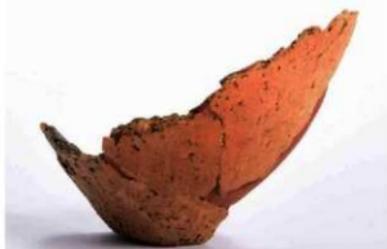
F地点 弥生時代1号竪穴建物跡出土遺物(2)・1号土坑出土遺物(1)



F地点　弥生時代1号土坑出土遺物(2)

図版

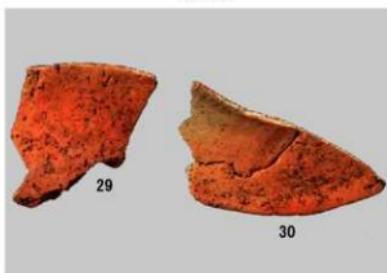
10



SC1 (27)



SC1 (28)



SC1 (29 + 30)



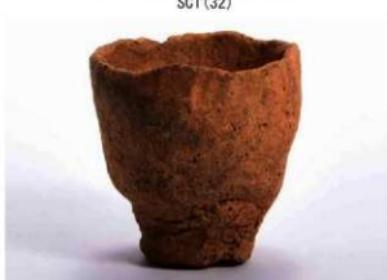
SC1 (31)



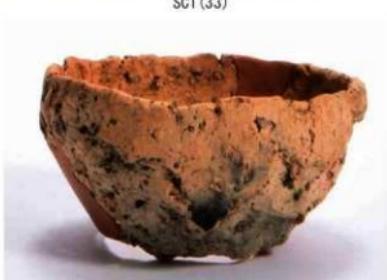
SC1 (32)



SC1 (33)



SC1 (34)



SC1 (35)

F地点
弥生時代1号土坑出土遺物(3)



SL1(36~44)



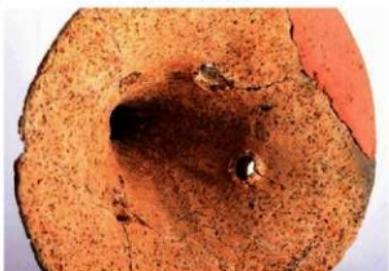
SL1(39)



SL1(40) 底部



SL1(41) 底部



SL1(42) 底部

F地点 弥生時代1号周溝状造構出土遺物



45~54
F地点 弥生時代1号土器窯跡出土遺物(1)



45



46



47



48 底部



49 底部



50



51・52



53

F地点 弥生時代1号土器窯跡出土遺物(2)

図版
14



55~68



55



61・62



63



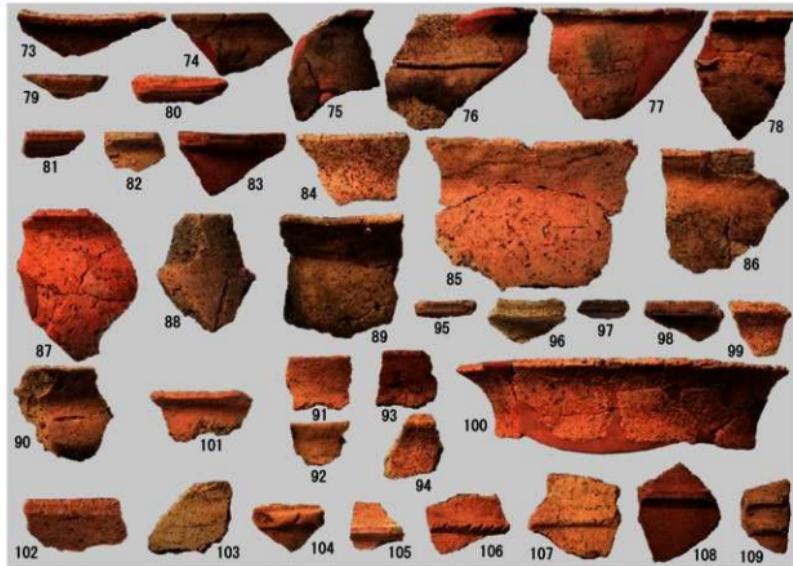
63 底部

F地点 弥生時代2号土器溜り出土遺物



69

70・71・72

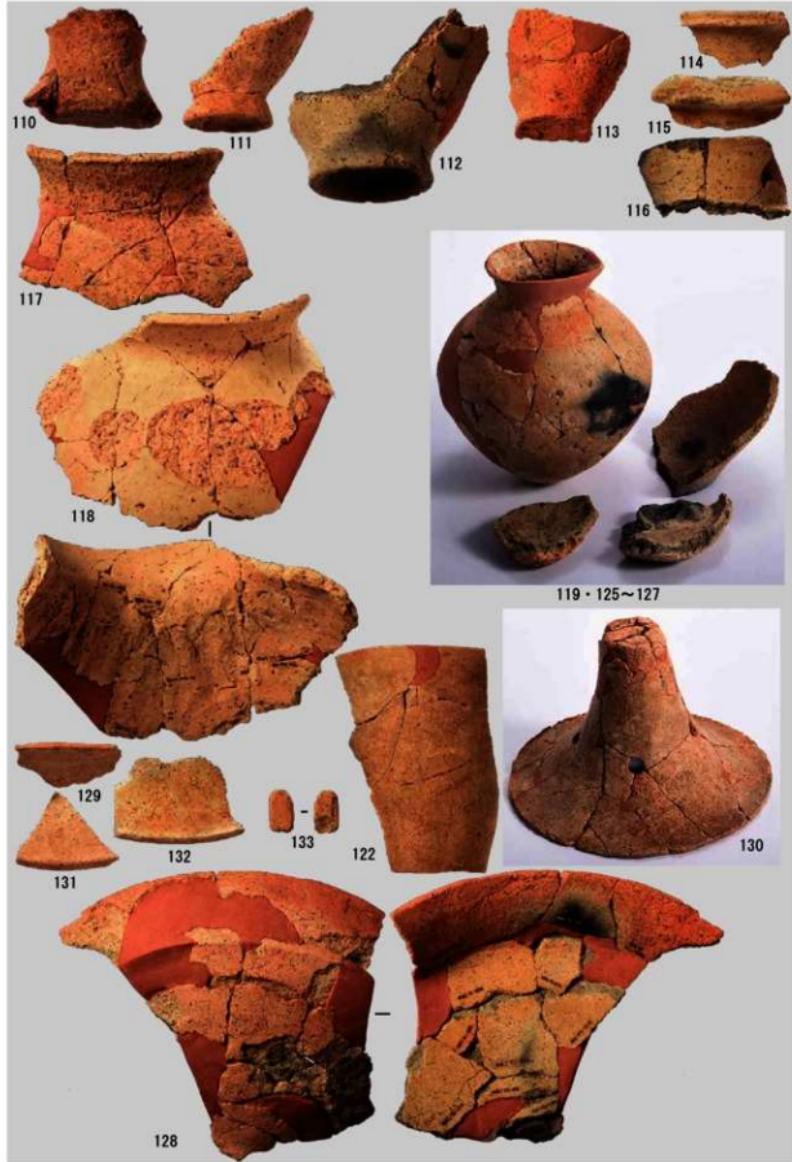


包含層出土遺物 (73~109)

F地点 弥生時代3号土器溜り出土遺物・包含層出土遺物 (2)

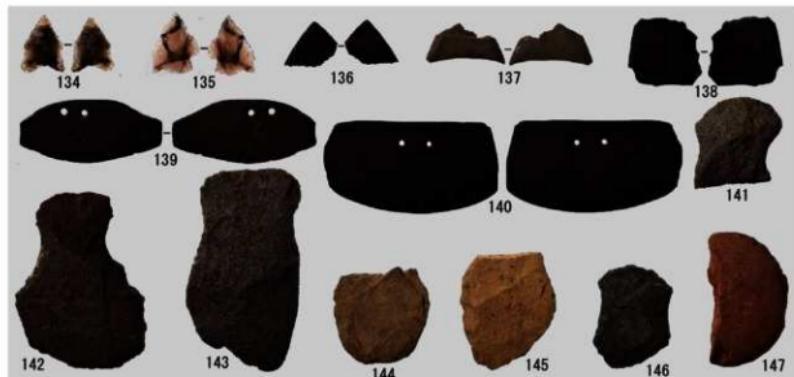
図版

16



包含層出土遺物(110~119・125~133)

F地点 包含層出土遺物(3)



包含層出土遺物(134~147)



SE1出土遺物(148~152)



SE2出土遺物(159~169)

SE2出土遺物(153~158)



SC1出土錢貨(170~173)

SC3出土遺物(175~177)

F地点 包含層出土遺物(4)・溝状遺構・土壤墓出土遺物



178



SE2 出土遺物(178)

SC7 出土銭貨(179~182)



SE1・2 出土遺物(183~186)



SF1~4 出土遺物(187~190)

F地点 土壙墓・溝状遺構・井戸跡出土遺物



193 底部の墨書



包含層出土遺物(191~204)

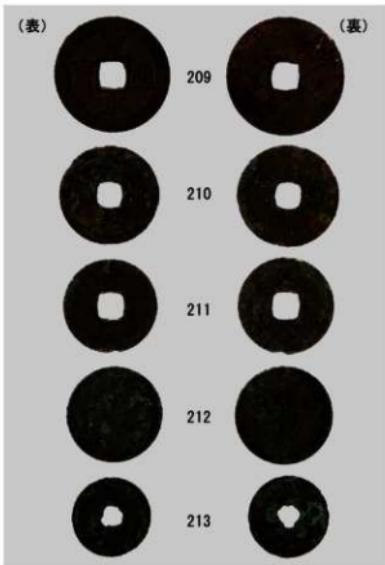


205

206

208

207



209

210

211

212

213

(裏)

近世包含層石器(205~208)

近世包含層銭貨(209~213)

F地点 包含層出土遺物(5)

図版
20



SL1(214~220)



214 底部



215 底部



217 内面



219 内面

G地点 弥生時代1号周溝状造構出土遺物



SL2(221~231)



SL2(221・224・225)

SL2(229)



SL2(230)

SL2(231)

G地点 弥生時代2号周溝状造構出土遺物

図版
22



232～238



232(底部)



233(底部)



237



238

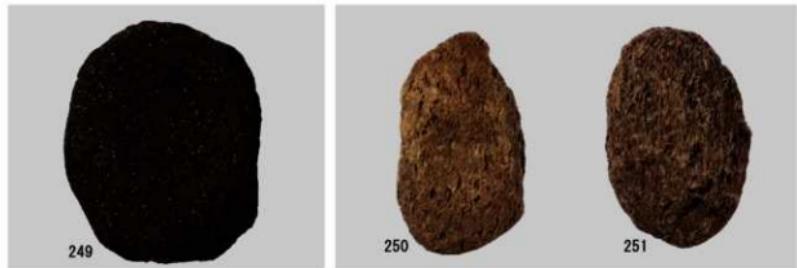
G地点 弥生時代1号土器溜り出土遺物



包含層出土遺物 (239・240・241)



SE1 (242~251)



SE1 (249~251)

G地点 包含層出土遺物 (1)・1号溝状遺構出土遺物



G区 SE2 (252~255)

G区 包含層出土遺物 (256~267)
G地点 2号溝状遺構出土遺物・包含層出土遺物 (2)

報告書抄録

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第247集

平田遺跡F地点・G地点

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5

2019年3月25日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019
TEL(0985)36-1171

印刷 田中印刷有限会社
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL(0985)28-4724

Miyakonojo City

HIRATA Site F • G

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.247

2019

Miyazaki Prefectural Archaeological Center